

---

Una fantasia del vongole    ~ **ボンゴレの幻想    ?世の軌跡** ~

c o c o a

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Una fantasia del von gole ~ ボン  
ゴレの幻想 ~ ？世の軌跡~

### 【Nコード】

N4911N

### 【作者名】

c o c c o a

### 【あらすじ】

ボンゴレ？世の座を継ぎ、高校生になった沢田綱吉はある日突然、発光したボンゴレリングにより、ナッツと共に幻想郷に幻想入りさ  
してしまふ。

そこで綱吉は、？世の軌跡を辿りどんな事を経験し学ぶのか？

なお、設定はもちろん作者のオリジナルです。

epilogue 〰？世の夢跡〰（前書き）

九月という予定でしたが、少し早めて、ついに連載を始める事が出来ました。

これから、僕の真価が試される？

まあ、頑張ってつづけるので

よろしくお願いしますっ！

## epilogue 〰？世の夢跡〰

幻想郷にある、とある平原。

そこには、髪は短く金髪で白いシャツを着た一人の少年と、こちら  
も、髪の色は金色で腰まで届きそうなほどのロングヘア、紫色を  
基調とした肩口が開いた洋服を着ている少女が立っていた。

「いろいろありがとう、紫。

君のお蔭で、僕は此処で色んな事を学ぶ事ができた。」

先に口を開いたのは少年の方だった。

「いいえ、こちらこそ。

私もあなたと居た時間は僅かながらも楽しかったわ。」

少年に紫と呼ばれた少女は手に持っている扇子で口元を隠し、少年  
へと語る。

「……………本当に行ってしまうの？  
ジヨット？」

少年の名はジヨットというらしい。

「……………ああ、僕は此処で経験した事を外の世界で生かしたいんだ。  
……………町の民を守る為に。」

ジヨットは真摯な眼差しで紫を見つめる。

「……………そうね。」

あなたが一度決めた事はどんな事があっても曲がら無いもの。  
……………まあ、それがジヨットの良い所だけでも……………」

紫はジヨットを見て苦笑する。

それにつられ、ジヨットも頬を緩める。

「紫……………じゃあ、そろそろ僕を元の世界に戻してくれ。」

ジヨットはまた真剣な表情へ戻る。

「……………わかったわ。」

紫はそう呟くとジヨットの真下に空間の割れ目を造り、ジヨットをそこに落とす。

「……………ありがとう、紫。」

G i v r o e t e r n a a m i c c i z i a

ジヨットは落ちる間にイタリア語で、何かを呟き、消えていく……

……………

そう、このジヨットこそイタリアで最大勢力を誇る、ボンゴレファミリーの創始者、ボンゴレ<sup>フリーモ</sup>？世にして、後のボンゴレ<sup>デーチモ</sup>？世、すなわち沢田綱吉とその守護者達に大きな影響を与える事になるとは、この時はまだ誰も知るよしは無かった……………

e p i l o g u e    〴〵？世の夢跡〴〵（後書き）

さーで、最初という事で伏線？を張ってみました。

ちなみに、この二人称と一人称は状況に応じて使い分ける予定です。

質問、物語のリクエスト等も応募します。

t a r g e t   r o c k      (前書き)

明日の分という事で、二つ目の投稿。

魔術剣士の方も力入れてやらないとなあ

t a r g e t   r o c k

あの出来事から、時は流れ、  
時代は？世から？世の時代へ……………

ボンゴレ？世、沢田綱吉の自宅にて。

「ふう、やっと終わった。」

高校に（無事）進学した俺、沢田綱吉は勉強机に置いてある今日の分の学校の宿題を終わらせ、椅子に座ったまま背伸びをする。

「駄目ツナにしては早かったな終わるのが早かったな、誉めてやるぞ。」

すると、机の上に座っている、最強の赤ん坊アルコバレーノの一人であり、俺の家庭教師であるリボーンが、自分の相棒である変身トカゲ、レオンを左肩に乗せながら、俺を誉めてくれる。

でも久しぶりだなー、コイツに誉められるのも。

高校生になった今でもあの時みたいに振り回されているからな。



俺は心の中で苦笑し、机の引き出しを開き、手の甲にオレンジ色で27と書かれたひと組のミトンの手袋と、オリジナル原型のボンゴレリングとナッツのアニマルリングを取り出す。

そして、ナッツをリングの姿から解放する。

「ガウ、ガウッー!」

リングの姿から久しぶりに解放されたナッツは、嬉しそうに俺の部屋を走り回る。

……………に、しても懐かしいな。

ナッツの姿を見てみると、あの十年後の世界での出来事が今でも鮮明におもいだすなあ。

まだ、三年しか経ってないけど。

スパナに入江君。

世界征服を目論んでいた白蘭に、俺達を過去へ還す為に命の炎を燃やした やユニ……………

今でも自分が経験した事が嘘の様に思えて来ることがある。

俺は手に取ったボンゴレリングを首にかけ、ミトンの手袋をこちらにも久しぶりに手にはめる。

自慢じゃ無いけど、高校一年の時、リボーンのボンゴレ式、高校入学祝いみたいな物（正確に言うとなスパルタ修行）のせいで、死ぬ気丸無しで超死ぬ気化モードになる事ができる様になった。

……………でも、あの修行はかなりひどかったけど……………

「に、してもツナ。

よく十代目を継ぐ決意をしたな。  
てつきり俺は断ると思っていたぞ。」

……………そして、重要な事がもう一つ。

俺は、かなり迷った末に、未来から帰るとすぐ九代目に継承式を開いてもらい、正式にボンゴレ？世の座を継ぐ事が決定したのだ。

「……………俺だって、本当は継ぐ気なんて毛頭無かったよ……………」

でも……………」

俺がボンゴレ？世を継ぐ理由を思いだそうとした、その時だった。

ポオウツ！！

「「「！？」」」

俺は何もしていないのに、首にかけたボンゴレリングにいきなり死ぬ気の炎が灯ったのだ。

しかし、驚いた事はそれだけでは無い。

そのリングから生成された炎は、俺の上空の炎では無く、金色に煌めく全く見覚えの無い黄金色の炎だった！

「ガウッ！！グウルル！」

ナッツも炎の色が変だと気付いたらしく、俺の肩に飛び乗ると金色の炎を出しているリングを警戒するように低く唸る。

「やベーぞ、これは。」

リボンも危険だと判断したらしく、机の上から飛び退く。

シューイーン!!

すると、その金色の炎は俺とナッツを包み込む程の結界を創りだし、俺とナッツを外の世界から完全に孤立させる。

「おい、ツナ。」

よく聞け、この結界は……………」

ブチッ!

頼みの綱だったリボンの助言も、あえなく最後まで続かなかった。

ボンゴリングと結界がこれ以上ないほど強く光り、もの凄い揺れが俺とナッツを襲った。

「うつつ……………」

「ガウッ」

俺もナッツも揺れに耐えられなくなり、結界の中にある、勉強机に必死にしがみつく。

……………俺、ここで何かわからないこの結界のせいで死んでしまうのかな?

……………そんなの嫌だ!!

そしたらもう、獄寺君に山本、ランボにイーピンにハルにふう太、母さんに父さん、それにもう二度と京子ちゃんに会えなくなっちゃうじゃん!!

京子ちゃんに至ってはまだ告白もして無いのに!!

俺はズボンのポケットに入っている、ウ”アリアーとの闘いの時に京子ちゃんからもらった、必勝と書かれた、青いお守りを必死に握りしめる。

ギュウイーン!!

結界の揺れはさらに激しく、光はさらに強くなり……………

「うああああ」

結界は、俺とナッツを何処かに転送してしまった。

そして……………俺は今日、ナッツと共に幻想郷という場所に、  
幻想入りを果たしたのであった。

t a r g e t   r o c k      (後書き)

さてさて、この物語の主役ヒロインは誰にしましょう。

今のところ二、三人いるのですが……

誰にしたら良いのでしょうか？

ちなみに、ハーレムについても検討？しています。

標的0 くボングレの夢 Un sogno del vonggole (前)

今回もまえがき、みたいなものでかなり短めです。

.....これからは、もっと長くしなうとなあ。

「うつ……………此処は？」

俺は突然の息苦しさを覚え、闇へ落ちていた意識を取り戻す。  
どうやら俺は、何処か薄暗い所で仰向けに横たわっているらしい。

「……………にしても、此処は何処なんだろう？」

俺は仰向けになっていた身体を起こし、朦朧とする意識の中で、  
今自分の居る自分のいる薄暗い場所位置を確認しようとした。

俺の頭の記憶の限りこんな場所は知らない、なら一体ここは何処？

その時だった。

「久しぶりだな、？世。

マレの小僧の時に、リングの枷を外して以来だな。」

「！？」

俺は、背後から聞こえた声に朦朧とした意識が完全に覚醒した。  
この穏やかな喋り声は……………ボンゴレ？<sup>フリーモ</sup>世！！

俺はもしかやと思い背後を振り向く。すると、そこには案の定、  
全身スーツで身を包み、手には？と書かれた死ぬ気の炎を纏ったグ  
ローブに、額から大空の死ぬ気の炎を噴出した俺と瓜二つの男……  
……………ボンゴレの創始者、ボンゴレ？世が立っていたのだ。

「なっ……………」

そして、そのまま俺は今、自分が置かれた状況を瞬時に思い出した。

……………そうだ、俺はリングから出た変な色の死ぬ気の炎で何処かに飛ばされたんだ！！

……………なら、絶対この世にはしないはずの？世と俺は会っているという事は。

「俺は死んじゃったのか……………」

俺は、とてつもない墜落感に襲われ、べたつと尻もちをつく。

……………俺は死んじゃったのか、京子ちゃんに告白する事も結婚する事も出来ずに……………

「……………ふふっはははっ。」

しかし、そんな俺とは裏腹に？世は静かに笑う、その笑う姿にも何故か威厳がある。

「人が死んでいて落ち込んでいる時に、あなたは どうしてそんなに笑っていられるんですか？」

俺はそんな？世の態度に腹が立ち、睨みつけながら呟く。

なんなんだよ。人が死んで落ち込んでいるというのに……………

「ははっ、すまない。少し？世の対応が面白くてね。

実を言うと、君はまだ死んではないんだよ。」

「なっ！？」

俺はまたもや、？世の言葉に驚かされる。



「これは、君のボンゴリングが見せる特殊な夢、……………正確に言うとボンゴレの夢、Un sogno del vongoleなんだ。」

君も何回か経験している筈だ。」

俺は？世の言葉に一旦ほっとする。

良かった俺まだ生きてる！！

それに、このボンゴレの夢についても何度か経験があるのも事実で、少なくとも俺は二回体験している

きつと、未来のボンゴレ基地で十年後の雲雀さんのハリネズミに閉じ込められた時と白蘭の時にリングの枷を外してもらった時だろう。

だけど……………

「？世、あなたは どうしてそのボンゴレの夢を俺に見せたんですか？  
とつくに未来での出来事は終わり、俺はちゃんと継承式を済まし、  
？世の座を継いでいるのに……………」

そう、何故今さら？世が出てるんだ、それが物凄く不思議だ。

俺は、ボンゴレに関しては全て一段落つけたつもりだ。それなのに、？世が何故俺にこんな変な夢をみせるのか？

まさか……………また何かに巻き込まれるんじゃない……………

「？世、いや沢田綱吉。」

俺が？世がなぜ俺の夢に出てきたのかを模索していると、？世はいきなり改まって俺の名前を呼ぶ。

てか、何処で俺の名前を？

「……………実は君に頼みたい事があるんだ。  
そのために私は、わざわざ、こうしてだけど君と会う時間を創っ  
たんだ。」

どうしてもやってほしい事を頼みごとをして欲しい為に……………」

「……………」

「世が気を引き締めるにつられて、こっちも自然と緊張してくる。  
きっと、これが？世が持つ、独特な雰囲気なのだろう。」

「世は一回、大きく瞬きをすると言葉を続ける。」

「？世、私の頼みは……………」

しかし、？世の言葉は最後まで続かなかった。

「……………？世？」

俺は黙り込んだ？世に話しかける。

「……………すまない。」

私とした事が、少々時間を使い過ぎたようだ。

「？世、また改めてお前に会いに来る。」

「へっ？」

「？世はいきなり饒舌になると、一方的に次々と喋り始める。」

「とにかく、今の時点ではまだ何も説明する事が出来ないんだ。  
わかってくれ、？世。」

「……………」

んな事いわれても、俺は何の事やらさっぱりわからず啞然とする。  
……………もう止めてくれ。」

「じゃあな？世。

いや、沢田綱吉。次会う時まで元気だな。」

？世はそこまで言っと、スッと何処かへ消えてしまう。

……………もう止めてくれ。

止めてくれ？世。

これ以上俺に変な事を持ちこまないでくれ。

……………俺はやるべき事を全てやったんだ。ちゃんと？世の座を継承したんだ。

……………だから、もうこれ以上俺を変なことに巻き込まないで……！！

俺は？世が居なくなったここで、頭を抱えながら想う。

お願いだ。もうこれ以上巻き込まないでくれ！！

標的〇くボンゴレの夢

Un sogno del von gorie (後

今回は

よくある夢の話みたいな感じで重要な所でいなくなる!!  
みたいな物語です。

それと、この小説のメインヒロインを決定しました。  
その人は〇〇〇 〇〇(〇は全て漢字)さんです。

みなさんのご意見、ありがとうございました!!

標的 1 〽 U n i n c o n t r o 東風谷早苗と沢田綱吉 (前書き)

よしっ!!

今日は二つの投稿ができたぜ。

いやゝ間にあって良かった、良かった。

今回は長めのつもりです。

ゆっくり、楽しんで読んでくださいな。

「……………うつ。」

今回は、突然の息苦しさでは無く、突然の眩しさを覚え意識が覚醒する。

でも寝起きなので、まだまだぼんやりとしている。

俺は今、知らない家の知らない和室で知らない布団の中で横になっている。

……………どうやら俺は何処かの家の和室に敷いてある、布団の中で寝ていたらしい。

……………に、しても此処は何処だろう？

俺は寝ぼけている頭をフルに回転させ俺の置かれている状況を思い出す。

……………そうだ、思い出した！！

……………確か、リングが突然発光して、ナッツと共に何処かに飛ばされて……………ボンゴレの夢の中とかいう夢で、？世と会ってそのまま……………！？

俺はそこまで考えると、とっさに布団の中から飛び起き、自分の持ち物を確認する。

ボンゴレリング、京子ちゃんから貰ったお守り、？グローブ……………  
……………ナッツのリングもしくはナッツが居ない！！

俺はそのまま大慌てで、ナッツを探しに行こうとするが……………

「ふえっ、えっ、あっ！？」

ボタン！！

俺は慌てすぎたせいで、足がもつれて……………

「あっ、やっと目が覚めましたか、なかなか起きなくて心配……………  
……… つっきゃあー！」

いきなり和室に入ってきた誰かを押し倒し、盛大に転んでしまったのだ。

「痛ててて…………… すいません。  
大丈夫ですか……………」

俺は押し倒した相手を見て俺は絶句した。

俺が押し倒したそれはかなりの美少女であったからだ。

華奢で整った顔立ち、ロングヘアで枝毛一つ無い、綺麗な緑色の髪質に蛙と蛇の奇妙な髪飾りに、巫女装束によく似た青と白の袖の無い、肩と脇を露出した服を着た少女が余りにも可愛すぎてしまった。

こんな、危険な状況下でさえも、つい見とれてしまうくらいだ。

「うっ……………」

「えっ！？あっ！？」

すっ……………すみません!!」

俺は少女のかすかな声と共に我を取り戻し、少女からすぐさま飛び退き、少女の手を掴み、起こすのを手伝ってあげる。

……………にしても危なかった。

もし、この姿をリボーンに見られたらなんて言われる事やら、それにあいっ、京子ちゃんに告げ口するとも……………

俺はそこまで想うと和室と繋がる縁側を兼ねた廊下から、妙な視線を感じた。

「あっ、続けて、続けて。」

私達の事は気にしないでほら続けて続けて。」

すると、そこには麦藁帽子を被った、小学生の様な小ささの紫色と白色の服を着た少女が暖かい視線で今のこの状況を覗き込んでいる。

また、その少女の肩の上に乗っているナッツも俺に向かっていやらしな〜という視線を送っている。

「へっ、あっ諏訪子様、これは何んでも無いんですよ、これはただ……………」

少女は顔を真っ赤にするとその諏訪何とか様に向かって、反論する。

また恥ずかしすぎて、舌が上手く回らないらしい。

「いや〜だって、あんな状況見せられると誰でもそう思っちゃうじゃん、それにしてもやるね〜君。」



諏訪何とか様は次は俺に向かって、変な事を言ってくる。  
にしても俺はなにがやるね〜なんだろうか？

「とにかく、私とこのライオンちゃんはおなた達のその関係を邪魔する気が無いから、そのまま続けちゃってOKだよ！」

諏訪何とか様とナッツは二人で見つめあつて頷くと、また俺と少女に向かって（生）暖かい視線を送ってくる。

「だから〜」

俺と少女はお互いに声がハモリ合うと、お互いを指でさして

「私達はそんな関係じゃ無い！！！！」

二人して真つ赤な顔をし、諏訪何とか様とナッツの考えているやらしい疑惑を否定する。

……………これこそが、沢田綱吉と東風谷早苗のインパクトが（かなり）強い最初の出会いであった。

〜一時間後〜

俺と少女は諏訪何とか様とナッツの誤解をゆっくり必死に解き、何とか事なきを得た。

あんまり、必死に誤解を解こうとしたそのせいで空はもう、うす暗くなり、俺と少女はヘトヘトで、縁側を兼ねた廊下に座り二人して涼んでいた。

「ふー、なんか疲れたー」

俺は縁側で座ったままゆっくりと背を伸ばし隣の少女に語りかける。

「いいえ、こちらこそ先ほどはすいません。

諏訪子様、少々悪戯が過ぎる事がありまして……………」

そのまま、俺達に静寂が訪れる。

……………にしても、この空気痛いなあ。

俺、こういう微妙な空気、駄目なんだよなあ」

「……………そっ、それより君の名前なんていうの？」

この空気に耐えられなくなった俺は少し、話題を変えてみる事にする。

実際、知ってみたいと思ったから一石二鳥だ。

「へっ、あつ。

私の名前ですか、……………私は風祝の早苗、東風谷早苗と言います。

この幻想郷で信仰を集める為に、この間神社と湖ごと引っ越してきました。」

「……………俺は沢田綱吉っていうんだ。」

俺は東風谷に一応自己紹介しておく。

……………それより今、東風谷なんて言った？

幻想郷、引越し？

「……………あの東風谷さん、質問なんだけど、此処は何処？」

俺は最も簡単に、最も聞きたい質問を試してみる。

「……………此処、ですか？」

此処は諏訪子様と神奈子様を祀る守矢神社ですけど？」

「いつ、いやそういう意味じゃ無いんだ。」

あの……………なんていうのかな……………さっき言ってた幻想何とかについて聞きたいんだけど……………」

俺は伝えようとする事が思う様に伝わらずあたふたする。

「……………ああ、そういう事ですか。」

綱吉さんは外来人なのですね。」

東風谷は自分一人で何かに納得したのか、一人でフムフム頷ぎしている。

一体何が解ったんだろう？

「あの東風谷……………」

「あなたが聞きたいと思う事は大体理解できました。

今、この縁側で話す事も出来るのですが、少しこの話は長くなる

のでここでは無く夕飯を食べながらにしましょう!!  
きつと綱吉さんもお腹が空いている事でしょうし。」

東風谷はそう、キッパリと言い放つと座っている俺を立たせようとする。

「……………」

俺はいきなりテンションが上がった東風谷に啞然とし、俺は東風谷にされるがまま、縁側から立たされ夕飯に招待された。

……………に、しても本当にここは何処なのだろうか？

俺はさらなる不安を胸いっぱい膨らませ、リビングへ向かうらしい東風谷の後ろ姿について行くのであった

あゝあ、やっちゃった

……………すいません、つい出来心で……………

さて、次は一回ツナから離れ、違うキャラを幻想入りさせてみたいとおもいます、

誰をいれるかって？

今のところは浮雲を紅魔……………

危ない、もう少しでネタばれの所だった。

ではでは。

標的2　Cena　夕食と黒い小さな乱入者（前書き）

ツナ「あれ？今回は雲雀さんの回じゃないの？」

早苗「確かに変ですね。」

cocoa「……………ごめんなさい、僕がミスりました、すいませ  
ん。

不注意でつい。」

ツナ「えー！！

この話楽しみにしてた人になんて言えばいいんだよ。」

早苗「そうですよ、ご利用ご返済は計画的にですよ。」

cocoa「……………それでは、本編スタート！！」

ツナ　早苗「あつ、こら逃げるな！？」

## 標的 2 ～Cena　夕食と黒い小さな乱入者～

守矢神社にて……………

俺は東風谷に夕飯に誘われ、一台の卓袱台が置いてあるリビングに招かれる。

目の前には肉じゃが等、本当に美味しそうな料理がずらりと並んでいる。

「……いただきます！」「……」　「ガウツ」

俺とナッツは東風谷がつくった肉じゃがを口に頬張る。  
最近何も食べて無かったせいか、箸が物凄く早く進む。

「沢田さん、もう少しゆっくり食べてください。喉に詰まりますよ。」

東風谷はそんな事を呟くと俺の隣にある湯呑みにお茶を注いでくれる。

「に、しても良い食べっぷりだね～二人とも。  
昨日の夕方から、何も食べてないからかな」

ちなみに、この人？ともリビングに入った時、自己紹介を済ませている。

本名は洩矢　諏訪子で呼び方はなんでも良いと言われたが、早苗い習って何故か解らないけど様をつける事にしている。

「昨日の夕方！？」

俺はこの独特な麦わら帽子をかぶった諏訪子様の一言にひっかかる。

昨日の夕方？ 何も食べて無い？

「んっ？ 早苗から聞かなかった。君、この神社の敷地の中でぶっ倒れていたんだよ。」

それを早苗が見つけて、あの部屋に運んだんだよ。」

「……………」

俺は、諏訪子様からことの真相を聞かせてもらい、再び驚く。それに加え、その東風谷を呼んだのはナッツだとも聞く。

それに対し、俺は……………」

「ありがとう、東風谷さん。」

もし君が俺を助けてくれなかったら、今頃大変な事になっていたと思うんだ。

それに、ナッツも。

ナッツが東風谷さんと呼んでくれなかったら絶対今の俺は無かった。」

素直に心の底から感謝の気持ちをあらわしていた。

ここまで、心の底から本気で感謝したのは何年ぶりなのかな？

「いいえ、沢田さん。」

私はそこまで感謝される事はしていません、私は人として、現人神として当たり前な事をしただけですよ。

ね、ライオンちゃん。」

「ガウッ！！」



東風谷は俺に微笑みかけ、ナッツを自分の膝の上にのせる。

ナッツも俺に感謝のと東風谷の膝の上が気持ちよかったのか、普段みせない優しい声でうなる。

しかし、俺はまたしも東風谷の一言に疑問を持つ。

「……………東風谷、現人神って何なの？」

俺は現人神という言葉に過剰に反応してしまう。

……………三年前、自分が神だと言っていた悪魔を嫌でも思い出してしまっから。

「……………もうっ早苗。」

縁側で二人つきりになった時、一体何をしていたの。

私は沢田君に幻想郷<sup>こゝろ</sup>について早苗達を二人きりにしたんだよ。」

諏訪子様は肉じゃがのジャガイモを箸で器用につかみながら答える。

「えっ……………そうだったんですか!？」

……………知らなかったです。」

早苗は今の言葉に面を喰らったらしい。

「あっ!! 解った!!」

そうか、二人きりでなんか違う事してたから話せなかったのか。あ、ごめんね。でも、早苗はこう見えて……………」

「諏訪子様!!」

諏訪子様の話を途中で遮る。

またまた顔が真っ赤だ。

「ちつ違います、諏訪子様。

私はただ……沢田さんを晩御飯に誘いながら、ここについてお話ししようとしていたんです。

決して、沢田さんとそっ……そんな事はしていませんっ!!」

東風谷は顔を真っ赤にしながら大声でしゃべる。  
膝に乗っていたナツツも驚いて逃げてしまった。

「んも、少しからかったただけだよ。もう、早苗ったらいつも真面目だから反応が面白くてつい……」

どうやら、諏訪子様は東風谷の反応が面白くてつい、いじってしまっただけらしい。

……はあ、リボンみたく人騒がせな人だ。

「誰が人騒がせだ、駄目ツナ!!」

「「「!?!?!」」」

その時だった。

真黒なスーツに身を包んだ赤ん坊が俺の頬へととび蹴りを入れてきたのだ。

「…………リボン!?!」

「一体何すんだよ!!」

そう、その赤ん坊こそ俺の家庭教師、かてきよーリボンであった。

「「！？」」

リボーンの突然の乱入に早苗と諏訪子様は驚いている。

「……まあ、スーツ着た赤ん坊がいきなり目の前に現れて、日本語流暢にしゃべるんだからそりや当然だよな。」

あれ？その前にリボーンはあの結界の外に居たはずだよな、一体どうやって此処に？

「……………沢田さん、この赤ん坊は？」

「あつ、こいつはリボーンって言って、俺もあんまり詳しくは知らないんだけど俺の家庭教師<sup>かてきょう</sup>なんだ。」

俺は頬をさすりながら、リボーンを指差して答える。

「……………こいつ、今まで何処に？」

「そうだ、俺の名前はリボーン。」

ツナが言った通り、俺はこいつの家庭教師をしている。  
よろしくな、東風谷早苗。」

リボーンは東風谷のそばまで行き、自己紹介をする。

「……………あれ、なんでこいつが東風谷の名前を？」

「……………えっ、あつ。」

はい、リボーンさんですか。……………に、しても私の名前を何処で？」

やはり、東風谷も俺と同じ事を疑問に思っただけらしい。

……………そりゃ普通そうだよなあ、自分の名前を紹介した覚えが無いのに知っている奴ってストーカーくらいだし、気持ち悪いからなあ。

「ああ、俺は今までお前たちの会話、正確に言うとなが東風谷を押し倒す場面から、晩飯の今まで、全部聞いていたからなんだぞ。こつ見えても、俺は変装が得意だからな。」

お前の場合は変装じゃなくて、コスプレだろ。

俺は心の中で突っ込んでみる。

それにしても、あの場面も見られているなんて……………りゃ、予想通り京子ちゃんに告げ口されるぞ。

「おい、東風谷。

そんな事より一つ質問だ、一体此処、幻想郷ってどういう場所なんだ。

そろそろ教えてくれねえか？」

そんな俺の考えを知らず、リボーンは独自の口癖で本題に切り込む。

……………どうやら、全部聞いていたというのは満更嘘ではないらしい。

「……………そつ、そうですね、ではそろそろ本題に入りましょうか。」

東風谷はあの時の事を思い出したらしく、顔を真っ赤にしたまま話題を変える。

「じゃあ、私は先にお風呂入っていくよ。  
もう沸いていると思うし。」

諏訪子様はこの話はつまらないから、と言いつつ残りリビングからふらっと消えてしまう。

「……………あいつ、おもしれえ奴だな。」

リボーンは諏訪子様の後ろ姿を見てポツリと呟く、ちなみにレオンはというとりボーンの黒い帽子にひつついてもはやアクセサリー見たいなものになっている。

……………に、しても何が面白いんだろう。  
俺は別に何も感じはしなかったけど。

「じゃあ、最初の約束通り幻想郷についての説明を始めます。  
質問は最後にまとめて受けるのでとりあえず、最後まで聞いといてくださいね。」

東風谷は左手で髪を払い、説明を始めるのであった。

～三十分間後～

「……………以上で、此処についての説明は終わりです。  
何か質問とか、ありますか？」

俺は（体内時計で）三十分間もの説明を聞き、ぐったりとする。  
……………俺は三年前、十年後の世界に行ったりと、非日常の  
事態には慣れていると、自負しているけど、まだまだ自分の未熟さ  
を改めて知ってしまった。

「に、してもすげーとこだな幻想郷は、忘れ去られたものが集い、  
妖怪と人間が共存するだなんてな。  
でも、何故そんなところに俺達は飛ばされたんだ。  
東風谷の説明だと、俺達は忘れられたという事になるぞ。」

忘れられた……………つまり、リボーンは死んだと言いたいのだろ  
う。

でも……………？世は、言っていた。  
まだ俺は死んでいないと、……………ならどうして此処に？

「いいえ、多分あなたがたは、外の世界では忘れ去られて無いと思  
いますよ。」

……………その、時よりいるんですよ、何らかの偶然で幻想郷に迷  
い込んでしまう人が。  
きつと、沢田さんもりボーンさんもその偶然の被害に遭ってしま  
っただけで、外の世界に戻れば……………」

「おゝい早苗ー、お風呂空いたよー」

東風谷の説明は、お風呂上がりの諏訪子様の乱入により遮断され

る。

「そうですか。」

じゃあ、先に沢田さん達入ってきてください。

私はまだ、食器洗いが残っているの。」

「そうだな。」

じゃあ俺達で先に入って来るか行くぞツナ。」

リボーンはそう言うतとすぐさまリビングを出ようとする。

「ちょっと待てリボーン！！」

風呂入るはいいけど、お前風呂の場所解るのか？」

「ああ。」

この家の構造は、最初ここに来た時に調査済みだ。  
ほらさっさと行くぞツナ。」

そう言い捨てると、リボーンはそのまま風呂場があるべき場所に  
一直線に向かっていく。

「……………面白い方ですね。」

リボーンさんって。」

東風谷はリボーンの後ろ姿を見て微笑む。

「それは俺も同情するよ。」

本当、何考えているか解らない奴だ。」

俺は東風谷を見て肩をすくめる。

なんか今回、巻き込まれた厄介事はいつもと違う気がする。  
.....  
なにかが。



標的2 〽Cena 夕食と黒い小さな乱入者〽（後書き）

ツナ 「あいつ、どこに逃げたんだろう」

早苗 「沢田さん大変です！！  
なんとこの小説5000PV突破だって!？」

ツナ 「ええええええええええ!？」

早苗 「だから、あんな人探すんじゃないかって!？」

ツナ 「そうだね。 じゃあ、」

早苗 ツナ 「みなさんご視聴ありがとうございました!!  
これからもよろしく願いします。」

標的3 く Allineamento di somma 勘違いでの額合わせ

早苗「このタイトルなんですか？

勘違い？ 額合わせ？」

ツナ「えっ……………これは……………あれだよ、きっと作者のしょうもない趣味じゃないの？」

早苗「そうですか。なら今度少し痛い目に……………」

ツナ「うっ……………それでは、始まります!!」

その後、俺達は東風谷の言うとおり風呂に入った、風呂は木でできた和風風呂で今日の疲れ（なんも体動かして無いけど）を癒す事が出来た。

それともう二つ、今日俺とリボーンが寝る所は、俺がさっきまで寝ていた場所を提供してくれ、俺が着ていた高校の制服も洗ってくれるらしく、その着替えに俺とリボーンに浴衣を用意してくれたのだ。

（に、しても何処でリボーンサイズの浴衣なんてそろえたんだろう？  
こんな奴のサイズに合う浴衣なんて何処に置いてあるんだ？）

42

「それにしても東風谷 早苗はいい奴だったな。  
この幻想郷であいつに会えたのはかなり運が良かった。」

俺の疑問とは別にリボーンは浴衣を着こなし、俺へと話かける。  
多分こいつが幻想郷に居る分、俺は確実に退屈しないだろうな。  
……………リボーンはそういう奴だから。

「確かに、俺もそう思うよ。」

俺も一応リボーンの訪ねに答えておく。  
ほんとに此処にきて東風谷に会えたのは本当に運が良かったと俺も思う。

「おいッナ。」

「お前、ナッツはどうした、まだリビングに居るのか？」

「リボーンはまたもやりボーン用の大きさの布団を敷きながら訪ねてくる。」

「いいや、ナッツならもうリングに戻したよ。」

「あいつ、昨日は頑張ってくれたからな。」

「リボーンの問いに、俺は首にかけたナッツのアニマルリングを見る。」

「本当によくやってくれたよこいつは。」

「……………そうか。」

「に、しても此処の家の奴らは不思議だ。」

「……………えっ、何言ってるのリボーン。」

「この人たちはみんな普通の人間だよ。」

「少なくとも、俺やりボーンよりは絶対普通の人間だ。」

「……………未来の世界に行った人間など、世界広しといえど絶対俺たちだけだ。」

「……………そうか？」

「でも、なんか俺はしっくりこねえんだ。」

「リボーンはレオンを寝る時に被る帽子に変身させて頭に乗せる、その帽子の形は諏訪子様のあれを意識したのか麦わら帽子であった。」

「……………でもリボーンのしっくりこないというのは一里ある。東風谷は何だかんだで自分の現人神の説明は一回も触れなかった。」

「…………でも、東風谷はきっと……………」

「私がどうかしましたか？」

「うわっ!？」

東風谷がいきなり俺達の部屋の襖の扉を開き、中に入ってきて俺の言葉は最後まで続かなかった。

東風谷の服は巫女装束では無く、俺と同じ浴衣を着ていた。

「どうしたんですか沢田さん、そんなに驚いて、私の事で何かあったんですか？」

「えっ、いやそれは……………」

東風谷は首をきょとんと傾げながら訊ねられる。  
東風谷のその動作は相変わらず……………可愛い。

「って、何考えてんだ俺!？」

「ねえ、沢田さん本当にどうしたんですか、……………いきなり顔を真っ赤にして、具合でも悪いんですか？」

「いやっ、それはその……………」

やばい、東風谷は頬を赤く染めた俺を病人？だと勘違いしたのか身をかがめ、その顔を息のかかるところまで近づけてくる。

リボーン！！ 助けて！？

……………と思ったその矢先、俺の願いはリボーンの寝顔とシユピーという寝息によって見事に打ち碎かれる。

ちよっと、教え子のピンチくらい助けるよ！

てか…………… 今までリボーンに助けられた事あったっけ？

…………… そんな事どうでもいい。

今の状況はやばい、本当にやばい。

ブラッドオブボンゴレ

『ボンゴレの血』の超直感を持つ俺が言うんだ。

絶対間違いない。

…………… 下手したら白蘭との闘い以上のやばさかもしれない。

って、俺は誰に説明してんの！？

「そのまま、動かないでください。

今、体温を計りますから。」

「……………」

すると東風谷はそのまま、自分のおでこを俺のおでこに当てる。

…………… 昔、俺が風邪をひいたかわからない時に母さんがよくやってくれた事だ。

でも、さすがに母さん以外の女の人にやられるのは東風谷が初めてだった。

東風谷の額は俺より冷んやりしていて……………

「んー、どうやら、熱は無いみたいですね、……………ってあれ、沢田さん！？沢田さん！！！？？」

東風谷が俺の名前を呼ぶと共に俺は恥ずかしさのあまり気絶している事が解る。ハ

……………あつ、リボンめわざと助けなかったんだな。  
あの薄情者！！

俺の心の愚痴は届かず、意識はそのまま、闇に落ちるのであった。

く次の日く  
幻想郷の空に朝日が昇る。

「おい、ツナいつまで寝てんだ！！  
さっさと起きろ！！」

「……………もう少し寝かせ……………うぐっ！？」

俺のまだ寝たいという欲望は俺のみぞにはまる、リボンのとび膝蹴りによって儚く打ち消える。

「……………今日は学校ないだろ、日曜日……………」

俺はリボーンに蹴られたみぞをさすりながら身体を起こす。  
……………あれ、俺は今幻想入りしているんだっけ、だから、学校

が（行きたくても）行けないんだっけ？

「何、寝ぼけているんだ。

さっさと起きろ。

もう東風谷は起きて朝飯を作っているだぞ。」

俺はリボーンが指差す時計をぼんやりとした頭で見て驚く、……  
……まだ午前六時じゃないか、てか東風谷どんだけ早起きしているんだよ。

俺は昨日の事なるべく思い出さないようにして東風谷を想う。  
………そういえば、昨日（もしくは今日）は？世が出てくる、ボンゴレの夢を見なかったな。  
また会おうとか言いながら。

「じゃあ、そろそろ朝飯を食いに行くぞ。」

浴衣からすでに着替えており、リボーンはそう言うത്早速リビング  
グへと向かった。

………相変わらず、せっかちな奴だ。

俺は心の中で苦笑し、俺の枕元の傍で綺麗に畳んである高校の制服  
に着替え、リビングへ向かう。

「おはようございます。」



「……………ん、おはよう。」

俺が入るとすぐ、朝飯を、台所から持ってきた東風谷が挨拶をしてくれる。

……………俺も挨拶を返し、リボーンの隣に腰掛ける。

まだ、リビングに居るのは俺とリボーンと東風谷だけだ。

……………リボーンは普通だと小さすぎて机に届かないので、レオンを椅子に変身させて使っている。

「沢田さん、リボーンさん昨日はよく寝れました？」

「ああっぐっすりだったぞ。」

「ん……………まあ、結構ねれたよ。」

実は昨日の夜の事であまり寝れたのかは、覚えてないけど……………

……………

「それにしても、沢田さん昨日いきなり気絶してどうしたんですか？  
本当に具合が悪かったりするんですか？」

「えっ……………あっ、それは。」

俺はなるべく思い出さない様にしていた事を聞かれ返答に詰まる。

「ツナは昨日、風呂に長く浸かり過ぎてのぼせていただけだ、あん

ま心配しなくていいぞ、東風谷。」

「……………なんと、あのリボーンが、俺に助け舟を出してくれ  
た——」

「やった！ リボーンってやっぱ根は……………」 「でもあい  
つ。 なんかもつと幻想郷の事を知りたいとか呟いていてな。 ……  
……… 確か、人里に行ってみたいと言っていたんだ。」

「！？」

「…………… なんとという事を言ってたあいつは！？」

「…………… そうだったんですか。」

「これで、昨日の事が納得がいきます。 ……………… それより、沢田  
さん人里に行ってみたいんですか？」

「…………… うつ、えつ…………… まあ。」

端っから行く気が無かった俺だが、あの無垢な笑顔を見ていると  
ここで断るのもなんか罪な気がする。

「…………… ちなみに、人里とは（昨日、東風谷に教わった事によ  
ると）幻想郷に少なからずいる人間が住む里らしい。」

また、東風谷はそこでよく、買い物に行くと言っていた。

「じゃあ、なら朝ごはんが済んだ後、三人で行きませんか？  
ちょうど、私も買い出しに向かう事でしたし。」

「おつ、それは良いタイミングだな。  
よし、ツナ、この幻想郷の人里を死ぬ気で探検するぞ。」

.....何故人里を死ぬ気で探検しなかいけないのか知らないが、兎に角俺は東風谷と共に探検する事となった。

この探検で後に俺達はかなり厄介な事に巻き込まれるとは知らずに.....

リボーン「次回はついに人里へだな。」

cocoa「うん……一応そのつもりだけど……」

リボーン「今度こそ雲雀は出るんだよね？」

cocoa「ああ。絶対でるよ。」

リボーン「そうか。  
なら……」

リボーン&cocoa「次回もお楽しみに!!」

標的4      〽Transitoriet?

浮雲で染まる紅魔館の空      (前書

cocoa「よっしゃ〽今回は雲雀の回投稿できた!!」

リボーン「良かったじゃねえか。」

cocoa「では!!」      どつぞ!!」

〈数時間後〉

守矢神社、玄関にて。

俺達（諏訪子様はめんどくさいという理由でこなかったが、）は人里に向かう準備をしていた。

ちなみに、俺は靴を持っていなかったけれど、昨日レオンに頼んで死ぬ気の炎を防ぐ、特殊な糸で出来た運動靴を生み出してもらった。

「じゃあ、行きましようか。

沢田さんリボンさん。」

靴に履き替えたらしい早苗が、出発しようと催促する。

「ああ、そうだな。

……………でも、どうやって行くだ、見たところ此処は山の上にある神社だ。

歩いて行くと、山を行って帰るだけで、随分時間がかかりそうだぞ。」

「えっ!？」

此処、山の上にあるの?」

俺はリボンの言葉にまたまた驚く、山の上!？  
どんなところに暮らしているの東風谷達!？

「あつ……………そうでした。」

言いくいのですが……………一つ言い忘れていたんですけど、実は幻想郷だと、日常的な移動手段は……………空を飛ぶなんです。」

「ひえっ!？」

俺は控えめに、恥ずかしそうに答えた東風谷に、今度こそ驚く。

……………東風谷、もしかしたら、こいつ少し抜けているんじゃないか? (俺も全然人の事言えないけど)

……………てか、これでどうやって人里に行けっというんだよ!!  
空を……………飛べない訳ではないけど、こんな事で使う事じゃないし……………どうすんだよ。」

「ふんっ、なかなか面白そうじゃねえか。」

「「えっ!?!」」

こんな状況でも、まだ余裕を持つリボーンに俺も東風谷もまたもや驚く。

「おい、東風谷。」

お前、一回ツナの腕を握りながらその、空を浮いてみてくれないか。」

「……………いいですけど、何故そんな事をする必要が?」

確かに、何故東風谷は俺の腕を掴んで空へ浮かばければ行けないのか疑問だ。

いくら、東風谷といえど俺を掴んだまま人里まで飛ぶという力は

なさそうだし…………

「まあ、兎に角浮いてみてくれ、理由は後ですぐ解るから。」

リボーンは、疑問を持つ俺達とは別に東風谷と話す。

「……………解りました。」

すると、東風谷は俺の腕を掴むと行きますよ、とだけ呟くとフワッと浮き上がる。

「おおっー!!」

俺は全身に受けながら、空を飛んでいる事に感動する。

……………三分くらい浮いた後、俺と東風谷は地面に着地。

「どうだったか？」

空を飛ぶというのは?」

地面に着地した後すぐ、リボーンは感想を求めてくる。

「ああ。」

とっても気持ち良かったよ。」

……………に、しても空に浮かぶのは気持ち良かったな。  
もし、俺も飛ぶ事ができたらな…………

俺は目を閉じ、さっき飛んだ時の感覚を思い出す。  
すると東風谷に腕を掴まれてもいないのに……………さっきの



浮遊感が俺に襲う。

「……………うおっ!？」

そう、俺は東風谷の助け無しで空に浮いていたのだ。

「……………すごいです。」

沢田さんが、浮いてる。」

東風谷はそんな俺を見て目をまるくする。

……………そうか、リボーンの奴。

俺の超直感を知ってわざわざあんな事を……………

俺に空に浮く感覚を覚えさせてようと……………

「よし、東風谷。」

これで、俺達も空が飛べるぞ、ならさっさと行くぞ時間がもった  
い無いからな。」

リボーンは俺の肩に乗り、ポカーンとしている東風谷に人里へ行  
こうと催促する。

「……………全く、あなた達となると退屈しませんね。」

東風谷は、そう呟くと俺に対してどうして飛んだのか、これ以上  
問い詰める事も無くただ笑顔を見せてくれ、俺達は人里へ向かうの  
であった。

ツナ達が入里に向かうのと同時刻。

守矢神社からかなり離れた真つ赤な、館を建てた奴の神経を疑うほど真つ赤なお屋敷……紅魔館

そこは、紅い霧の異変の張本人のレミリア・スカーレットとその従者が住むお屋敷。

館の主、レミリアは今日も優雅に咲夜という従者が注いだ紅茶を楽しんでいた。

「咲夜、最近なんか暇ね。」

そうだ、日傘もって何処かに出かけましようよ。」

屋敷の外に創られた屋外のテーブルに、紅い瞳に青い髪、紅いドレスと赤いリボンをつけた帽子を被り背中から蝙蝠の羽が生えた吸血鬼……この屋敷の主レミリアが、その傍ですぐ近くに控えている灰色に染まった髪にカチュウシャをつけた、紅魔館のメイド長、十六夜 咲夜に声をかける。

「それはなりません、お嬢様。」

今日はこの幻想郷で今年一番の暑さだと、天狗が書いた新聞に載っていました。

なので、外出は控えた方がよろしいかと。」

咲夜はそんなレミリアの問いに丁寧に答える。  
その姿も何故か洒落ている。

「……………そう、なら外出は止めね。  
に、しても最近かなり暑いわね。 私は吸血鬼だから、暑いのが  
駄目だというのに。」

レミリアは椅子から地面に届かない足をぶらぶらさせながら愚痴  
る。

「それに、しても最近暇ね〜  
何か面白い事は起きないかなー」

「……………そうですね。確かに暇ですね。」

レミリアと咲夜は共に雲一つ無い快晴を見上げる。

その時だった。

ドオオン！！

「「！？」」

いきなり、屋敷の中からとてつもない爆発音が響きわたる。

普通、自分の住む家から爆発音なんてのが聞こえると慌てふため  
いてしまうものだが、二人の少女は笑っていた、まるでこの時を待  
っていたかのように……………

「噂をすればね……………」  
待っていて正解だったわ。」

レミリアはテーブルから飛び降りると咲夜の方を一回振り向く。

「さあ、ひさしぶりの異変。  
みっちり遊んであげるわよ。」

レミリアはニタニタと笑いながら、爆発音のした紅魔館の中へと駆け付ける。

そして、この後紅魔館の空は孤高の浮雲で、染まりつつあった。

紅魔館 内部 爆発がした大部屋

二人は部屋の中に入り、状況を

部屋の壁、家具は壊れ瓦礫と化し、爆発がしたと思われる場所には大きな穴が空いている。

「咲夜、此処ね、爆発が起きた部屋というのは。」

「……………はい、爆発の音からして此処の筈ですが。」

相変わらず、咲夜の態度はクールだ。

「……………そう、なら出てきなさい。侵入者。  
私が遊んであげるから。」

レミリアは部屋に響く声の大きさを部屋に語りかける。

しかし、その答えの返事は聞こえない。

「……………此处は外れなのかしらね。

仕方無い、お茶しに戻るわよ、咲夜。」

レミリアが諦め屋外のテーブルに戻ろうとしたその時だった。

「ミードリタナビクー ナミモリノー

ダイナクシヨウナクーナーミガイイ」

「「!?!?」」

この部屋の何処から、音程が狂っている何処かの学校の校歌らしい歌が聞こえる。

「……………咲夜、どうやら此处で良かったみたいね。」

「はい、お嬢様。」

レミリア達は引き返そうとしていた足を再び部屋を戻す。

「さあ。今度こそ出てきなさい侵入者!!」

「……………うるさいよ、君たち。」

すると、今回の語りかけでは返答が来る。

「……………どうやら、あなたが侵入者のようね。」

レミリアは今、ゆっくりと立ちあがった少年に声をかける。

その少年は、黒髪で鋭い眼つき、黒い学生ズボンに胸元のボタンを外した白いYシャツ。

黒い学ランを肩に羽織り、その左腕には風紀と書かれた腕章をつけ、右手には雲属性のボンゴレリングとロールのアニマルリングをはめている。

ちなみに、その校歌を歌ったのは少年の頭に乗っていた黄色い小さな鳥らしく、まだ音程が狂った音痴な声で歌っている。

少年は、どうやら昼寝の最中に起こされたらしく、眠い眼差しをこちらに向け、元々眼つきが悪い目をさらに悪くさせる。

その少年は……とても機嫌が悪い事が覗える。

「……それにしても、ここは何処かな？」

僕は確か、並中の屋上で昼寝していた筈なんだけど。」

少年は起き上がると頭の上に乗っている小さい鳥を何処かへ飛ばす。

「……それと君達、並中ならその服装は校則違反だ。」

少年はレミリアに向かい、指をさして淡々と告げる。

「……校則？ ふふふっ笑わせるわね。」

なら、君は不法侵入。あなたが言う校則違反よ。」

レミリアは、そんな少年に向かってあえて挑発口調で話す。

「……ふうん。」

「……………にしても、君の隣のメイド僕にナイフなんて向けているけど何なの？」

「強いのか？」

少年は今度は咲夜の方を睨む、しかしその少年の顔は楽しげだ。

「……………ああ、これは私のメイドよ。」

それに……………かなり強いわ。」

「…………………………」

咲夜はナイフを構えたままこちらも少年を睨む。

「……………そう、なら少しは楽しめそうだ。」

シュキーン

少年は身体に隠しておいたらしい、トンファーを咲夜に向けてこちらも構える。

……………そして此処に、誇り高き幼い吸血鬼、レミリア・スカレットと何者にもとらわれぬ孤高の浮雲、ボンゴレ雲の守護者、雲雀恭弥の闘いが始まるのであった。

標的4      〈Transitoriet?〉

浮雲で染まる紅魔館の空（後書

ツナ「うわっ……………これ、ただあらすじ書いただけじゃん!？  
こんなんで書いたっていいの!？」

cocoa」……………」

早苗「あんまり責めたらいけないですよ、沢田さん。」

リボーン「そうだとツナ、これでやつと雲雀の戦闘ってのが楽しめるじゃないか。

それにあのメイドの強さも知りてえからな。」

早苗「では……………」

一同「これからも、よろしく願いします!！」



## 一万PV突破記念

### 隠し弾1

Unattraccia di sogno

今回は記念という事でバリバリ番外編です。

気楽に読んでもらえたらなあ〜と思っています。

それではどうぞ!!

幻想郷に存在する、一つの大きな武家屋敷、通称マヨヒガ。

その一室で、身体の至る所に傷があり、白いシャツと黒い長ズボンをはいた少年が布団の上で寝かされていた。

その枕元には、一組の毛糸の手袋と水色の宝石がはめ込まれた、特殊な形状をしているリングが置いてある。

……多分、この少年の持ち物だろう。

「……………何処だ、此処は？」

……少年は目を覚ますとすぐ、自分が居る場所に違和感を覚えたらしい。

モゾモゾと、布団の中から起き上がり、辺りを探索しようとしたが

……………

「………」

全身にある、打ち傷、切り傷が痛むらしく、思った様に立ち上がれず、そのままその場所に膝をつく。

「まだ、動いちゃ駄目よ」

全身の傷が癒えて無いのだから。」

.....すると、いきなり少年の前の空間に割れ目が入った。

そして、その割れ目から上半身と顔だけを出した、紫色が基調の服を見に纏った、金髪でロングヘアの少女が、少年に話しかける。

「.....」

.....少年は今の状況に何も反応が出来ず、ただ呆然とする。

「ほら、判ったなら首を縦に振ってさっさと寝る、後で私の式神に薬とか持って来させるからそれまで寝ていなさい。」

少女は呆然としている彼を尻目に、饒舌に喋る。

何故かその目は楽しげだ。

「.....その前に一つ質問がある。

.....一体此处は何処？それとあなたは.....」

「あゝ、そっか君は外来人だからねゝ何も知らないのは当然よねゝ

「……………判ったわ、その事についてはちゃんと説明するから、とにかく君は寝てなさい。」

それと私の名前は八雲 紫。

八雲紫と書いて、やくも ゆかりと読ませるの。

で、君は？ 折角こつちが名乗ったんだからそつちも名乗りなさい。」

紫は少年の言葉を途中で遮り、また饒舌に喋り始めた。

「……………僕の名はジョットだ。」

ジョットは、呟く様に名前を言う。

「……………そう。」

ならジョット、あなたは身体の傷が癒えるまで寝ていなさい。

そして、その傷が一通り癒えたら、あなたの質問に答えてあげるから。」

紫は最後に左目でウィンクをすると身体を割れ目に引っ込み消えてしまう。

ジョットはただその光景を眺めるしかなかった。

「数時間後」

「……………」

ジヨットは、再び目を覚ます。

「おはようジヨット、結構よく寝ていたじゃない。」

「……………」

やはり、最初に姿を現したのは紫であった。

しかし、今回は割れ目からではなく、ジヨットの傍で座っている。

「どう、傷の具合は？」

紫は手に持った扇子で扇ぎながら答える。

「…………… ああ、おかげさまですつかり。

…………… それより此処は？」

「ん、此処？」

此処はマヨヒガ私達の家よ」

「マヨヒガ？」

ジヨットは聞き慣れないらしきその単語を聞き返す。

「そつ、マヨヒガ。

此処は私以外に後二人住んでいる人が居るの。

まあ、あなたを入れれば四人だけど……………」

紫は此処で顔が雲る。

「……………じゃあ何故、僕はマヨヒガにいるんだ？  
確か僕は……………」

「あゝそっか、ジヨットは外来人だからね……………」

紫は再びジヨットの言葉を遮り、そしてそのまま黙り込んでしまう。

「……………ジヨット、これから私が言う事を何も言わずに聞いてくれる？」

紫は今の態度とは打って変わり、表情が硬くなる。

「……………ああ。」

それに釣られジヨットも顔が引き締まる。

「……………そう、なら話すわ。」

……………此処は幻想郷、忘れ去られた物が集まり、それらが共存し  
合う場所。」

「……………」

「そして、この幻想郷は私が引いた現実と幻想の境界線であなただ  
住む外の世界と完全に孤立している。」

「……………じゃあ僕は何故、幻想郷に来たんだ？」

僕は忘れ去られたのか……………」

ジョットはこんな非現実的な事を言われても、際どい事をただ淡々と告げる。

「いいえ、それは違うわ。」

紫はそのジョットの予測をキツパリと否定する。

「いい、ジョット……………あなたは、この幻想郷に引き付けられたのよ。」

「……………僕が此処に、引き付けられた？」

言葉では、驚いてはいるが表情はまだ無表情だ。

「そう。」

まあ、正確に言つとあなたの指輪の力が幻想郷に引き寄せられたの。」

紫はそう言つと枕元の指輪をチラ見する。

「……………指輪の力？」

「そう、その指輪の力。」

私も余り詳しく無いから上手く言えないけれど。」

紫はここで扇子を一回閉じる。

「……………じゃあ、僕はこれからどうすればいい？」

相変わらずジヨットは無表情。

「……………そうね、好きにすれば。

今から、元の世界に帰るのもよし、此処でしばらく暮らすのもよし。

……………全てあなた次第。」

紫は、またここで扇子を開く。

「……………なら、八雲。

僕をこの幻想郷……………マヨヒガに置いてくれないか？

……………僕は此処でやりたい、いや……………やらなければいけない事があるんだ。」

この決意もまた無表情。

……………しかし、今回は瞳に映る決意の色が違った。

その瞳は大空の様に澄んでいた。

「……………それが、あなたの意志？」

紫はジヨットの瞳を強く見据える、それはまるでジヨットの意志の強さを見極める様に……………

「……………ああ、これが僕の意志、……………いや僕の直感が出した答えだ。」

「……………そう、なら決まりね。……………ジヨット、これからよろしく。」

紫はまた扇子を開きジヨットに話しかける。



「……………ああ。  
こちらこそよろしく。  
八雲。」

ジョットは初めて表情を崩して笑った。

これが、ボンゴレイ世と八雲 紫の最初の出会いであった。

一万PV突破記念

隠し弾1

↳ U n a t r a c c i a d i s o g n o

番外編、いかがでしたか？

この？世編はボチボチ何回か投稿する予定です。

次回はついに雲雀戦。

これからもc o c c o aの応援よろしくお願いします。

では。

標的 5 ｝Orgoglio 洒落なメイドと孤高の浮雲（前書き）

今回は、雲雀VS咲夜編です。

標的 5      〽 Orgoglio      洒落なメイドと孤高の浮雲

……………紅魔館のとある一室。

そこでは咲夜の無数のナイフ雲雀のトンファアの鈍い金属音が飛び交っていた。

「君のナイフ、中々当たらないね。」

雲雀は飛んでくるナイフを何回か避けた後、咲夜に接近。

両手のトンファアで咲夜に向かって連撃を加える。

「……………そちらこそ。」

あなたのトンファア、中々掠りませんわね。」

咲夜も手に持つナイフを駆使し雲雀の連撃を避ける。

ガキキーン！

そして、お互いの武器が激しくぶつかり、一進一退の攻防を繰り返す。  
広げる。

……………その光景をレミリアは部屋の入口近くでただ、笑みを浮かべながら眺めていた、まるでこの闘いを楽しむかの様に……………

「君の強さって、これ位なの？」

ガアキーン！

「！？」

すると雲雀は両手のトンファーで咲夜のナイフを全て受け止め、空いている右足で咲夜を部屋の壁際まで蹴り飛ばす。

「君の強さはこれだけかい？」

もし、そうだったら拍子抜けだ。」

雲雀は壁際から起き上がる咲夜に再びトンファーを構える。

「……………そうですね。」

……………確かに、私は少々あなたを下に見ていました。

ですが、これからはそうは行きません。……………私も本気でいきます。」

ジャッ！

咲夜はそう立ち上がりながら呟くと、瞳が赤く染まる。

「ワオ。」

……………君、目が赤くなったけど、一体どんな手品が使えるの？」

雲雀は咲夜の目が赤く染まる事に驚く。

しかし、まだ顔には余裕があり、闘いを楽しんでいるかの様だ。

「……………余裕ですね、風紀の少年。」

しかし、この状況を見てもまだ笑っていられますか？」

「……ん？」

すると、雲雀の周りが、ほんの一瞬の内に大量のナイフで囲まれる。

そして、咲夜は左手で、一枚のお札を振りかざし、こう宣言する。

「では、風紀の少年、行きますよ……………」

メイド秘技 操りドール！」

そして、咲夜の合図で、雲雀の周りに浮いているナイフが一齐に雲雀に襲い掛かる。

「どうです、いくらあなたが、運動神経が良くても、この大量のナイフは……………」

「がっかりだよ。

なかなか楽しめると思ったけど、君が弱い草食動物で、本当にがっかりだ。」

雲雀は咲夜の話しを途中で遮る。

顔にはさっきの様な余裕は無く、草食動物を狩る肉食動物の様な鋭い顔をしている。

すると……………」

ガヤーン！

両手のトンファーから、二つの玉鎖を出現させ、それをトンファーごと回転させ……………

ガン！カカカカ……………

「……………なっ！？」

四方八方か次々と襲い掛かるナイフを両手でかなりの速さで回転させた玉鎖で、全て弾き返し始めたのだ。

……………さすがに、これは咲夜も考えていなかったのか、顔に焦りが見える。

……………そして、雲雀はそのまま三分間程、玉鎖を回転させ、全てのナイフを弾き返した。

「生憎、ナイフ使いの天才とはもう戦闘済みでね。手品の種は全て知っているんだ。

君はもっと違う手品を用意していたと期待したけど、どうやら期待外れらしい。

……………だから、僕は、君を噛み殺す！」

雲雀は、咲夜に向かって喋り終わると、玉鎖が回転したままの状態で、咲夜に向かって突撃する。

「ちっ……………」

咲夜は部が悪いと見たか、ナイフを使わず、ただトンファーを避け続ける。

……………しかし、それでも全ては避け切れず、何回か、玉鎖に服や髪等が掠りとられていく……………

「……………いつまで、逃げるつもり？」

雲雀は避け回る咲夜に苛立ちを見せ、その鋭い眼で睨みつける。

「くっ……………」

咲夜は、その瞬間、ほんの一時の隙を突き、玉鎖の攻撃範囲から逃れ、体勢を立て直そうとする。

「君がどんな攻撃をしようと無駄だよ。  
君の攻撃は全て見切ったからね。」

相変わらず雲雀は、鋭い眼光を崩さない。

「……………そうですね。」

確かに、私の技は全て見切られ、私の勝率は低いでしょう。  
……………しかし、それでも私はあなたと闘うのです。  
それが……………私がお嬢様に対する忠誠の証ですから。」

咲夜は傷だらけの身体で再び、ナイフを雲雀に向けて構える。



「……………そう。」

僕には、弱い生き物が強い生物に寄生している様にしか見えないけど。……………まあいいや、次は君を噛み殺す！」

雲雀は再び咲夜を睨みつける。

「……………では、行き……………」

「ちょっと待って咲夜。」

「「!?!」」

咲夜が雲雀に向かって突撃しようとしたその刹那。

……………今までの闘いを傍観していたレミリアが、咲夜の言葉を遮ったのだ。

「……………やっと、登場かい。君のメイド、どんな手品を見せてくれるのか期待したけど、何も見せてくれなくて、がっかりなんだけど。」

雲雀は喋る方向をレミリアに変える。

「……………いいえ、咲夜はちゃんと手品を見せてくれたわ。時間を止めるという手品を。」

「……………時間を止める？」

「そう。」

咲夜が使う能力……………あなたで言う手品は時間を操る手品なの。

まあ、あなたには効果は無かったみたいだけど……………雲雀 恭弥。

「

レミリアは、相変わらずニヤニヤとしている。

「……………ワオ。」

どうして君が僕の名前を、僕はまだ名前を言った覚えは無いけど？」

「これが、私が使う手品……………運命を操る能力だからよ。」

……………でも、私があなたから知れるのは名前だけ、後は私の能力があなたに通用しないのよ。

まるで、何か堅い壁に遮られる様に……………」

レミリアはここで笑いを止める。

「……………そう。」

でも、僕はそんな事に興味は無いな。

種を知った後に見る手品程、つまらない物は無いからね。」

雲雀はレミリアに興味が失せたのか、再び咲夜の方を見る。

「もう、そんなに慌てないで、雲雀恭弥。」

私だって、ただ種明かしをしにきた訳じゃないのよ。

私は、あなたと勝負しに来たのよ。

……………紅魔館のプライドを賭けてね。」

レミリアは、雲雀を指で指す。

「雲雀恭弥。あなたは、私の目の前で、私の従者を手に掛け様とした。」

……………私は主として、従者を手に掛けようとした奴を野放しにする訳にはいかないのよ。

まあ、半分は暇潰しっていう意味もあるけど……」

「……で、つまり君は何が言いたいのんだい？」

雲雀はまたレミリアの方を向く。

「私があなたと闘ってあげるといふ事よ。

……安心して、私は咲夜より強いから。」

ボオッ！！

すると、レミリアの左手から身長に似合わぬ、紅い炎の槍……

……グングニルが錬成される。

「……確かに、君ならあのメイドとは違い、楽しませてくれそうだ。」

バキンッ！！

雲雀は呟くとトンファーから出ていた玉鎖をしまい。

ボウオッ！

両手のトンファーに雲属性の紫の炎を纏わせる。

「さあ。

舞台は整ったさつさと始めようか。でも、僕は相手が子供だとしても容赦はしないよ。」

雲雀は、レミリアにトンファーを構える。

「解っているわよ。」

「………咲夜、少し離れなさい、此処はもうじき戦場になるわかなり危険な。」

レミリアは咲夜に避難を指示する。 ……………しかし、顔はさっきの笑いを取り戻している。

「……………じゃあ、始めましょう、雲雀 恭弥。  
ちなみに、私の名前はレミリア・スカーレットよ。」

レミリアの顔には、やはり笑いがある。

「……………興味無いね、そんなの。」

雲雀はそんな事はどうでもいいらしく、今にも襲い掛かろうとしている。

「……………では、やりましょう。」

雲雀恭弥、子供にやられたからって、気を落とさないようにね！

ギャキキーン…！

……………そして、レミリアの言葉を皮切りに、トンファーと槍がぶつかりあうのであった。

標的 5      〽 Orgoglio      洒落なメイドと孤高の浮雲〽（後書き）

此処でみなさんに質問です。

僕は一話平均2500文字なのですが、みなさんはどう感じますか？  
一言あれば何かお願いします。

標的 6 〽 U n i c i d e n t e 人里でのアクシデント〽

(前書

遂に人里の異変編。

最初はしない予定でしたが、進路変更という事で……………

に、しても最近東風谷より慧音の方がいいんじゃないかなと思う毎日…………

……………  
ああ、どうしよう……………

って、事でどうぞー!!

## 標的 6 〱 U n i c i d e n t e 人里でのアクシデント〱

雲雀がレミリアと闘っていたその頃……………

空を飛び始めて30分程。

……………俺達は無事、人里に到着。

地面に着地し、人里を今度は歩き始める。

幻想郷の人里は歴史の教科書に出てきた様な、江戸時代の街の様な古臭い雰囲気とする。

「……………何か風情ある所だな。」

……………俺の肩に乗ったりリボーンが人里を眺め回しながら呟く。

「どうですか、幻想郷の人里は。

日本の都会とは違い、風情が溢れる。

何処か田舎の様な懐かしい里。

……………それに目を付けるなんて、リボーンさん中々センスありますね。」

東風谷もりボーンの呟くが聞こえたらしく、丁寧に答えてくれる。

風情？

そんなのこの人里の何処で感じられるの？

俺にはただ古臭い里にしか見えないけど……

「…………ふふつ。」

沢田さんには、風情なんてまだ早かったですね、時期に判る様になりますよ。」

「えっ！？」

あれ？

なんでバレたの、俺は何も喋ってないのに……………

「お前の顔に現れてんだよ。

この里は古臭いつてな。」

「いつ！？」

えっ、そうだったの？

俺は念のため東風谷方をちら見する。

案の錠、東風谷は俺を見て慎ましく笑っている。

あ”くやつちゃった、てか恥ずかしいく！

「…………おい、そんな事より、さっさと人里で用を済ますぞ。」



東風谷も買い物があるんだろ？」

「えっ！？あつ、はいそうでした……………  
では、二人ともこれから私から離れて迷子にならないでください  
ね。」

東風谷はまた微笑んで歩きだす。

……………てか、俺どんだけ子供扱いされてんの！？

……………ふぁ。

俺は一つ溜息をつき、そのまま東風谷の隣で歩き続けるのであった。

そのまま、人里を歩き続ける事三十分後、俺達は何事も無く買い物が終了した。

「二人とも、此処はどうですか？」

東風谷は手に手下げ袋を抱えながら訊ねてくる。

「……………ううゝん、まあ、落ち着きがあつて良い場所だったよ。」

俺は東風谷が買った買い物袋を持つのを手伝いながら、問いに答

える。

「まあ、その前にツナは風情が理解できるようにしねえとな。」

「うつ……………」

相変わらず、こいつは痛い所を突いてきやがる。

「……………それより、二人とも、お腹空きませんか？  
もし、良かったらそこにある団子屋で一回休憩しましょう。」

東風谷は買い物袋を持っていない手で団子屋を指す。

「おつ、そりゃいいな。」

折角だから御馳走してもらうぞ。」

おい、そこは断われよ！！

俺は肩に居るリボンに心の中で突っ込みを入れる。

……………全く、図々しい奴なんだからこいつは。  
それより、今回は面倒な事起きなくてよかった！  
これで、今回の人里探検は安泰だ〜！

「で、沢田さんはどうするんですか？

食べますか食べませんか？」

「えっ……………じゃあ、お願いしようかな……………」

俺はまたもや東風谷の屈託の無い笑顔に負けてしまう。  
まっ、いいかな、俺もちょうど腹減っていたし。

「じゃあ、そろそろ行こうぜ。」

俺は、腹が減ってしょうがないんだ。」

リボーンは、俺の肩から東風谷の肩に乗り換え団子屋へ急かす。  
……… ったく、リボーンは何処の世界でもやっていける  
気がするよ。

東風谷の後について行き、団子屋へ入ろうとした、その時だった。  
俺の考えの浅墓さを充分に思い知らされる出来事が起こった。

「おい、みんな」

大変だ！里の広場に妖怪が出たぞ！！」

「「「！？」」」

一人の村人の言葉によって俺達の足は止まる。

……… 妖怪、だって？

「……… おい、東風谷。

これはどういう事だ？」

東風谷の肩に乗っているリボーンは、帽子で顔を隠す。

「……… あの人の言っている通りの意味ですよ。

この幻想郷は、あらゆる生物が共存する場所。

……… それは、時に残酷な時があるんです。

今回の様に、妖怪が人里で暴れたり……… ですが、最近はこの  
里を守ってくれる人が居る筈なのですが………」

東風谷は視線を地面に落とす。

「……………そんな事より、俺達も現場へ向かうぞ。  
まだ逃げてない奴を避難させなきゃいけねえーしな。」

「……………そつ、そうですね。  
では速く、里の中心部にある広場に向かいましょう。」

東風谷はそう言うと、広場まで一目散走り始める。

……………こりゃ、厄介な事に巻き込まれそうだぞ。

……………走り続けて三分位だろうか、俺達は問題の、広場付近に  
到着。

もう、ほとんどの人が逃げたらしく、広場の周りにはあまり人影  
が無い。

「……………どうやら、殆どの人は避難した、見たいですね。」

東風谷は、全力疾走したのか、生きを切らしている。

すると、リボーンは東風谷の肩から飛び降り広場の中心部辺りで  
暴れている妖怪を見る。

その妖怪は、体長二メートル位で形はミルフィオーレ日本基地で  
闘った、死刑隊の様な体型ですっしりとしていて、死刑隊と違う部  
分は両手に鋭く尖った六本の鉤爪がある所だろうか。

「お前達、早く逃げ……………て、東風谷じゃないか」

……………すると、背後から女の人に声をかけられる。

「……………って、あなたは慧音さん、じゃないですか!」

東風谷は、後ろにいる少女に驚く。

慧音と呼ばれた少女は、全体的に紺色の和風ドレスっぽい服に胸元に赤いリボン、頭には独特な形をした、青に赤い羽が生えた帽子を被り、灰色がかったロングストレートと、またまた独特な少女が登場する。

「……………あの、東風谷さん、この方は……………?」

俺は東風谷の耳元で尋ねる。

「あつ、この人は上白沢 慧音さんです。

さっき言った、この里を守っている人の一人なんですよ。」

「はじめまして、私が上白沢 慧音だ。

……………本当に済まない、私が牛柄の子供の面倒に気をとられたせいで、こんな事態に巻き込んでしまった……………」

上白沢さんは、東風谷の紹介が終わると、軽く会釈してくれる。

「グウオオオー!」

「「「「!?!?!」」」」

すると妖怪が、突然咆哮を上げ、俺達が今、やらなければいけない事を提示させられる。

「に、しても早く、あの妖怪を退治しねえとな。  
この里にどんな被害が出るか判んねえぞ。」

リボーンは、再び東風谷の肩に乗り、妖怪の方をチラ見見する。

「なっ……………赤ん坊が喋った……………」

どうやら、上白沢はリボーンが喋る事について驚く。  
絶対驚く方向が違うのに……………

「んな事、どうでもいいだろ上白沢。  
兎に角あの妖怪を退治するのが先決だ、それと東風谷あの妖怪には『弾幕ごっこ』が通用するのか？」

弾幕ごっこ……………幻想郷に来た時、東風谷から説明された  
幻想郷での決闘方法の一種だ。  
今は、説明する時間が無いから省くけど……………

「……………いえ、多分それは無いと思います。  
基本的に弾幕ごっこをする時は相手から言ってきますから……………」

「……………そうか。」

リボーンは東風谷の答えを聞くと、いつも通りニツ、っと笑う。

やばい、こいつがこんな笑いをする時は……………

「おい、ツナ。」

お前がアレを倒して来い!!」

……………という感じ、大抵は、面倒な事を押し付ける時なのだから。

標的 6 〱 U n i c i d e n t e 人里でのアクシデント〱

(後書

どうでしょうか、前半は人里。

後半は異変という感じです。

次回も多分、人里編で恐らくツナの幻想郷での初ハイパー化させる予定です。

では



## 束の間の休息　く物語のキャラC Vく（前書き）

ども、かなりの暇人c o c c o aです。

今回は貯めていた原稿を出しつくして、完全燃焼したので一息！

てな訳で、アイスココアを飲みながらまったりと覗いてやってくれたらなあ〜と思います。

束の間の休息　く物語のキャラCVく

沢田　綱吉　CV 國分　優香里

主な出演作品

蟲師　（ビキ）

妖怪人間ベム（　マサル）

等

リボーン　CV ニーコ

主な出演作品

不明（すいません　みつかりませんでした。）

雲雀　恭弥　CV 近藤　隆

主な出演作品

一番後ろの大魔王　（紗伊阿九斗）

BLACK CAT　（トレインハートネット）  
生徒会の一存　（杉崎鍵）

ボンゴレ？世　（ジョット）　CV 浪川大輔

主な出演作品

B L E A C H      (ウルキオラ・シファール)  
閃光のナイトレイド      (伊波葛)

八雲 紫      C V 井上奈々子

主な出演作品

ゼロの使い魔      (キュルケ・アウグスタ)

洩矢 諏訪子      C V 豊口めぐみ

主な出演作品

聖剣の刀鍛冶      (アリア)  
マクロスF      (クラン・クラン)

東風谷早苗      C V 花澤香菜

主な出演作品

化物語 (千石撫子)  
angel beats! (立華奏)  
デユラララ!! (園原杏里)

十六夜 咲夜 C V 田中理恵

主な出演作品

ハヤテのごとく！（マリア）

家庭教師ヒットマンREBORN！（ビアンキ）

ローゼンメイデン（水銀燈）

レミリア・スカーレット C V 櫻井浩美

主な出演作品

angelbeats！（仲村 ゆり）

真・恋姫†無双 ～乙女大乱～（孫権）

上白沢 慧音 C V 桑島法子

主な出演作品

CLANNAD（坂上智代）

戦場のヴァルキュリア（イサラ・ギュンター）

以上。

束の間の休息　く物語のキャラクターく（後書き）

どうでしたか、キャラクターCV編

単なる暇つぶしで突っ走った作品です。

色々あると思いますが、そこらへんはご報告を。

では。

標的7      〽A r a n c i a    心穏やかな、橙の炎〽（前書き）

すいません、最近忙し過ぎて、投稿できませんでした。

今回はツナの初のハイパー化、楽しん見ていただけたら幸いです。

それでは!!

標的7      〈Arancia 心穏やかな、橙の炎〉

「ちょっと、まってください!!」

リボーンさん。

外来人で、何の力を持たない沢田さんに……この幻想郷で、あの妖怪を倒させるなど不可能です!!」

意外な事に、リボーン言葉にすぐ食らいついたのが、俺では無く東風谷であった。

てか、何の力も持たないって……

「……そうか？」

俺が思つには、ツナはそこそ強いからな何とかなるんじゃないかねのか？」

リボーンは言い終えると再び東風谷の肩から飛び降りる。

「何とかなる訳ありません!!」

良いですか、幻想郷は外の平和な日本の世界とは違うんです、もっと日本より恐ろしい場所なんです!

……いくら、沢田さんが喧嘩が強くても、此処ではその強さだと、絶対太刀打ちできません!」

東風谷はさっきのリボーン言葉を挑発と感じたらしく、地面に降りたりリボーンに向かって必死に熱弁を振るう。

……に、してもこんな言い争いしていて良いのかな?

あそこでは、妖怪が我が物ばかりに暴れているのに……

・

俺は制服のズボンの尻ポケットから、手の甲辺りにら27とあるミトンの手袋を念のため両手にはめて置く。

「沢田さん!!」

「はいっ!」

俺はいきなり、東風谷に怒鳴られ、反射的に返事をしてしまう。  
東風谷は話しに夢中で顔がいつぞやと同じく真っ赤だ。

「沢田さん、あなたも少しは反論してください!」

でないと、リボンさんの言うとおり、あの妖怪と闘うはめにな  
っちゃうんでひゅ・・・・・・・・!!」

東風谷は話しの途中で舌を噛んだらしく、その場でピョンピョン  
と飛び跳ねる。

あゝ相当痛そう・・・・・・・・

「あゝ、痛かった。

これからは、気をつけ・・・・・・・・じゃなくて、沢田さん!!」

一、二分その場で飛び跳ねた東風谷は再び、俺の方へ向き俺へ怒  
鳴る。

「・・・・・・・・はい?」

「はいじゃありません、沢田さん!! 良いですね・・・」おと  
り込み中申し訳ないんだが、さつさとあそこで暴れている妖怪を何



とかしてくれないかな。」「・・・」

慧音さんは言い争っている俺達に痺れを切らしたのか、穏やかながらも殺気が籠った声で俺と東風谷を制止する。

「全く、慧音の言うとおりだ。

このままこんなくならない事で時間を潰して、あれを放っておいたら、どんな被害が出るか解らねえぞ。」

「誰のせいでこんな事してると思ってるんだ!!」

俺はリボーンにすかさず突っ込みをいれる。

がしかし、リボーンは俺の突っ込みを無視して、レオンを右手の上に乗せる。

「・・・やばい。」

「って、事で此处はお前が行け、ツナ!!」

死ぬ気でアレを倒して来い!!」

俺の悪い予感的中し、レオンを拳銃に変身させたリボーンは、そのまま俺の脳天に拳銃を向け小言弾を発砲。

ズキューン!!」

「!!?」

乾いた銃声と共に俺の両手と脳天がゆらゆらと熱く、燃えているのが感じられる。

この感覚が正しければ、きっと瞳の色も橙色に変化している筈だ。

「……………それにしても久しぶりだなこの感覚、俺の記憶がただしければ、超死ぬ気モードになったのは高校入学のボンゴレ式入学式典くらいか？」

「……………あの、沢田さん？  
いきなり、どうしたんですか？ その……………」

東風谷はいきなり風貌が変化した俺が信じられないのか目を大きく見開いて俺を見る。

それは、当然だろう。  
脳天拳銃で撃たれて、血を流さず炎を流す奴なんてそうそう居るものではないだろうし。

「……………なあ、東風谷。」

俺は、視線を東風谷から妖怪に移し、背中越して東風谷に呟く。  
しかし東風谷はまだ驚いたまま、それに、慧音に至ってはそれほどびつくりしたのか、開いた口が塞がらないでいる。

「お前は俺を何の力を持たない外来人と言ったな。」

「……………なら、今から見せてやる。大切な人を守る、俺の覚悟の炎を——」  
ボオウツ——！

俺はそこまで呟くと、両手から噴出される炎の推進力を利用し、暴れている妖怪に向かって飛翔。

「はあっ!!」

そのまま俺は、その推進力を利用し、妖怪の右頬に強烈なる一撃。

「ウグウ!!」

妖怪は、その一撃の威力に耐えられず、何メートルか吹き飛ぶ。

「グウオオオ・・・」

しかし妖怪は今、殴られた頬を摩りながら、ゆっくりと立ち上がる。

・・・さすが。

今を受けて、すぐ立ち上がるとは、こいつ、妖怪だけあってタフだな。

しかし、

「これならどうだ？」

「!？」

俺はまたもや推進力を利用し、妖怪の背後へ、瞬間的に回る。  
そして・・・

「はっ!」

妖怪の首の付根の辺りに、今度は、右足での強烈な蹴りを入れる

が・・・・・・・・

バシッ！

「ウ・・・・グウオオオ！！」

しかし、今回はさつきとは違い蹴りを入れても倒ず、妖怪は俺の蹴りを受けても何事も無いかの様に、やり過ごし、すぐ背後へ向くと両手の鋭利な鉤爪を使い、俺を引っかこうと振り回してくる。

だが、その攻撃は俺に当たらず、ただ虚空を斬るだけである。

・・・・・・なんせ、俺には超<sup>これ</sup>直感のおかげで、お前の筋肉の微妙な動きで次に鉤爪が振り下ろされる場所が解るからな。

「ウグウウウ・・・・・・」

妖怪は俺に攻撃が当たらないのがイライラするらしく、鉤爪を振る腕の動きがどんどん乱雑になってくる。

俺は相手の動作が乱雑になっている間で隙を見つけ、こいつの懐に割り入る。

「これで終わりだ。」

ガシッ！！

そして俺は両手で妖怪の両腕の胴体の付け根を掴み、

「はあっ！！」

妖怪の腹に俺の右足を喰いこませ、そのまま妖怪を空中で半回転させ、妖怪を背中から地面に叩きつける。もし、この技に名前を付けるなら、妖怪を時計の長針に見立てた、時計落とし(Un orologio ultimo scherzo)ということろか？

「ウウウウ・・・」

妖怪は、今の一撃でのびたのか、仰向けにしてのびている。

「勝負はついた。もう暴れるのをやめたらどうだ？

・・・でないと、俺は本当にお前を殺さなくてはならなくなる。」

俺は妖怪にさっさと降伏する様に促す。・・・お願いだから、降伏して欲しい。でないと俺は本当に俺はお前を殺さなくてはならなくなる。

「グウウウ・・・」

すると、妖怪は意外な事に何の抵抗も見せずにただ、人里の出口へドストと立ち去っていく。

しかし、その目は俺の事を強く見据えている。まるで、俺に負けたのがかなり悔しかったかの様に・・・

・・・そう、ならいくらでも俺にかかって来い。

この人里に被害が出ない程度なら、いつでも相手になってやる。

俺は、その妖怪の後ろ姿へ、心の中でこう呟く。

「なっ、言っただろ。だから、心配する必要はねえって。」

リボーンは、妖怪をあつさりと撃退したツナを見て啞然とする東風谷の肩に再び飛び乗る。

「・・・・・・・・私がまだ幼い頃に、聞いた事がある。

・・・・・・・・数百年ものその昔、今回の様に人里に妖怪が現れ危機が迫った時、額と両手に橙色の炎を灯した少年が必ず現れ、その妖怪を幾多と退治したという。

しかも、その妖怪達は全て殺さず自分の住み家に帰らせ、その妖怪達からも慕われたという。」

「・・・・・・・・」

その言葉を聞き、東風谷とリボーンは黙り込む。

「そして、少年はその当時の人里の人たちに敬意を込められ、こう呼ばれたそうだ。

全てを飲み込み全てを包容する心穏やかな、大空と・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

リボーンと東風谷はまた、黙りこむ。

しかし、リボーンはこの言葉の意味を理解できたと言うのは、言うまでもないだろう・・・・・・・・。



標的7      〽 A r a n c i a    心穏やかな、橙の炎〽（後書き）

どうでしたか、少し頑張ってみました。

ん、最後の方で、慧音の言っていたそれ、みなさんは解りましたか？

次は一週間以内に会えたら嬉しいです。

では



## 標的 8

↳ Intuizione

直感

それと、

もう一つの激闘

（前

すいません、一週間以内にとかいながら投稿が、（一週間）ギリギリになってしまいました。

それに、最近投稿速度が一週間に一度……  
何処の週刊少年ジャンプだ？

それでは、八話をどうぞ！

「……………」

先程まで、妖怪が暴れていた、人里の中央にある広場。

しかし、今は暴れていた妖怪の姿は見えず、広場には両手のグローブから噴出した炎の勢いで宙に浮き、そのグローブを駆使した優れた運動神経で、あの妖怪を撃退した一人の少年、沢田綱吉の姿しかなかった。

…………… 沢田綱吉、一昨日神社の境内でオレンジ色の鬘を生やした小さなライオン、ナッツと共に倒れていた、少し不思議な外来人

…………… 何が不思議かと言うと、まず、いきなり、何の前触れもなく、私の腕を掴んで私が一回宙に浮いただけで、宙に浮くコツを掴んだ事。

そして、沢田さんが、今回あの妖怪を撃退する直前、沢田さんと同じく、外の世界からやって来た、黒いスーツに身を包んだ赤ん坊、リボンさんに、拳銃で、脳天を撃たれた時に、沢田さん自体が変化した事。

外の世界より、ずっと過酷で危険な、この幻想郷。しかし、この幻想郷で何の不自由無く、此処の生活に慣れ始まっている、この二人

「ま、ツナの奴も、久しぶりのハイパー化での戦闘だ。

今回の戦いはツナにとっても、良いウォーミングアップになったに違いねえな。」

「!？」

左肩に乗っている赤ん坊、リボーンさんの呟きに私は更に驚く。

その驚きぶりは手に持っていた買物袋を落としてしまう程。

……………今の力でもまだ、沢田さんは、ウォーミングアップ。

それに、慧音さんが言っていた数百年前に、今回と同じく、人里のピンチの時に現れた、橙色の炎を使いこなした少年。

……………一体、沢田さん達は何者？

「人里の危機が去ったと言うのに、随分深刻そうな顔してるな、東風谷。」

「ひゃっ!-!」

いきなり、沢田さんに声をかけられ、私は素っ頓狂な声を出してしまふ。

それに、この沢田さんの瞳は慧音さんの言っていた、大空の様に澄んでいて、まじまじと見つめられると、つい……………恥ずかしくなってしまう。

……………だが、沢田さんは妖怪を倒したというのに、まだこの状態（リボーンさんが言うハイパー化）から、普通の姿に戻っていない。

「……………おいツナ。」

妖怪を撃退したのにどうしてハイパー化を解かねえんだ、何か他

にもあるのか？」

リボンさんも私と同じ事を考えたらしく、帽子を深く被り沢田に尋ねる。

「……………ああ。

俺が、あの妖怪との戦闘している間に、俺の超直感が、二つの大きな炎圧の死ぬ気の炎がぶつかり合っているのを感じたんだ。」

沢田さんはそこまで言うと、くるりと向きを変え、あの妖怪が帰って行った森がある方向をじっと、見つめる。

死ぬ気の炎、超直感？

……………しかし、沢田さんは私の心情とは裏腹に喋り続ける。

「……………しかも、それだけじゃない。その二つの死ぬ気の炎の内、一つは俺達がよく知っている、雲雀の……………雲属性の死ぬ気の炎なんだ。」

「……………」

私は、ここまで来ると沢田さんの話している意味が、本格的に解らなくなる。

「……………すまないが沢田、それは少しお前の考え過ぎじゃないのか？

……………普通に考えて、直感で出したそんな答えが、正しいという確率は、少なすぎでは……………」

「俺はそんな事、思わねえぞ、上白沢。」

「……………」

慧音さんの、思案はリボーンさんの一言で遮られる。

すると、リボーンさんは私の肩からジャンプし、沢田さんの右肩の上に飛び移る。

「いいな、上白沢。

ツナにはな、常人を遥かに凌ぐ優れた直感力……………超直感というものを持っているんだ。

……………お前の言う、数百年前に現れたツナと瓜二つの少年と同じでな。」

……………なるほど、常人を遥かに凌ぐ直感力ですか。

だから沢田さんは私の腕を掴んで浮かんだだけで、その優れた直感力を使い、で宙に浮くコツを見いだしたんですね。

「……………で、ツナ。

お前はその二つの大きな炎圧の死ぬの炎をお前はどうする気だ？ツナの超直感の読み通り、その雲属性の炎が雲雀のだとしたらかなり厄介だぞ。

もし、あいつの暴れている場所が此処みたいな人里だったら、その人里に、どんな被害が出るか計り知れねえぞ。」

リボーンさんはまだ帽子を深く被ったまま沢田さんに尋ねる。この話を聞く限り、その雲雀さんというのは、怒ると手をつけられないきなる、じゃじゃ馬の様な人のようですね。

「……………そんなの、とつくに決まっている。」

沢田さんはリボンさんの問いに、そう言い捨てると視線を森から私に移し……………

「きやつ!？」

私の首筋と太ももの裏側を両手で抱き上げ……………俗にいう、お姫様抱っこを私にする。

……………すると、沢田さんは身体を徒競走のスタートダッシュの時と同じ様に身を低く屈め。

「俺は……………その闘いを止めに行く!!」

ボオウッ

「ひやつ!？」

グローブから噴出される、炎の使いその直感で感じとつたらしき場所に、地図やコンパスを一切使わず、只、何処かへ一直線に向かうのであった。

時間は少し戻り、ツナ達がまだ妖怪が暴れているとは知らず、東風谷の提案で団子屋に向かおうとしていた時。

……………紅魔館では、雲雀とレミリアがプライドを賭けた、大激

闘を繰り広げていた。

「……………君。……………小さいくせに、中々やるね。」

「……………そちらこそ、人間の分際で私と互角に渡り合うなんて。」

雲雀とレミリアはお互いに距離を取り、身体を休める様に、肩で息をしていた。

二人とも、相手の強さは身に染みて判っているが、自分のプライドが邪魔をするのかその事を素直に認めようとはしない。

バツ……………キーン!!

二人は、小休止が終わり、一気に距離を縮め、雲雀の雲属性の炎を纏ったトンファーとレミリアの赤い槍が激突。

そして、その二つの武器がぶつかり合う鈍い音が部屋中に響き渡る。

ガン     ギン     キン     キン     槍とトンファーの激しい応酬

キン     ガン     ガン     キン

……………ガキーン!!

そして、二つの武器の激しい鏝ぜり合い。

「……………あなたのトンファー、面白い色の炎を纏っているわね。一体、どんな力を秘めた炎なの？」

しかし、レミリアはこんな激闘のさなか、余程余裕があるのか雲

雀に質問をしてくる。

「……………そんな事より、闘いに集中しなよ。」

バツ！！

だか、雲雀はそんな質問には耳を貸さず槍を受けていない、もう片方のトンファーでレミリアを急襲。

「……………甘いわね。」

しかしレミリアは片方のトンファーが襲って来ると同時に槍を持つたまま、後ろに宙返り。

そして、雲雀の一瞬の隙を突き、宙に浮いたまま、自分の全力を込めた回し蹴りを入れる。

「くっ……………！！」

雲雀はそれをもろに喰らい、回し蹴りの威力の強さに、そのまま蹴り飛ばされそうになるが、蹴り飛ぶギリギリの場面で、さっきまで、槍を受け止めていた方のトンファーで置き土産とばかりにレミリアを殴り飛ばす。

ドゴッ！ ドバツ！

二人共、別々に部屋の壁に激突。

……………吹き飛ばされた威力がそれ程強かったのか、二人は壁をぶち抜くと隣の部屋まで飛ばされ、この部屋の広さが元の倍程の広さになっていた。

……………もちろん、二人のせいで部屋の備品や天井はこれでもかと言っほど破壊され、部屋は大地震で崩れた瓦礫の山の様になっていた。

「……………お嬢様！？」



咲夜は、レミリアが殴り飛ばされるのを見ると、雲雀との戦闘でボロボロになった身体でレミリアの所へ行こうとするが……

「咲夜、来ないで。私は大丈夫だから。」

壊された壁の中から土埃を舞い上げ、槍を持ったレミリアが出て来て、駆け付けようとする咲夜を槍を持っていない手で制止する。

……しかし、服はボロボロで頭に被っていた、赤いリボンがついた帽子は無く先程には無かった、カリスマのオーラが感じられる。

「……………随分と派手にやってくれたわね。」

……………雲雀恭弥」

レミリアは雲雀が激突し、埋もれている崩れた壁に人間ならぬ殺気を込めて尋ねる。

「君も……………やっと本気になってくれたみたいだね。」

すると、激突した壁の中からレミリアと同じく、土埃を舞い上げながら雲雀が顔を出す。

……………しかし雲雀はレミリアの放っている殺気を感じ取っているらしく、微かに笑いを浮かべている。

「これでやっと、君の本気を見る事が出来る。」

雲雀はレミリアの本気が見られるのが嬉しいのか、微かに笑ったままトンファーを構える。

しかし……………

「何を勘違いしているのかしら雲雀恭弥？」

レミリアは、やる気満々の雲雀をさげすむように冷笑する。

「勘違い？」

雲雀はレミリアの一言に眉をひそめる。

「そう、勘違い。」

「……確かに、今回、私はあなたに殴り飛ばされて、私もあなたと全力で闘うと決めたわ。」

そこまで言うとなレミリアは槍を地面に突き刺し、右手の中指と人差し指で一枚のお札を摘む。

「だから……私は本気でやらせて貰うの。」

この幻想のルールに基づいたやり方でね!!」

レミリアはそこまで言うとな、お札……スペルカードを左胸の前に持って来る。

「……悪いけど、僕には君の言っている事が理解できないな。幻想郷、ルール？ 一体何の事だい？」

ダンッ!!

雲雀はそこまで言うとな、トンファーを構え、レミリアに向かって一気に突撃。

「ならいいわ、雲雀恭弥。」

あなたに身をもって教えてあげるわ。

私の本当の恐ろしさと幻想郷の厳しさを。」

レミリアは、向かってくる雲雀に不適な笑みを浮かべ……

「神罰 スターオブダビデ！」

……と、雲雀に向かってスペルカードを放つ。

……すると、いきなりレミリアの周りに、何本もの青いレーザー光線と数多くの丸い弾幕が構築され。

「!?!」

突撃してくる、雲雀に向かい、レーザーと弾幕が次々と彼に襲い掛かって行く。

「くっ………」

雲雀はそのレーザーや弾幕が自分に当たるギリギリの所で、雲属性の炎を燈したトンファーでそれを防ぐ。

「ロール、出番だ。」

すると雲雀は、右手の中指にはめている、雲ハリネズミのアニメルリング……ロールをリングの状態から解放。

「クピイイ！」

……ボオウッ!!

するとロールの鳴き声と同時に雲雀のボンゴレリングに炎が燈る……そして、そのまま

ドッ、ババババッ!!

「「!？」」

雲雀のハリネズミのトゲが雲属性の増殖により一気に増加。

バン、ダダダダダ!!

最終的にその増殖したトゲが雲雀の変わりにレーザーや弾幕に激突、結局、雲雀にレミリアの放った弾幕が当たる事は無かった。

「君の強さもこんな程度。  
なら、興味ないな。」

雲雀はこう呟くと、ロールの増殖を元に戻し、再びトンファアをレミリアに向けて構えた、その刹那。

## 標的8

↳ Intuizione

直感 それと、もう一つの激闘（後

どうですか、今回は力を入れて一番の長編。

超直感の説明だけじゃ、物足りないと思って……

さてさて、次は絶対五日間以内に投稿したいと思います。

ん？ 終わり方がいつも一緒、気のせいですよ、きっと……

ではでは！！

一週間以内のつもりがポケモンと緋想天という落とし穴にはまり投稿がかなり遅れました。

すいません。

でも今回も結構内容が盛りだくさんです。

それでは！！

斬。

「「「!?!?」」」

突然、雲雀の背後の壁から紅い一閃が走った。

バシッ！

「「「……ぐっ。」」」

そのまま紅い一閃は部屋中を駆け巡り、雲雀、レミリア、咲夜を急襲。三人ともそれにより、別々の場所におもいつき叩きつけられる。

すると、雲雀の背後の崩れかけた壁から、右手に長く紅く燃える剣を携え、何色もの色がついた縦に菱形のガラス細工をした様な物を翼に生やした、吸血鬼と思われる、一人の少女が現れる。

その少女はレミリアとは色が違い、金髪で髪をちょこんと左側に結っており、白くて丸っこい帽子にレミリアと同じく、紅いリボンが付けている。

洋服もレミリアと同様ドレス見たいな服を着ているが、色はレミアのピンクでは無く、まるで鮮血の様に赤い色調のドレスであった。

「あつ、ごめんねーお姉様。

私、手加減って事知らないから、ちょっと力を入れすぎちゃった。」

少女は自分がやった事に罪悪感を持っていないのか、軽々しい様子で瓦礫等に埋もれている、レミリア達に話しかける。

「フラン……………どうしてあなたが此処に？」

瓦礫の山に叩きつけられたレミリアはゆっくりと顔を上げると、目の前に居るフランという少女に問い掛ける。

レミリアはどこか、フランという少女の登場に焦っている様に感じられる。

「どうして此処に私が居るのかだって？」

…………… あははっ、お姉様ってば変な事を聞くね。」

フランはゲラゲラと笑った後、また言葉を続ける。

「私ね、お姉様達と遊びたいの。」

もっとお姉様達と沢山遊んで、もっともっと多くの物を壊したいの。」

フランは目を丸くしているレミリアに満面の笑みで話しかける。

遊ぶという単語は、一見微笑ましく思えるが、その後に続く言葉により、この少女が求める遊びは決して微笑ましい事では無いのを物語っている。

「…………… ねえ君達、姉妹喧嘩は別の所でやってくれない？」

今は僕との闘いに集中してくれないと、噛み殺すよ？」

すると雲雀が瓦礫の中から姿を表す。今回の一撃で雲雀は更に激昂したらしく、両手のトンファーに纏う薄紫の雲属性の炎は澄んでいて、さらに純度が高くなっている。

「へっ、お嬢様このお兄さんと遊んでいたんだ。」

フランは雲雀を見るとニタニタ笑いを始める。



「じゃ、三人で遊びましょうよ。咲夜が居ないのがちょっと残念だけれど……………」

フランは赤い炎の剣を構える、そして…………

「ルールはとても簡単、死んだら終わりのDEATH Gameだよ！」

ガシンッ！

これと同時に、フランの剣と雲雀のトンファーが激突。

フランの登場に焦っているレミリアを尻目に紅魔館の戦闘はさらに激化するのであった……………

その頃、二つの大きな死ぬ気の炎の反応がある場所に向かう為ツナ達は木々が生い茂る、森の中をかなりのスピードで突っ切っていた。

「……………！！！」

二つの大きなエネルギーの場所に向かう為、森の中を猛スピードで駆け抜けている途中、俺はその場所から新たに表れた死ぬ気の炎を超直感が感知するが、その炎の余りにも大きい炎圧に圧倒され、ついその場で急停止してしまう。

「……………にしても、物凄く大きな炎圧だ。これ程大きな炎圧は、見た事が無い。」

「……………下手をしたら、これは白蘭以上だ。」

「……………沢田さん……………どうかしました？あの速過ぎるスピードから、いきなり急停止させられると、さすがに心臓が……………」

すると、俺の両手の上で抱えられている東風谷は、俺のXグローブから出る炎の推進力にバテたのか、目を回しながら呟く様に喋る。

「ツナ、ふと思ったんだが、お前の超直感に死ぬ急の炎を感知する能力なんてあったか？」

俺が見る限り、この幻想郷に来るまではそんな事はできなかったはずだぞ。」

「……………」

東風谷とは違い、リボーンはXグローブのスピードにものともせず、彼の鋭い洞察力で発見された質問に、俺は返す言葉が無くなってしまふ。

まあ、これに気づくとは、さすがリボーンという所だが。

俺は心のなかで嘲笑すると、気を取り直して、リボーンの質問に答える事にする。

「……………ああ、リボーンの言う通り、俺も幻想郷に来る前までは俺も死ぬ気の炎を感知なんてできなかった。

……………でも、幻想郷に来て……………いや正確にはあの妖怪と闘った時、何の前触れも無く。感じられる様になったんだ。」

これは本当の事で、あの妖怪を倒した後、いきなり二つの大きな死ぬ気の炎を感じる事ができた。

三年前のあの時では全く感じる事ができなかったのに……………

「要するにお前の死ぬ気の炎を感知する能力は、この幻想郷に来て開花したものなんだな。

この件が終わった後調べて見る必要がありそうだな……………」

リボーンは帽子を深く被って独り言の様にブツブツと呟く。

しまった……………今はこんな事をしている場合じゃないな。

リボーンが言った通り、まだこの件は終わっていないのだから。

俺はそこまで想うと、俺の両手の中でまだバテている東風谷に一声かけてやる。

「東風谷、バテていそうな顔をしているがまだま我慢できるか？」

「えっ……………あっ……………はい、多分何とか……………」

すると、東風谷の頬が何故か薄い朱色に染まる。

「……………そうか、ならもう少しの間、堪えてくれ。  
そうすれば、俺も速く到着するようにするから。」

ボウッ！

俺は東風谷にこう言い捨てると今までの約1・5倍の速さで再び移動を開始する。

……………もうこれ以上、時間を無駄には出来ないからな。

そうして俺は目的の場所に向かうのであった。

その後、三年ぶりに命を懸けた死闘が待っているとは知らずに……………

ツナ達が到着を急いでいる頃、紅魔館では雲雀とフランの戦闘が激化していた。

ヒュン　ビュン　ビュン　ガシンッ！！

フランの赤い炎を纏った剣は不規則な太刀筋ながらも一撃、一撃に致死性の攻撃力を込めているその剣の連撃を雲雀に与える。

しかし、雲雀はその攻撃を掠るギリギリの所やトンファーで剣を流して回避、その後フランの一瞬の隙を見つけ、両手のトンファーで

の連撃。

だが、フランもそれを意図も簡単に回避、一向に勝敗が決まらない文字通りの『接戦』あるいは『激闘』が繰り広げられていた。

「ねえ、君のお姉さん。

さつきからブーツとして、闘いに参加しようとしなないんだけど、どうしたのかな？」

雲雀は剣を避けながら喋る。

「ん？

ああ、レミリアお姉様の事。」

ガギンッ！

その後、フランの剣と雲雀のトンファーが激突。

「あのね、お兄さん。

その事だけど、私とレミリアお姉様はとても仲が悪いの。だってお姉様は私の事を495年間もの間、閉じ込められていたんだから。」

ガンッ キン キン ガンッ

その後、剣とトンファーの激しい応酬。

ザッ

雲雀は両手のトンファーでフランを左右から挟もうとするが、フランは上に跳躍しそれを回避。

ガン ギンッ ガン ガン ガギンッ

フランは翼を利用し、宙に浮いたまま剣で応戦。

しかし、それを雲雀も人間離れしている反射神経で全て受け流す。

ガギンッ！ ザッ

それでも決着がつかず、二人は体勢を立て直す為一旦後退。

雲雀の方が微かに息が荒く、戦況は雲雀の方が若干不利に見える。

「……………でも、それじゃあ僕の質問の答えにはなっていないな。僕は君のお姉さんがどうして参加しないのか質問したんだ。誰も君達の友好関係なんて聞いてない。」

雲雀は息を整えると、フランに今一度トンファーを構える。

しかし、身体の至る所にフランの剣のかすり傷があり、雲雀は『ボロボロ』である。

「……………もう。」

お兄さんは分かってないなー

だって、私とお姉様は仲が悪い、だからお姉様は私を嫌って、この遊びに参加しない。

理由はこの二つで充分じゃない。

ほら、お兄さんだって、例えば嫌いな人が居たら極力その人を避けようとするでしょ？

それと同じ原理だよ。」

フランは雲雀に同意を求める様に微笑む。

だが……………

「……………へえ、君のお姉さんは、面白い考え方をするんだね。もし僕が君のお姉さんの立場だったら、真っ先に君を噛み殺そうと

するのに。」

雲雀はそこでトンファーを構えるのを止め、フランの微笑にほくそ笑む。

まるで、自分が必ず勝つという様に……

「私には、お兄さんの考える事の方が面白いな。

だって、お姉様が私を襲おうとしないのは、私とお姉様に確たる力の差があるからなんだよ。

だからお姉様は、約500年前に何も知らない私を地下に閉じ込めた。

お姉様があの異変を起こすまで……………」

フランはそこまで言うと、レミリアの方を見る、レミリアはフランにここまで言われ、プライドが著しく傷ついたのか、ただ地面を見て、拳を強く握っている。

「さあ、休憩もできた事だし、そろそろ再開しようか。  
僕は君を噛み殺したいからね。」

そう言うと雲雀はどうした事が右手に持っていたトンファーを閉まってしまう。

「あれー？

お兄さんなんで、持ってた武器閉まっちゃうの？  
まさかと思うけど、その武器無しで私に勝てるのかと思ってないよね？」

フランは雲雀の行動に疑問を持ったのか、首を少し傾け、わざと雲雀を挑発する様にコミカルに話す。

「さあ。

僕はそれを君に話す義務は無いから、君には何も言わないからね、どうなのかは自分で考えなよ。」

すると雲雀は自分の頭上にいる雲ハリネズミを微かに眺め、右手の人差し指を上になてる。

「行くよロール、カンピオ・フォルマ形態・変化。」

雲雀はロールに何かをさせる為に掛け声をかける。

「クピイイイ！」

するとロールはそれを了解したといわんばかりに声を上げ、ロール自らと雲雀の立てた人差し指が薄紫色に発光。

「「「……………！？」「」」

雲雀を除く全員をそれを何が起こるのか、視線を発光しているロールと雲雀に送る。

ヴウンツ……………ガンツ

それから、徐々に薄紫色の発光が収まり、全体像が見えてくる。



そして……………

「さあ、覚悟いい？」

雲雀の人差し指から姿を表したのは、全体的に黒みを帯び、雲属性の炎を燈したトゲがある……………雲雀のボンゴレ匣、アラウディの手錠であった。

どうでしょう。

一週間分の内容量 まあ、文才は相変わらず無いですが……

ちなみに今はまっているポケモンはDPです。

あれが結構楽しい……

それと今週の終わりは僕の学校の学園際。

その次の日辺りに振り替え休日があるので、その日は色々頑張ろう  
と思います。

では。

追伸

イヤホンがついに？世を迎えました。

イヤホンして寝てたら気が付いたらちぎれてた……ひどいっしょ。

標的10 ｝Arrivo 雲の墜落 大空の到着 ｝（前書き）

何とか投稿できた・・・

今日から明後日まで振り替え休日、何して過ごそうか・・・

それでは！

「さあ、覚悟はいい？」

戦場の臭いが漂う紅魔館の一室。

しかしそこは、度々による激闘により一室と言うより、サッカーグラウンドが丸々一つ入る、大きい広場になっていた。

そして、右手にトンファーの代わりに、手錠を持った雲雀は、常人では絶対に堪えられる事のない、凄まじい殺気と共に威圧しながら、目の前の敵フランドール スカーレットに問い掛ける。

「ぷっ……………アハハハははは」

しかしフランドールは、その雲雀の問いをあたかも馬鹿にするように、音調がかなり狂った笑いをする。

……………音調が外れたフランドールの笑い声は、心なしか闇にざわめく悪魔の嘲笑に聞こえる。

「ねえ君、そんなに笑っていて何がおかしいの？」

雲雀はそんなフランドールに睨まれただけで硬直しそうな鋭い視線を加え再び殺気で威圧する。

「……………だって、お兄さんの言う事がとっても面白いんだも

ん。」

かフランはそんな雲雀の殺気をものともせず、はたまたコミカルに喋り始める。

「でも、ここまで私に追い詰められてまだ、強がる人間、初めて見たよ。

普通ならここで、助けてーとか止めてくれーなんか言って私に恐怖して命ごいをするのが普通なのに。

でも結局、私が壊すの決まっているのだから無駄な事極まりないのね。

お兄さんはそんな事しないってことは……………」

コミカルに喋る変わりに内容はかなり残酷さが混ざっている。きっと、この少女はそれだけ圧倒的な強さとそれを証明できるだけの修羅場、フランの言う『遊び』を体験をしているのだろう。それもかなり一方的な『遊び』を……………」

「……………」

すると雲雀は、そんなフランの言葉に黙り込むんでしまう。

雲雀にもきつと、この少女を目の前にした時、『恐怖』や『畏怖』等を感じる事であつただろう。

……………しかし雲雀はそれらの行為を自らのプライドがさせないのであろう。

自らの高貴で気高い、孤高のプライドによって……………」

「それに、お兄さんだって気づいているよね。」

お兄さんの身体はもう既にスタボロ、私が放った最初の一撃は、お兄さんの背中にもろに命中させたはずし、普通の人ならその時点で立ち上がることもすらできないはずだよ。

お兄さんをそこまで支える物って一体何、それにお兄さんの身体はいつまで、私との遊びに堪えられるの？

ちなみに私、遊び飽きたおもちゃはすぐに壊しちゃうタイプなんだ

私、かなり飽き性だから。

さあって、お兄さんはいつまで、楽しめるのかな？」

フランは雲雀は黙ったのをいいことに饒舌な舌でどんどん喋ってくる。

「……………一つ、いいかな。」

僕は君の玩具になった覚えは一回も無いよ。

それより早く、この茶番劇を終わらせようよ。君の相手はもう疲れた。」

ヒュン ヒュン ヒュン ヒュン

すると雲雀は右手の人差し指に持っている手錠を弄ぶように回し始める。

しかも一つだった手錠はいつの間にか二つに増え、左手に持っていたトンファーをも収納し、両手の人差し指で手錠を回し始める。

「君の行動、及び言動を並盛中風紀委員並びに本校への敵対運動と見なし、

君を並盛中反逆罪として……僕が逮捕する。」

ザンッ

それと同時に雲雀はフランへと向かって走り出す。

ヒュン ガンッ ガンッ ヒュン ヒュンガンッ

雲雀は両手の手錠をトンファーの様に使いこなしフランの剣に応戦。

時より手錠で応戦できない場合は自らの身体を反らす等として回避。

雲雀の動きは更に俊敏さを増し、この激闘に終止符を打とうとしている事が窺える。

「無駄だよ、お兄さん。」

どんなにお兄さんが頑張っているとしても、人間の分際で私には敵わないよ。

それにその手錠、どんなカラクリかは知らないけど。

もし私の手にはめたとしても、すぐに壊して抜け出せるから、かなり無意味だよ。」

フランは緊迫したこの状況を未だ楽しんでる、きっと少女にとって雲雀はただの人間でしか無いのだろう………

しかし、フランは知らなかった。

雲雀は三年前、未来に飛ばされ幾多もの戦闘をこなしていたことを。

「確かに、君には二、三個の手錠だけでは、到底効足りそうに無いね。」

ガシンッ！ ガチャ

雲雀の言葉が終わると同時に両手の手錠がフランを捕らえる。

「でも、もし手錠が三十や四十の数があつとしても、君は余裕な顔で、手錠を壊して抜け出せるの？」

「!？」

その瞬間初めてフランの顔が驚愕の色に染まる。

ポオウッ

雲雀の言葉の後、間を入れず、彼の雲のボンゴレリングが発光。

ガン カンカンカンカン……

フランの手を捕らえた手錠は雲の増殖により激増しフランの顔を



除く全身を駆け巡り、あっという間にフランの全身を拘束具の如く縛り上げる。

「「……………！？」」」

その凄まじい光景にさすがのレミリアと咲夜の二人も何も言葉が出ない。

「さあ、決着はついた。

君はこの全身縛り上げられた状態から、どうやって抜け出せるのかな？

見物だよ。」

雲雀は最初に掴んだ手錠の片方を持ち、勝ち誇った顔をして、フランに話かける。

「……………」

だがフランは何も言う事無く、ただ下を向いている。

「どうしたの？

何か喋りなよ、でないと……………少し締め上げるよ。」

すると雲雀は掴んでいる手錠を少し握る。

フランを捕らえている拘束具も連動して彼女を圧迫し、フランを更に締め付ける。

ザシュッ

……締め付けられると同時に拘束具の外にフランの赤い鮮血が生々しく桜の花びら如く飛び散る。

しかしフランはそこまでされて尚、ただ下を向いて黙り続ける。

「ねえ、どうしたの？」

さっきまであんな流暢に喋り続けていた元氣は何処へ行ったの。」

雲雀はさらに手錠を掴み、フランを限界まで圧迫させようとした、

その刹那だった。

ザンッ！

雲雀の右側から、不意に二人目のフランが現れ雲雀の脇腹に、フランの全身の力が籠った強烈なタックル。

「ぐっ……………」

雲雀はフランのタックルの衝撃に堪えられず手錠から手を離し、吹き飛ぶ。

「こんにちは。」

「……………!？」

これは悪夢なのか、雲雀が吹き飛んだ場所に、残虐な笑みを浮かべた、三人目のフランが登場。

吹き飛ばされ、体勢のままならない雲雀の腹に右足での屈強な一撃。

「ぐっ……………」

バキッ、という骨が軋む音とともに、雲雀は口から吐血。

そのまま、雲雀はフランに蹴り飛ばされ……………

「がっ……………」

四人目のフランが駄目押しと言わんばかりに、雲雀がたたき付けられた地面が崩れる程の渾身の踵落とし。

（手錠に拘束されているフランを除いて）総勢三人のフランによる、怒涛の嵐。

その光景は三人の悪魔が織り成す、壮絶なるフランのスペルカード『フォーオブアカインド』であった。

「……………どう、私の強さ。」

何本か骨をまた折つといったけど、お兄さんも存分に、楽しめたで

しょ。」「」「」

合計四人に分身したフランは地面に倒れ込んでいる雲雀に尋ねる。

「……でもいいや。」

私、お兄さんと遊ぶのあきちゃった。」「」「」

グギギギギギ………バギンッ！！

するとアラウデイの手錠に拘束されていたフランは物凄い力で手錠を破壊し、先程の鮮血が何事も無かった様に抜け出し、残り三人のフランが手錠から抜け出たフランと同化する。

またフランに破壊された手錠はアニマルリングの形となり、雲雀の手の指に戻った。

今回、フランを拘束するのにかなりの死ぬ気の炎を消費したらしく。もし、フランがレミリアと同じく弾幕を放ってきててもロールは使えず、雲雀自身も『フォーオブアカインド』により、動く事さえままならない。

形成逆転………そして、万事休す。

だが、

「……………」

雲雀はこのボロボロの身体で、操り人形の様なぎこちない動作で、再び両手にトンファアを握りながらゆつくりと、立ち上がる。

制服も既にボロボロ、口の周りにはさっきの吐血の後があり、目つきもこの状態でまだ、鋭くなっている。

「うふふ、まだやる気？」

お兄さん頑張るね、どうしてそこまで頑張るの？  
何がお兄さんをそこまでさせるの？」

「……………」

雲雀は、フランの言葉に耳を貸さず呆然とトンファーを構える。

「……………まあ、いいや。」

そんなの今から壊すおもちゃに聞いても仕方ないからね。」

すると、フランは一枚の札を手にとる。

「バイバイ、お兄さん。」

お兄さんとの遊び、まあまあ楽しかったよ。  
でも、もうおしまい。

禁忌 カゴメ カゴ……………『GAOOU!』…!?!?」

フランのスペルカードはある動物の咆哮により、最後まで唱えられ  
る事は無かった……………

バゴギンッ!!

ドゴンッ!!

「「「「!?」「」」」

紅魔館の壁に大きな亀裂が入り、全員の視線がその亀裂に送られる……

「……………どうやら、間に合ったみたいだ。」

バンッ!

身を屈めて、白いシャツに黒いベストを着た少年が現れた。

「ガウッ!」

しかも、只の少年では無い。

橙色の鬘を生やした、小さなライオン。

右肩に黒いスーツに身を包んだ赤ん坊に、両手に緑色のロングヘアーに巫女を装束を着込んだ、少女を抱えた。

死ぬ気モードの沢田綱吉、いやボンゴレX世であった……………

標的10 〈Arrivo

雲の墜落 大空の到着〉

(後書き)

・・・疲れた。

基本寝る前に小説を書くのですが、眠い・・・

誤字があつたらお願いします。

次は明日に会えたら良いです。

ではでは！

標的11 Un inizio di battaglia vs フラン

昨日、投稿の予定が風邪により一日のびました。

ごめんなさい。

それと、サブタイトルのイタリア語、これからまえがきで解説する事にしました。

今回は、『戦闘開始』という意味、それでは



死ぬ気の炎を感知し、人里から飛んできた俺は、寝ている門番が居る庭を通り越し、表側の壁が、紅く塗装された館に乗り込み、この館の中の状況に絶句する。

両手を東風谷を抱いていたので、ナッツを使い、壁を石化させて侵入するという手荒いやり方で侵入したのだが……………

至る所に瓦礫の山、天井は高くえぐれ、部屋と部屋を仕切っていた壁は無惨に壊され、ちよつとした大広間に、また血痕もあらゆる場所に垂れ落ちていて生々しく、それが戦場の渴いた雰囲気と激闘の傷跡を嫌というほど醸し出している。

超直感が感じた炎を追ってここまで来たが、正直ここまで酷いとは……………

「にしても……………この部屋の状況は酷いですね。

沢田さんの指輪からあのライオンちゃんが現れたのも驚きですが、それ以上にこの空間の余りにの生々しい雰囲気酔いが一気に覚めてしまいましたよ。」

東風谷も俺と同じ考えらしく、深刻な顔してこの空間を見回す。

彼女の頬に、うつすらと一線の汗が浮かび上がる。

「……………ツナ。

まだ、悪い知らせは終わってねえぞ。

アレを見てもみる。」

右肩に乗っていたリボーンは、地面に降下し、ボロボロの状態になって立っている、雲雀恭弥を指で指す。

「沢田綱吉に赤ん坊……………何処から現れたのかは知らないけど、何しに来たの？」

雲雀は俺の方を向くと、相変わらずの鋭い目つきで俺達を睨む。しかし、その姿にいつもの威厳は無く、制服も至る所がほつれていて、雲雀の動作に操り人形の様なきこちなさがあることから、雲雀は相当のダメージを受けたのだろう。

それも、常人では命を落とすレベルの物凄いダメージを……………

「あつ、また新しいお兄さんだ。

今日はいつも以上に色んな人がくるね。

何かお祭りみたい!!」

すると、独特な形状をした形の羽を生やし、赤いドレスに黄色めいた髪を左側にポニーテールで結んだ可愛いらしい幼女が俺達の方を向いて微笑んでくる。

幼女は、羽が生えているという時点で人間では無いことを物語っており、おそらくは東風谷の言う、幻想郷に住むという吸血鬼の幼女であろう。

だが、

この幼女が出す、威圧感はハンパない…………

本人は気づいてないかもしれないが、放たれる威圧感は本当に凄まじい。

超死ぬ気化では無ければ、俺は足がすくんでいただろう

きっと、雲雀はこの幼女にやられたのだろう。それも、完膚なきまでに。

ザッ…………

俺は、東風谷をそつと地面に立たせると、右肩にリボーンの変わりにナッツを乗せ、一步、前踏み出す。

「……………雲雀、お前は傷を負い過ぎだ、下がっている。こいつは俺が何とかする。」

ボオウッ！！

両手のグローブに炎を燈し、雲雀へ語りかける。

俺のファミリーの一人がやられそうになっているんだ。

その事に黙って目をそらして無視できる程、俺は廃れていないんでな。

それに、俺はボスを継ぐ時、決意したんだ。

守護者達を俺は、全力で護るという事を…………

「……………何言ってるの、沢田綱吉。」

これは僕の獲物だ、僕の邪魔をするなら、まずは最初に君を噛み

殺すよ?」

すると案の定、と言つべきか。

雲雀はそれを許諾せず、俺に向かつてトンファアを構えて来る。

「……………止めとけ雲雀、今のその身体じゃツナを倒す事すら不可能だぞ。

自分の事だ、雲雀が一番わかっているかもしれないが、お前、骨を何箇所か折られていて、立っているのがやつとの状態だろ。悪い事は言わねえ、ここはツナに任せて一回下がれ。

……………もし、言う事を聞かないなら力づくでも下がらせるぞ。」

リボーンは帽子を深く被り、レオンを拳銃に変化させ、雲雀を脅す。

「赤ん坊……………」

雲雀は何故カリボーンの言う事には、聞く耳を立てるらしく。

トンファアをぐつたりと降ろし、

「仕方ない。赤ん坊の言葉に免じて今回だけは君に譲るよ。」

と言い捨て、この部屋の壁側まで行きゆっくり座り、俺と少女の闘いを観戦するかのような姿勢をとる。

本当にさすがだな、この雲雀を言い丸めるとは、やはり凄い。これで俺も本気で行ける。

「ガウッ！」

右肩に乗っている、ナッツもどうやらやる気だ。

「……………沢田さん、私も一緒に闘います。」

あの子の殺気は尋常じゃありませんし、第一、外来人の沢田さん一人じゃとても不安です。」

……………すると、以外な事に東風谷が俺と一緒に闘ってくれるという。

東風谷の実力を知る良いチャンスだし、とても心強い、だが……

……………

「……………すまない、東風谷。」

この場合は俺にやらせてくれ、これは俺の闘いなんだ。」

「!?」

……………俺は東風谷との共闘を断る。

「確かに。今回は、出る幕じゃねえぞ東風谷。」

これはツナのファミリーについての問題だ。」

リボーンが俺の言葉においうちをかける様に東風谷へ語りかける。

「なっ……………リボーンさんまで……………どうしてですか？」

相手の強さがわからない今、数が多いなら闘いが有利に……………」

「いいから、おとなしくツナの闘いを黙って見ている。  
それからでも、お前が加わるのは遅くは無いはずだ。」

「……………」

リボーンは、東風谷を雲雀と同じく言いくるめ、辺りは一層静かになる。

「さあ、小休止は終わり。」

そろそろ本題に入ろうよ、お兄さんが両手にしている、そのグローブって、お姉様がよく話してた、ボンゴレって組織に関する物だよね？」

「……………」

俺とリボーンは幼女の言葉に、耳を疑う。何故、幻想郷の奴がボンゴレの名を……………」

「ふふっ、どうやら図星だったみたい。」

じゃあ、教えて。ボンゴレの強さを、お姉様を楽しませた、その強さを。」

「……………」ああ、いいだろう」

ボオウッ！

呟くと同時に、俺はグローブの炎を柔の炎から剛の炎へと変化させる。

……………」そうだ、俺が今からやる事は決まっている。

この幼女がボンゴレを名を知っていたとしてもそんなの今は関係無い。

今はただ……………」

ザッ！

推進力を利用し、今までいた場所から瞬時に、この少女の背後へ移動。

「お前を倒す事に集中するだけだ。」

ザンッ！

咄くと同時にグローブで少女の背中に一発のストレート。

ギンッ！

「……………くっ、」

少女はそれをすんでの所で、赤い炎を構築した剣で迎撃。  
この赤い荒々しい炎……………嵐属性に近い。

バッ

俺は一度、少女から距離をとり……

「はあっ！」

真っ正面からの正拳。

ガンッ

これも同じく、少女の剣で受け止められる。

「何を考えているの、ボンゴレのお兄さん？」

正面からの一撃を、まさか、私が止められ無いとも思ったの。

ほら、早くその自慢の拳で私の『レーヴァテイン』、突破してみ

てよ。」

幼女は、俺を挑発する様に、軽快な口調でコミカルに語りかける。  
しかし……………、これが受け止められる事など予想通り。

「ナッツ！」

すると俺は右肩のナッツに、一声。

「GAOOO！」

ナッツは俺の言葉を待っていたかの様に、幼女の剣へ向け、咆哮。

ピシャッ

「……………えっ!？」

ナッツの咆哮により、幼女が持つ『レーヴァテイン』という剣が  
大空の調和により石化。

その石化した剣を左手で掴み、それを軸にし幼女の脇腹に、回し  
蹴り。

ドバンッ！

幼女は、俺の蹴りに耐えれず既に崩れている、部屋の側面の壁に  
激突。

「どうした、お前の力はそんな物か、俺はまだ本気の二割も出して



いないぞ。」

俺は、その側面の壁を見据えながら幼女に、聞こえる様な声で呟く様に話しかける。

……………そう、闘いはまだ、始まったばかりだ

・・・ついにVSフラン編開幕。

最初を見ると、ツナが結構有利そうです、さてこれからどうなるやら・・・

時期を見て、他の守護者も幻想入りさせます（紅魔館とは限らないけど）、とういうよりぶっちゃけ、守護者を何処に行かせるか考えているのですが、タイミングが・・・

長々と語ってごめんなさい、どこら辺で守護者の話あるいはジョットの話を組めば良いか誰かアドバイスください。

でわでわ。

いろいろあつて遅くなりました。

ごめんなさい。

今日からテスト二週間前、さてどうしようか・・・

あと、サブタイの意味は闘う理由です。

では！

沢田さんにより、連れて来られた赤く塗装された大きなお屋敷。

中では最初に雲雀さんと言う、沢田の知り合いらしき人と、幻想郷の吸血鬼が闘っていたらしく、雲雀という人は戦況は余り芳しく無いといったみたいです。

私達の乱入により状況が一変。

「どうした、お前の力はそんなものか。  
俺はまだ本気の二割も出して無いぞ。」

両手のグローブに橙色の炎を纏った沢田さんは、その橙色の瞳で、吸血鬼の幼女を蹴り飛ばした壁を見据える。

向こうで見ている、メイドと蝙蝠の翼を生やし、ピンクのドレスを着た少女も、彼の想像を超える強さにより目を丸くしている。

私には、沢田さんが闘っている理由と、リボンさんが言っていたファミリーというのは、何の事かさっぱりわかりませんが。

沢田さんの戦闘力は、私達が考えている以上に………高い！

「どうだ東風谷、ツナの強さは。  
お前は敵の力がわからない以上、味方の数が多いに越した事は無いと言ったが。」

今、ツナの闘い方を目の当たりにしてもまだ、同じ事が言えるか

「？」

「……………」

私は隣に居る、リボーンの問いに戸惑ってしまふ。

…………… 沢田さんの強さの秘訣は、両手の炎を燈したグローブの推進力を使い、相手を翻弄する、非常にトリッキーな闘い方にある。

もし、そんな沢田さんと一緒に闘おうとしたら、彼のあの俊敏さに水を差さないよう事前に二人で、戦術を練らなければいけない。つまり、私達はその事前の打ち合わせをしていなく、私が迂闊に入ると沢田の足を引っ張ってしまふ事にも……………

「……………」

「まあ。

東風谷が何も言わねえのなら、俺はそれでも良いんだけどな。

んじゃあ、俺は向こう行って雲雀の怪我の様子を見て来るからもし、東風谷にまだ、ツナと一緒に闘う気があるのなら俺は止めはしねえが。」

すると黙りこくる私を、リボーンさんはどう思ったのか、雲雀という少年の元へ行ってしまふ。

…………… 本当にこの二人は何者なんでしょう？

まだまだ沢田さんと吸血鬼の闘いが続くと思われるこの屋敷で、私はリボンさん達に大きな疑問を抱える事となった。

闘いは始まったばかりであるというのに……………

十                      十                      十

「うふふふつ。さすがは、お姉様が認めたボンゴレの人間。私を楽しませてくれるだけね強さはあるみたいだね。」

羽を生やした吸血鬼の少女は無邪気に笑いながら、俺の攻撃を何事も無かったもの様に壁を抜け出して来る。

その笑いはあの白蘭の如く、どこか不気味だ。

「じゃあ、ウォーミングアップはここまで、私も本気で行くから、あまり早くに壊れないでよね。」

斬。

すると少女は再び炎の剣を錬成すると、目にもとまらぬ速さで素早く突撃。

ザンツ シュツ サツ

俺はそれをグローブで受け止め、突撃の後の連撃もグローブを使い受け流す。

そしてそこから、剣と拳の一進一退の攻防。

嵐属性らしき、赤い炎を纏った剣は俺の首を刈り取る様に横へ薙ぎ払い。

俺は、身体を下に反らし、その薙ぎ払いを回避。  
剣はそのまま角度を変え、斜め上からの斬撃。  
ビシッ！

斬撃を全ては避けきれず、ベストに一線の剣筋。

薙ぎ払い、回避。

斬撃、グローブで弾く

斬撃、グローブ、斬撃、回避、斬撃。

同じ、パターンの攻撃が何度も繰り返され、俺と少女の戦闘が激化。

カウンターのチャンスを上手く掴めず、自然に防御へと転換。

くっ……………未来で闘った、幻騎士みたいな流派を極めた剣士の剣撃であれば微妙な筋肉の動きを超直感で察知し当たる前に回避する事ができるが、この少女みたく無垢に剣をめちやくちに振るう様な奴は、筋肉の動きを読みにくく、グローブで剣を受け止めてしまうため反撃がやりにくい。

「闘いの途中に考え事？」

バンッ

「がっ……………」

少女の細い足が俺の腹を捉え、少女とは思え無いかなりの力で蹴り飛ばされる。

「まだまだ」

少女は蹴り飛ばした俺を追撃する様に、地面を踏切、俺に剣での強烈なる一撃。

バシンッ！！

俺は一撃をグローブの推進力を使い激突を回避。しかしその一撃の剣圧が物凄かった為、打ち付けた地盤の破片が飛び散り、俺の身



体に幾つかが掠ってしまふ。

ザンッ

俺は一旦、幼女から距離を取り地面に着地。今の破片と先程の剣撃でスタボロになり鬱陶しくなった高校の黒いベストをむしり捨て、シャツとネクタイだけになる。

「今の攻撃を避けるとは、私もう少しビツクリ。  
うんうん、それでこそボンゴレだよ。」

幼女は相変わらず、コミカルに挑発的に俺を怒らせる様に喋る。

……………舐めやがつて……………

「んじゃあ、肉弾戦は飽きたから、次は弾幕ごっこね。  
ボンゴレの人なら全部避けれるよね。」

幼女は、喋り終わると右手で一枚の札を掴む。

……………なるほど、アレが東風谷の言うスペルカード。

東風谷が言うには、カードに霊力をあらかじめ込め、弾幕を放つ、いわば、俺の世界で言う、死ぬ気の炎を注入しいつでも開匣可能で、開くと弾幕が飛び出る札型の匣兵器。

また、匣兵器との違いが幾つかあり、その中での大きな違いはその形とスペルカードと匣兵器を造るまでの過程の簡単さにある。

匣兵器は制作されるまで、高度な技術と科学者が必要で、俺達だけでは到底、造れそうに無い代物だが、スペルカードは札に俺の場合、死ね気の炎を込めるだけで造れるとても簡素な物。

現に俺も、東風谷からまだ炎を込めていない空のカードを渡され、ある技を記録させといてある。

とはいえ今はまだ、一枚しか所持していない為、ここぞという場面です使える、あの特技しか記録してないが……………

「禁忌 カゴメカゴメ」

すると、俺の回想が終わると同時に少女のスペルカードが発動。

緑色の鮮やかな弾幕が四方八方から一直線に、俺の周りをじわりじわりと間隔を無くしながら迫ってくる。

まるで、未来にいる時、白蘭とのチョイスで霧の真六甲花、トリカブトが使った方眼ウミヘビの様に。

……………ヤバいな、もしこのまま四方八方から弾幕が飛んできると、身動きがとれなくなり、最終的に囲まれて当たってしまう。それに、上に飛んで移動しようとしても、地面から天井までの間が小さい為、ピーキーなXグロブの炎だと、頭から天井に激突し、弾幕に当たる以上のダメージを受けてしまう。

「さあ、お兄さん早く、今居る場所から移動しなよ。  
じゃないと私のスペルカードでドッカンだよ？」

相変わらず、少女は人を舐める様な口調で喋ってくる。

きつと幼女も、俺が避けれ無いのを知ってわざと、挑発して来るのだろう。

でも、俺がそんな事を考えている間にも刻々と弾幕の幅が狭まり、身動きがとれなくなってしまう。

……………仕方がない。ここまで迫られるともう考えている暇は無いみたいだ。

「ナッツ、カンビオ・フォルマ モードチェンジャー形態変化 防衛モード」

すると俺は右肩のナッツを左手に乗らせ、形態変化の掛け声をかける。

ナッツの額にある、帽子みたいな部分からボンゴレの上空の紋章が浮かび上がり、ナッツが左手の上でライオンの姿から徐々に変化。

弾幕が俺に当たるまでにいけるか……………

ザッ ドンッ ダダダダダッ！

弾幕と弾幕との間隔がついに無くなり、鮮やかな緑色の弾が我さきにと俺へ突撃。

「あはははっ、ボンゴレも呆気ない。  
お姉様を楽しませたのだから、もっと強いと思ったけどとんだ計

算違いだった……………「何が計算違いだ？」……………！！」

ナッツが形態変化した、調和の能力を持つマントで当たる弾幕全てを石化させ、幼女の言葉を遮る。

……………東風谷の事だ。

今の俺の状況に驚き、目を丸くしているだろうと思い、東風谷の方を向くと、案の定驚いた顔をしている。

「サンキュー、ナッツ。」

幼女の弾幕を全て石化させ、ナッツをリングの姿に戻してやる。

「……………お前がどんな強力なスペルカードを持っているかなんて、俺は知らない、それに興味も無い。」

しかし、これだけは言つてやる、俺はお前を楽しませる為に闘っている訳じゃない、俺はボンゴレのボスとして、闘っているんだ。」

俺は幼女に宣言する様に強く放った。

きっと、この幼女は雲雀、そして俺との勝負を、遊びだと感じているのだろう。

それは、こいつの剣撃を見ているも感じられる。なんせこいつの攻撃には邪な考えが見とれないからな。

でも、だからこそ俺はこの幼女と闘う。

俺が未来で経験した、闘いの怖さというのを教えさせる為に！



・・・短いし、文才ないし投稿遅いの三拍子そろったcocoaです。

あと、余談ですが、風邪が全快しました！！

あゝモンハンsecond G何処行っただ？

必要じゃない時は見つかり、必要な時に限って見つからない事、ありませんか？

さて、何が言いたかったんだろう。

お前は、何に焦ってる！

あつ両親だ！

では

標的13 〽対炎 X B u r n e r〽 (前書き)

すいません、テストと戦闘していたら間があきました、これからは毎日連続で投稿していきます。

V S フラン編が終わる予定は、今週です。

それでは！

標的13　『対炎 X Burner』

「禁忌　クランベリートラップ！」

幼女が可愛く透きとおった声で、面白そうに発する言葉。

しかし俺には、そんな幼女の透きとおった声も、悪魔の囁きにしか、聞こえなかった。

「さあ、どんどん撃つよ  
ボンゴレのお兄さん」

迫ってくるのは、密度の濃い弾幕。

一つの場合にじっとしていると弾幕に囲まれ、逃げ道を塞がれてしまうので幾度か弾幕を避けつつ移動しなければならない。

俺は今、吸血鬼らしき少女と闘っている。

しかし、その幼女可愛い外見とは裏腹に、やたらと強いのだ。

人間離れた、類い稀な力の強さ、俊敏さ。

体術は、十年後の雲雀、白蘭に相応する強さ。それに、幼女による剣、弾幕の攻撃力がやたらと高い。

さっき、腹に彼女の足が食い込んだが、あれははつきり言って何回も喰らったら命にかかわる。

なら……………



「やられる前に倒す！」

ボオウツ!!

俺はグローブから炎を噴射し、弾幕の中を疾走するように通り抜け、一気に少女と距離を詰め少女に向かい、足で、一発の蹴り。

ガギンッ!

しかし、その蹴りは少女の剣の剣によって阻まれる。

「くっ……………」

俺は蹴りの状態からすぐ体勢を立て直すと、俺と少女は浮かび上がり空中戦闘。

空中になると、剣と拳が本格的にぶつかり合う。

足場が無い分、攻撃方法にバリエーションが生まれているが、この少女に果たしてそんな小細工で通用するだろうか？

「禁忌 恋の迷路！」

すると、フランドールの三枚のスペルカードが発動。

迷路という文字通り、円状に放つ弾幕には逃げ道があり、その円状に放たれた弾幕群に当たらない様、慎重ながらも素早く回避。

ちなみに、当然のことながら、弾幕が放たれる度にこの屋敷はどんどん荒んでいく。

それに、誰も俺達の闘いには参加しようとはしない。

しかし、不思議だ。

雲雀は、この少女にどうやってこてんぱんにたたきのめされたの  
だろうか

雲雀と言えど、ボンゴレ雲の守護者、戦闘センスはぴかー。

たかがこれ位の攻撃であそこまでボロボロになる訳が無い。

回想が終わると共に、弾幕群を全て避けきると、息を休める暇無  
く、少女との肉弾戦。

「ほら、ボンゴレ

さつきより動きが鈍っているよ?」

「っー!.....」

少女の言葉と可愛らしい笑みと同時に右肩に一本の線が走り、鮮  
血が飛び散る。

俺は激痛により、声を上げたいのを抑え戦闘を続ける。きつとこ  
こで声を上げると隙ができてしまい、勝負に負けてしまう気がした  
から。

といつても、俺の体力は限界を迎えようとしている。

そもそも、去年の入学式以降、鈍りきっているこの身体で、少女  
に挑もうという事自体が無謀なのだ。

妖怪の場合はさほど強くなく、楽であったが、妖怪とこの少女と

では力の差が違い過ぎ。この、覚醒しているとは言い難い状況で勝とうなど無理もいいところなのだ。

「さっきも言っただけど、闘いの最中に考え事は命取りだよ？」

ヒュン！

「ぐあっ！！！」

幼女は、俺に急接近すると身の丈と長さが合わないその剣で大きく薙ぎ払う。

「沢田さん！！！」

東風谷の絶叫と同時に俺は屋敷の地面に激突。薙ぎ払われる瞬間にグローブを噴射し回避しようとしたが、失敗。

だが、直撃を免れたのがせめてもの、不幸中の幸いであった。

「もう

真面目にやって貰わないと困るよ。これは闘いあまり弱いとすぐ壊しちゃいそうになっちゃうからさ」

地面に激突した俺をさげすむ様な目をして俺に喋る。

見ると幼女は既に剣からスペルカードに持ち替えており、これで決める気である。

「……………なら、俺もスペルカードで応戦する」

俺は、ズボンのポケットから一枚のカードを取り出す。大空の炎

と同じ、薄く橙色がかかっているそのカードを

「禁忌 スターボウブレイク！」

そして、幼女の四枚めのカードが発動。

虹色に光る弾幕が広範囲に構成され、そのまま流星の如く向かってくる。

「ナッツ！」

「ガウツ！」

俺は再びナッツを開匣。

マンテッロ・ディ・ボンゴレ・ニグロ・ネー・フォルマ

I世のマントに形態変化し、カードと逆の手でマントを持ち、その弾幕から身を守る。

…………… ナッツ、この量の弾幕はキツイかも知れないが、耐えてくれ。

ナッツならできるはずだ。

「グウツ……………」

すると幼女の怒涛の攻撃が終わり、ナッツは少しボロボロになりながらも、耐えてくれる。

「サンキュー、ナッツ

もう、終わらせる」

俺は、ナッツに感謝し、リングに戻すと左手を少女とは逆方向に向け、炎を逆噴射する。

俺のスペルカードは、少女みたくすぐに発動できる代物では無く、撃つ時の衝撃に耐えられるよう。支えを作らなければいけない。

「ツナメ

ついにスペルカードを使おうとしてやがるな

上手く狙えよ」

すると、リボーンが微かに呟く。

「お兄さん、スペルカードを使おうとしてるの？でもそうは、いけないよ！」

少女は、リボーンのことばを聞き、剣を持ち俺へ突撃。

普通ななら、余計な事と怒るが。今の状況でのリボーンのことばは、有り難い。

「行くぞ、俺のスペルカード

‘対炎 X B u r n e r , ! ! ’

「！？」

掛け声と同時に右手に構えていたグローブから、炎が少女に向け

て噴射。

わざわざ、左手で炎を逆に噴射していたのは右手の噴射の支えを作る為、地面で撃つというのも、当然足場が良い場所で撃ちたかったから。

つまり、横の薙ぎ払い攻撃はわざと喰らった。

……………それに、こちらへ突撃してくれたおかげで、狙いを付ける手間も省けた。

「うつ……………」

幼女は‘対炎 X B u r n e r’を剣で防いでいるが、それがいつまでもつかは時間の問題。

バギッ！

「うああああ！」

最終的に、B u r n e rに飲み込まれ、ボロボロになって時間に落下。

「どうだ？

俺のスペルカードは、溜めた炎はかなりの量だ、立ち上がることも難しいはずだ」

俺は落ちた幼女に近づき、言葉をかける

「……………確かに、ボンゴレのお兄さんのスペルカード、威力は圧倒的だったよ

……生で喰らっていたら、私でも、危なかつたくらいだし」

「!？」」

俺は幼女の言葉に違和感を覚える。

幼女は何を言っている、俺は確かにX Burnerを当てたはず、生とはどういう事だ？

俺が疑問に思っていると、背後から東風谷の叫び声が聞こえる。

「沢田さん！後ろです!!」

標的13 、『対炎 X B u r n e r ’ 』（後書き）

・・・・・・・・ものすごい駄文を書いた気がするのは、僕だけ。

ぶつちやけ、結構急ぎました。

内容がないがしろにならぬようにしたのですが・・・

次の話は、きっと大丈夫です、何が大丈夫かと言うと、クオリティや文法的にも。

なんせ、後半の方を最初に書きましたからね。

長話もこれくらいで、次回もよろしくお願いします。



標的14 く蛙の子は蛙く（前書き）

V S フラン編の一番の見どころです、今回は投稿日が一日遅れた代わりに、上手く仕上げました。

依然、今週でV S フラン編は終了では！

標的14 く蛙の子は蛙く

「沢田さん！後ろです！！」

俺は、東風谷の叫びに応じ意味がわからないまま、とっさにその場でしゃがみ込む。

「ッ！」

しゃがんだ俺の頭上を通ったものに、俺は不意をつかれた。通ったのは剣。

それも、幼女が持っていたあの赤い剣。

「まだまだ」

まだ幼女の攻撃は止まらない。

俺の前に、ボロボロになっている幼女とは違う、別の幼女が俺の頭上から接近。

俺はそれを、激突間一髪の差で身体を転がし回避。

すぐに受け身をとって、その二人の幼女に向かい、身構える。

「惜しかったね、ボンゴレのお兄さん」

まだ言っていなかったけど実は私、四人に分身できるの」「

「……………なっ」

「『『『こんな風に!!』』』」

目の前にボロボロになった少女を含め、現れた四人の少女に俺は驚愕する。

その光景は、まさに四人の悪魔による地獄絵図

一人、一人が俺の事を笑っていてそれは少し……いや、かなり不気味だ。

でも、こいつらは幻覚か？

ミキサーの如く、頭の中の色々な考えがグルグルと混ざり合い、俺は混乱する。

……俺を見て不敵に笑う四人の悪魔。

……そして、何より痛かったのは、対炎 X B u r n e r  
, を外した事。

一応、当てはしたが、少女いわく、それは分身。

本体に当てなければ、何のダメージも無いらしい、つまり俺の、  
対炎 X B u r n e r , は空撃ち。

結果的に戦況は変わらない、いやむしろ悪くなったくらいだ。

『『『んじゃ、行くよボンゴレ

禁忌 フォーオブアカインド 』』』

ザンッ!!

四人の少女は一斉に地面を蹴り、俺へ猛襲。

俺は、グローブを使い上へ飛びその猛襲を回避。

「「「えいつ！」「」」

そして、悪魔達による、弾幕四重奏。

グローブの推進力で幼女達の周りをグルグル周り、その四重奏を回避。

……………これだけの弾幕、見ている東風谷達は大丈夫であろうか、それにこの戦況をどうやってひっくり返すか……………

「ツナ、ボケツとするな  
後ろだ！」

リボーン言葉により我を取り戻し、背後をみるなり、現れたのは分身の一人と思われる幼女であった。

幼女は、笑いを浮かべると俺の背中にひと蹴り。

「があっ」

背中に亀裂が入りそうな程の強烈の一撃を喰らい、俺は声を上げる。そう、あの弾幕は四重奏なんかでは無く、三重奏だったのだ、残りの一人で確実にダメージを与える為の罠。

「まだだよ」

すると、目の前から二人目の幼女が現れ、俺へタックル。

「ぐっあ……………」

地面にたたき付けられ、地面の埃と土の匂いが全身を激しい痛み

と共に駆け巡る。

「まだだ………  
まだやれる」

俺は身体に鞭を入れ、地面から立ち上がる。

だが………

「遅いよ？」

待っていたのは何人目かは知らないが、幼女の蹴り。

幼女の蹴りは顔面に命中し、受け身が取れず、そんな俺に容赦ない暴力、弾幕の四重奏。

「アハハハはっ！」

屋敷に響くのは、幼女の笑い声、それだけであつた。

「ハア………ハア………ハア………」

屋敷に築かれた瓦礫山の中。

俺は何とか、あの攻撃に耐えたものの幼女の弾幕による容赦ない攻撃に、視界が掠れ、朦朧とする意識の中で、やっとの事で仰向け

に倒れている状態だ。

「よく耐えたねって、いいんだけど、その様子じゃ、もう満身創痍だね

ボンゴレのお兄さん

やっぱりお姉様を倒したというのは嘘だったのかな？」

少女は相変わらず、舐めた目と口調をしている。

……………完璧に負けた。

俺は瓦礫の中、朦朧とする意識の中、ふと思う。

やはり、X B u r n e r を外したのは痛かった、でもそれ以前に力の差が歴然だった。

相手は幻想郷の吸血鬼。

何年、生きていたかは知らないがきつと、未来に飛ばされた俺より、ずっとはるかに経験が豊富。

結局のところ、俺は少女に、遊びと闘いの違いを教えると明言したが、逆に少女に教えられてしまった。

……………闘いを舐めていたのは、俺の方であつたのだ。

ろくに三年前の状態の身体で闘い抜けると思い込み、気持ちだけ空回りして、そんな甘ったるい覚悟で勝てるはずなどあるはずも無かったのだ。

全身に走る痛み、今更ながら後悔の念が湧く。

ああ、……………俺はやっぱダメツナだ。

高校生になり、多少はダメツナも改善していると思ったけど、結局何も変わってはいなかった。

毎日、リボーンと勉強の特訓はした。

……………でも、心は同じだった。

ああ、全身が痛い。

……………この感覚は、死ぬ気が解けた時と同じ感覚だ。

案の定、両手を見るとグローブがミント状の手袋の姿に戻っている。

きっと俺は幼女から攻撃を受けすぎ、白蘭の時と同じで闘える精神状態じゃ無くなってしまっているのだ。

もう、いいだろう。

結局のところ京子ちゃんに何も言え無かったが、それも仕方がないか……………

……………

……………

……………

……………

……………その時だった。

「随分とボロボロだな  
デーデモ  
ボンゴレX世」

「!？」

俺の右手のボンゴリングが突然発光し男の人の穏やかな声が聞こえたのは。

それに、場所は瓦礫の中では無く、黒い空間の中、ぽつんと膝を地面につけて座っている。

また、俺の目の前に居るのは……………

「ボンゴレ……………<sup>ブリーモ</sup> I世？」

……………そう、俺の目の前に居るのは、黒い無地のマントに、全身縦の線が入ったスーツ、金髪のその髪の脳天と、両手のグローブから、死ぬ気の炎を出している男は、ボンゴレの創始者で俺の先祖。歴代ボンゴレ、最強の男と言われたボンゴレI世だった。

I世は俺の視線に気がつく、俺に微笑み返してくれる。

……………話を元に戻すが。

きつとここは幻想郷に来た時に見た、あのボンゴレの夢というの中。

……………でも、俺はどうしてここへ？

「X世

その傷の度合いからすると、お前、紅魔館の吸血鬼の幼女と、勝ち目がないと知りながらも、闘っているんだろ？

随分とまた相変わらず、無茶無謀な事をしているな」



「……………え？」

俺はI世の言葉に、目を丸くする。

吸血鬼……………なんで、I世が俺が闘っている相手の事を？

「ははっ、よくわかったな、という顔をしてるなX世  
そりゃ当然だ、だってお前は俺と似ているんだから

幻想郷の里で暴れていた、妖怪を退治したと思ったら屋敷に連れ  
て来られ、訳がわからないまま、吸血鬼との死闘、  
そして、その闘いにより絶体絶命

俺が闘った吸血鬼はX世よりプライドが高貴で気高く、ボンゴレ  
の雲の守護者全にしたい程だったが  
全く、蛙の子は蛙とは昔の人もよく言ったものだ」

「……………はあ」

いきなり、饒舌になり喋り始めるI世。

彼の言っている事はあまり理解できないがその顔はどこか、懐か  
しげだ。

「……………おっと、すまない

今日はこんな昔話をしに来たのでは無かったな、ついっつかり話  
がそれてしまった」

I世は俺の視線に気づいたのか、ゴホンと咳ばらいをして、俺に  
語る。

「なあ、X世  
単刀直入に聞くが、お前は本当のところ、何故あの吸血鬼と闘っているんだ？」

「……………はあ？」

「……………別に、無いならそれでいい  
それは、X世自身の問題で俺の出る幕は無いからな  
……………でも、ボンゴレの座を継いだお前なら、決して無益な闘いはしないはずだ

それを踏まえ、俺はその闘いの理由を聞きたい」

「……………」

俺は、I世の言葉に身体が動かなくなってしまう。

闘いの理由。それを聞かれると、あの、少女に闘いと遊びの違いを教えるから、と答えたくなかったが、それこそ、俺の思い込んでいた幻想だと思い、口には出さ……………いや出せなかった。

「……………」

「……………」

二人の間に空白の時間が訪れ、俺達を包んでいく。  
別に答えを模索している訳ではない。

その理由をどうやって口で伝えようかと、迷っているのだ。

「…………ふふっ、あははははは」

「？」

Ⅰ世が俺を見て何を思ったのか愉快そうに笑う。

「何がおかしいのです？」

「……………ははははっ

いや、やっぱりなと思ってな

やはりお前は、どこまでも俺に似ているボンゴレⅩ世

お前の闘いの理由はわからないが、そこまで大それた事では無いはずだ

例えば、早く闘いを終えて家に帰りたい、誰かと一緒に何かを食べに行きたいとか、周りの人から見たら、馬鹿げていること、当たり前前の事

それに、俺とお前は闘う意義を見出し、命を懸けて、ここまできた

そうだろう、Ⅹ世？」

「……………」

Ⅰ世の言葉を聞いたその瞬間、俺は水に打たれた様に、目が覚めた。

……………そうだ、俺は闘いの理由を教えるだなんて、大それた事なんて考えてもいなかったんだ。

それはただのカッコつけで、表面的な理由。  
俺の闘う理由なんて、もう決まっている。

「……………その表情

何かを掴んだ見たいだなX世」

「うん

あなたのおかげで、色々とはつきりしました  
もうこれで、大丈夫です」

俺は立ち上がり、I世へお礼を言う。

改めて、またこの人の偉大さを知った気がする。

「……………そうか、なら紅魔館の吸血鬼とまた闘って来い

別に玉碎覚悟で死に行けとは言っていない  
お前は既に、俺が到達した‘零地点突破’を極めているんだ  
なら……………きつと勝てる、なんせ俺が勝てたのだから

じゃあな、X世今度はお前が一矢報いる番だ」

I世はポンつと俺の右肩に手を置くと、幽霊みたくフワツとあの  
黒い空間と共に消えてしまう。

そして、今は再びボロボロの身体で瓦礫の中。

しかし、この状況とは対極に、俺の気持ちは軽く、まるで傷つい  
た所が癒えた様に清々しい。

あの状況下、俺はI世に会えて本当に幸運だと思う。

「……………なあ、吸血鬼……………」

俺は、その場の瓦礫を退け、しゃがみ込んだまま、目の前の幼女に向かって言葉を続ける。

「ん？」

どうしたのボンゴレのお兄さん？」

「……………お前は、俺の事を満身創痍と言ったな」

「それがどうしたの？」

「ふざけるな

俺は、お前とのたかが遊びで命を落とす事なんて、阿呆な事は、できないんだ」

「ふう〜ん、それで

じゃあ、もし、命を落としたらボンゴレのお兄さんはどうする？  
幽霊にでもなって私を呪いに来る？」

幼女はニヤツと笑い、俺を挑発する。

「呪いに行く？」

いいや、そんな事は無いさ

もし万が一、俺が命を落とす様な事があれば……………

その時こそ

死んでも、死に切れねえ！！」

この言葉を放つと同時に、俺の脳天とグローブに再び火が燈る。

俺はこいつに勝って、東風谷達と一緒に団子を食べる！！

この瞬間。

俺に闘い理由、いや初めてこの少女と闘う、覚悟が誕生した。

#### 標的14 く蛙の子は蛙く（後書き）

・・・はあテストが色々な意味で終了し、やりたい放題のcoco aです。

これから、そこそこ調子に乗って、いろんな事に挑戦していきたいです。

新連載とか。

って事でまた明日、会えたら、

でわでわ！

## 標的15 く形勢逆転く（前書き）

・・・やばい、です。

なんか今週で終わらなそうな雰囲気出してます、結構ギリギリですね。

残りの原稿も切れてきそうなので・・・

でも、これ以上文のクオリティも下げる訳もいかないので・・・まあ、善処します。



## 標的15 く形勢逆転く

「ふふっ、何を言うかと思えば

残念だけどボンゴレ

あなたは既にダメージを負い過ぎている  
幾ら頑張っても私には勝てないよ？」

「さあ、それはどうかな

試して見るか、俺がお前に負けるか勝つか？」

俺は人差し指をヒョイヒョイと動かし幼女に向かって挑発する。

「じゃあやってみなよ

お兄さんの本当の実力で私にどこまでついていけるか」

「ああ、やってやるさ」

「!？」

ザッ！

俺は、グローブの推進力を使い、最初と同じく少女の背後に回り込んで、背中にチョップ。

幼女は、俺の動きが余りにも早過ぎた為、防御が出来ず。俺は彼女の背中を完璧に捉える。

「くっ……………」

少女は攻撃の衝撃に耐えられず、そのまま吹っ飛ぶ。

勢いそのままに、俺はグローブから炎を逆噴射させ、吹っ飛ばした少女に追いついて、追撃の一手。

ガシンッ！！

しかし今度は、空中で体勢を戻した少女の剣に阻まれ、戦闘はそのまま、空中戦に。

空中での、剣と拳での激しい応酬。

俺は、最後の力を振り絞り、激闘を続ける。

…………… やっぱりな、俺の目的は少女に闘いの怖さを教えるはずだったが、ボンゴレの夢がきっかけで、いつの間にか目的が東風谷達と団子を食べる為にすり替わっている。

でも、何故だろう。

こっちの方がイメージしやすいからか、さっきより死ぬ気の炎の純度…………… 覚悟がより一層強くなっている。

こういう事が起こってしまうと、俺って高校生になっても、やっぱりダメツナのままなんだってつくづく、痛感させられる。

「闘いの途中にまた、考え事？」

少女の赤い牙は、俺の顔面の数ミリ程離れた場所を斬る。

瓦礫が、色々な場所に散らばっている屋敷の一室で、俺の拳が外れると幼女の剣撃、幼女の剣撃が外れると俺のパンチが……………と剣と拳が交錯し、息が詰まる闘い。

……………また、さっきのダメツナの話に戻るが

俺は逆に、高校生……………いや、今この瞬間まで、ダメツナで居てよかったと思う。

だって、そっちの方が、今回みたいにみんなで人里の団子を笑い、話し合いながら食べるという

ほんの小さな、普通の人から見たら、馬鹿げてさえ映る事に……………

……………こんなにも、一生懸命になる事ができるから。

「さすが、ボンゴレの人

私の動きについてこれるなんて、人間にしては上出来

その底力……………あなどれないね」

「……………さあな、俺はそんな事は知らない

それと、ボンゴレのという呼び方、いい加減に止めてくれ

俺には、沢田綱吉という名前がある」

俺は剣の斬撃を右手のグローブの甲で防ぎながら、幼女の問いに答えてやると、フリーの状態の左拳を一回、幼女の腹辺りチョップ。軽く、幼女の動きが鈍ったところを駄目押しというで、かなりの死ぬ気の炎を込めた拳で手刀を作り、横に大きく薙ぎ払う。

「そう、なら沢田さんもお前って呼ぶの止めて」

しかしフランドールは、それを身体を外に大きく反らして回避。

「私にもちゃんと、フランドール・スカーレットって、名前があるから」

そして、フランドールは身体を反らした衝撃を利用し、空中で一回転。

「さようなら、沢田綱吉」

勢いそのままに、フランドールのその赤い刃が、俺の脳天にめがけ牙を剥く。

い。  
今までの俺なら慌てるかも知れないが、今の俺はそんな事はしない。

..... フランドール。

それに、俺は逆にこの時をずっと、ずっと待っていたんだ！

.....

.....

ガギンッ！

金属を叩く様な、鈍い音。

目の前には、俺との闘いで初めて驚愕の色に染まるフランドール。

「その慢心が裏目に出たな」

「……………」

俺がやったのは勝った気満々のフランドールの赤い牙を、右手の手の平と左手の手の甲で四角刑をつくり、白羽取り。

「うつ、うそ……………私の剣が……………とめられるなんて、この一撃には有りったけの力を……………」

フランドールは、俺に剣を白羽取りされるのに動揺したのか、顔色が一気に変わる。だろうな、フランドールみたく、これだけ余裕をかましていると、もしもの時の対応に戸惑い……………いや焦ってしまう。

それに、自分の渾身の牙が、まさか俺のグローブで防がれるだなんて、夢にも思わなかったのだろう。

まあ、俺も、成功するか微妙だったが、上手くできたな。

俺は一度、幻術で太刀筋が幾田にも分裂する剣を（イカサマながらも）止めた事があるんだ。

攻撃する場所を一点に絞られた剣なんて、そんなの赤子の手を捻るくらい簡単なんだ。

「それに、驚くのはまだ早い」

「!？」

キョアアア！

すると、俺の脳天から出る炎がノッキングする様な不規則な炎に変化し、フランドールの剣を白羽取りをした俺のグローブの、手の甲にあるボンゴレリングの紋章が次第に『X』へと変わってくる。

当然と言えば当然だが、俺はただフランドールの剣を止める為だけに白羽取りをした訳では無い。

俺は、剣が脳天に向かってくる時、未来で経験した、フランドールと同じく剣を白羽取りした幻術を使う剣士との戦闘を思い出したからこそ、俺は、白刃取りの形一つを見てても、あえて手の形を右手の手の平と左手の手の甲を相手に向け、四角刑をつくる独特の形にしたんだ。

相手の死ぬ気の炎を吸収し、自分の炎に変換する技。

I世の言葉で思いついた、死ぬ気の零地点突破に総称される技の内の一つ、‘零地点突破 改 白刃取り’をするために。

…………でも、この技を成功させるには満たさなければならなかった条件があった。

それは、幼女に剣を斜めでも横からでも無く縦に、それも彼女に気づかれるようにやる必要があったのだ。

だから、俺はあの時、彼女に剣筋を白刃取りができる様な形に誘導したのだ。

こいつと会話した後、俺はわざと身体を大きく使って隙を作り、それを彼女が捉えてくれたのだ。

フランドールなら決して見逃さない、俺にとっては致命傷となる小さな隙を！

「行くぞ、フランドール。

受けて見る、これが俺の本当の力

零点突破……………改だ！！」

ギョオアア！

そしてついに、右手と左手の間にできた空間が、フランドールの死ぬ気の炎を、剣を伝って吸収する。

さあ、フランドール。

お前は見た所吸血鬼、悪く言えば大量の死ぬ気の炎の源、生命エネルギーを持った化物。

この「零点突破 改」からどう足掻く？

「うつ……………くつ……………！」

フランドールは、炎を吸い込まれる事を不快と思ったのか、必死に剣をグローブから逃れさせようと動かす。

だが、絶対に逃げさせるものか。

「くっ……………うっ……………あっ……………あ！」

零地点突破改が始まって、約30秒後。

彼女はようやく、俺の零地点突破改から逃れる。

「ずっ、ずるいね沢田綱吉

人の力を……………吸い取って……………自分の物に……………するだなんて」

フランドールは、剣を構えると、ところどころ息つきをしながら喋る。

俺に死ぬ気の炎を吸われ疲れているのだろう。

俺も、身体に収まるギリギリのところで吸ったはずだ。

やっとこれで……………お前と対等、いやそれ以上に闘える。

「黙らないで……………なんかいったらどう、沢田綱吉？」

「……………さあな、お前は俺の『零地点突破 改』をイカサマと言ったが、俺はそうは思わない」

俺は両手に燈す、炎の量を多くする。

その量は通常の約二倍。

しかし、ボンゴリングは前代未聞な炎圧の死ぬ気の炎にも耐えてくれる。



「だって、俺は四人に分裂するお前の方がずるいと思うからだ！」

「……………くっ」

グローブと剣がまた、再び交差しそれらが、空中で今一度乱舞。

しかしフランドールは俺の攻撃を防ぐのが、精一杯らしく先程みたく悪魔四人の地獄絵図を展開しようとはしない。

それなら、いける。

「……………遅い」

「!？」

俺はフランドールの剣撃を回避し、一気にこいつの懐に潜り込み、右手で強力なるアップー。

「……………くっ」

フランドールは、そのまま天井にのめり込もうとするが、神懸かった運動神経で、天井で受け身を取り、そのまま天井を蹴って、勢いをつけて俺に仕返しの一撃を仕掛けようとする。

まずい

このまま避け無いとなると、いくら炎を回復したとしても、フランドールのハンパない攻撃力によって粉碎させられそうだ、それに例え避けたとしても、どうせ次の一手が来る。

「ナッツ、カンピオフォルマモード・アタック形態変化攻撃モード」

俺は今一度ナッツを開匣させ、彼女の屈強なる一撃に対抗する為、ナッツを左手に乗せ、形態変化させる。

「攻撃モード？」

沢田さんのライオンちゃんのはあのマント以外にも変化するのですか？」

フランドールの迎撃に備える中、ふと、東風谷とリボーンの話し声が俺の耳に入る。

「そうだぞ、東風谷

詳しい事はまた今度説明するが、ツナの匣兵器ナッツは、初代ボンゴレファミリーのボス、ボンゴレ一世が使った武器に形態変化できる様になっているんだ」

「初代ボンゴレボスが使った武器に………カンピオフォルマ形態変化ですか？」

「ああ、こっちも後で説明するが

ツナの相棒、ナッツは最初の方で使った、モードディフェーザ防衛モードの一二世のマント（マンテッロ ディ ボンゴレプリーモ）モードだけで無く、攻撃モードの一二世のガントレット（ミナーテ ディ ボンゴレプリーモ）の二つの別々の武器になる事ができるんだ

そして、その攻撃モード、一二世のガントレット（ミナーテ ディ ボンゴレプリーモ）は普通のガントレットでは無く、その昔、初代ボンゴレボスが拳に全身全霊の死ぬ気の炎を込め、究極の一撃を放った時に変化したグローブの形状の事

「では、あの拳は沢田さんの唯一のスペルカード、対炎 X B u r n e r」と同等の威力を持つ、沢田さんの究極の一撃を秘めた拳  
って事ですか？」

「まあ、そんなところだ」

ガキンッ！

リボーンの解説の区切りがつくと同時に、フランドールの剣と俺  
の―I世のガントレット（ミナーテ デイ ボンゴレプリーモ）が  
激突。

「はあああっ！！」

それらが凄まじい勢いで激突。

俺もフランドールに負けぬよう、腹の底から大声を出し、ガント  
レットに多大な力を込める。

「ああああっ！！」

そのままお互いの意地と本気がぶつかったままの硬直状態。

俺達の周りの地面や天井は、二つの武器の激突に耐えられず、少  
なからず落下。

崩れた天井から伺えるのは地平線に沈みかけた、真っ赤な夕日。  
どうやら、こいつと闘っている内にかれこれ3時間もたっ  
たらしい。

ギイイイイー！！

.....バギッン！

「「？！」」

金属が割れる鈍い音.....音から予測すると、どちらかの武器が破壊される。

「きゃっ！？」

.....しかし、どちらかの武器が壊れたのかは、すぐに判った、甲高い悲鳴が屋敷に響き、激突の末破れたフランドールが地面に物凄い勢いで落下する。

「.....ぐっ.....」

なんで、ありえない

私が人間なんか.....力で負けるなんて.....  
ありえない」

すると、フランドールは一エ世のガントレット（ミナーテ デイ ボンゴレプリーモ）に破れ、身体のいたる所に傷を負いつつ、ブツブツと独り言を言いながらも、ゆっくりとした動作で立ち上がる。

よく立ち上がったと言いたいとこだが、彼女の表情に今までの余裕は無く、服はボロボロ。

この闘いの意識を、フランドールは遊びから死闘にへと、やっと切り替えたのだろう。

「でも、もう遊びは終わりだよ……………」  
私も本気を出すからね……………」

フランドールはガクガクとその短い足を奮わせて答える。

きっと、フランドールの言ってる事はハッキリだ。

だって、こいつにはもう、俺の‘零地点突破 改’により、死ぬ  
気の炎を大量に吸収したし、逆に俺は死ぬ気の炎を全快させた。

どうやろつが、俺に勝てるなんて……………無理だ。

## 標的15 〈形勢逆転〉（後書き）

・・・いやゝテストが終わり、その答案が帰ってきて一難去つてまた一難：

やめて、僕のlifeはもう零よ！

・・・あと、どうしても小説の書き方がぴんときません。

アドバイスよろしくです、でわでわ

標的16 〈死闘の幕引き〉（前書き）

…ああ、なにもかも燃え尽きた。

返された答案で鬱になり現実逃避をしてたら、投稿日がへんな事になりました…

それでは…

## 標的16　く死闘の幕引きく

十

十

十

形勢逆転。

……………今、この状況を表わすのに、最も適している言葉。

……………それは、もう圧巻のひと言でしか無く、そこに居る（リボーンさん、雲雀という人を除く）全ての人間が沢田さんの底力に圧倒されていた。

ー死んでも死にきれねえ！ー

……………沢田さんが放った、言葉。

私は雷に打たれた様に、この言葉にジンとさせられる。

その言葉を放った後、沢田さんはあの幼女の剣を白刃取りをして、  
“零地点突破改”という技を決め、リボーンさん曰くI世のガント  
レットレ・フリーモによる究極の一撃で、戦局を一気にひっくり返した。

……………リボーンさんは、これで当然という顔をしているが、  
私にはさっぱりと理解ができなかった。

一体沢田さんをあそこまで駆り立てる理由は一体何なのだろう。  
そして、人里の時にも感じたけど幻想郷に来るまでは果たしてどんな生活をしていたのだろう。

いつも眉間にシワを寄せ、祈る様に拳を振るう、沢田綱吉さんに対する私の興味と疑問は更に膨れ上がった。



この闘いが終わったら、沢田さん達と、それこそ団子でも頼張りながらゆつくりと沢田さん達の事、そして私達のことについての話を、していきたい……と強く思った。

十 十 十

「禁弾　そしてだれもいなくなるのか」

フランドールとの激闘。

俺、沢田綱吉の心の中ではもう終盤戦をしているつもりだ。

……だが、その終盤戦が、俺にとって一番の正念場だと思う。

向かってくるのは、密度が濃い弾幕。

その弾幕は今までの比では無く、‘カゴメカゴメ’の様に、四方からやってくるタイプのもの。

零地点突破改で流れは一気に傾いていたが……俺は一つ、大事な事を忘れていた。

零地点突破改は、死ぬ気の炎が回復できても、精神力は回復できないという事

つまり、力が回復しても、密度の濃い弾幕に集中できる程の集中力は無い事

それに、いくら弾幕を避けてもフランドールの姿を超直感でさえも感じれず、再び弾幕を避けるだけの、一方的な猛襲。

「……………っぐ」

「どう？これが私の本気。」

それと私の姿が見えなくて、まともに反撃できないまま、散って

いく気分は？」

姿を消したフランドールの声が怖い程、響いて聞こえる

「ボンゴレ、あなたの敗因はただ一つ

私を本気に、つまり遊びから闘いにへと意識を切り替えさせた事  
いくらか形勢が逆転しようと、結局は私の勝ち

残念、詰めが甘かったのはそっちの方だよボンゴレ！」

「………… フランドール、言った筈だ、俺の名前は沢田綱吉  
ボンゴレなんて名前じゃない」

しかし俺は決して、その響く悪魔の声や弾幕達に恐れなかった  
俺には闘うべき覚悟があるし、ボンゴレ一世から貰った助言もある。

第一、

「俺の覚悟はこんなものじゃない」

弾幕達の第一波を回避すると、また密度の濃い周りに俺を囲む  
タイプの弾幕が構成され俺に迫ってくる

俺はまず四方向の弾幕を三方向にする為、グローブから炎を噴射  
し、その推進力を利用し忍者の如く側面の壁に垂直立ち。そして脳  
天から再び、ノッキングする様に大空の炎を噴射する。

「無駄だよ沢田綱吉、その炎が不規則に噴出する、零地点突破、  
という技は見切った

その技は相手の力を吸収する強力な技だけれども、それは前方か  
ら迫るものにしか効果は無く弾幕を四方向から三方向に減らしたと  
しても、それらを一回で吸収するのはとても難しいはず」

「役にたつかどうか、そんなのは関係いない  
俺は俺自信の覚悟と零地点突破を貫く  
……………それだけだ」

フランドールに咥くと同時に、弾幕の第二波が三方向から、俺へと向かって猛襲。

……………あの技を成功させる為、周りの弾幕達の存在に駆られつつも、‘零地点突破’を成功させる為、意識を集中させる。

ナッツを形態変化させⅠ世のマントで弾幕を防ぐ。  
カンピオ・フォルマ      マンテッロ・ディ・ボンコレ・フリーモ

……………リスクを考えず、確実に防御するのなら、やはりナッツの力を借りた方が良くかもしれない

でも、それではきつと意味がない。

これはあくまでも俺の推測だが、フランドールはやっと、闘いと遊びの違いをわかってくれた。

今こそ、フランドールの姿は見えないけど、俺が‘零地点突破・改’を決めた後、明らかに前前の態度が一変していた。

その昔、Ⅰ世も経験したという、お互いが本気を出し意地とプライドを懸け、まるで綱渡りをするかの様な精神を擦り減らす命の駆け引き

ビギッ！！

第二波が大蛇の如く、俺を大きく飲み込む  
「沢田さん！」

本日何回目だろうか俺を呼ぶ東風谷の叫び声……………

「アハハハはっ

やっぱり、零地点突破、じゃ防御できなかったね

自分の力を過信した結果、自らの策に自惚れて壊れるなんて呆気ない！

ふふ……………うふふつ、ボンゴレも壊した事だし、次は小さい赤ん坊とそこの緑の巫女のお姉さんの番

どっちが先に壊れたい？」

「まだだぞ、吸血鬼

お前の考えは、はやとちりだ

ツナはまだ壊れてなんかいないぞ」

リボーンのフランドールに臆する事のない、独特の話し声

「ええっ！？

何を言ってるの赤ん坊、あなた達も見たでしょ、弾幕に飲み込まれるボンゴレを……………」

「残念だがフランドール、俺は見て通り、まだ壊れちゃいない」

「！？」

俺は、まだ壁に垂直立ちした状態で姿が見えない、フランドールの話の出鼻をくじく様に語りかける。

「えっ……………でも、どうして？」

ボンゴレは、あの弾幕に……………！！」

フランドールの言葉はそこで止まる。それと、驚いているのは彼女だけではなかった。俺、リボーン、雲雀を除く全員がその光景に目を奪われていた。

……その光景を言葉で表すと、氷の糸で構成された蜘蛛の巣、俺に三方向から迫る密度の濃い弾幕はその場で凍結し、氷が弾幕から弾幕を伝導し屋敷の壁に到達。蜘蛛の巣の様に張り巡らしている。

「聞いて無い……弾幕が凍るなんて聞いてない！！  
でも……何故？」

ボンゴレの「零地点突破」は炎を吸収するだけの技じゃ無いの！？  
なのに……一体なんで弾幕が凍るの！？」

きつと「零地点突破 改」の状態で既に精神が参っていたのだらう……

フランドールは、唐突に姿を現すと、この自分の弾幕が凍っていることにパニックになる。

「フランドール、お前は何を勘違いしている？  
俺は「零地点突破」の構えは見せたが、一言も「零地点突破 改」をするとは言っていないぞ」

「！？」

俺の言葉にフランドールの目が大きく見開く。

「確かに、ツナの言う通りだ

「零地点突破」を勝手に解釈し、勝った気になっていたのは吸血鬼の方だったな」

「……あの……リボンさん？

さっきから二人で何を納得しているのです、私にはさっぱりと理解が……」

どうやら、理解できてないのはフランドールだけで無いらしく、東風谷の頭にも？マークが浮かんでいる。

「簡単な事だぞ、東風谷

確かにツナは、‘零地点突破’の構えはしたが、‘改’をすることは一言も言っていないんだ

そもそも零地点突破とは、本名を‘死ぬ気の零地点突破’と言い、三つの技の総称なんだ

その三つの内、二つは、ツナが編み出したもので、自らを死ぬ気とは真逆の状態して敵の炎を中和する‘零地点突破’、さつきツナが吸血鬼の剣を白刃取りをした時に使った‘零地点突破 改’

そして今回、ツナが使った……………」

「‘零地点突破 初代エディション’、ボンゴレ<sup>あいつ</sup>一世が編み出した死ぬ気の炎の逆、……………」つまり、冷気で敵を凍らせる技

それに、その冷気は死ぬ気の炎と同じ超圧縮エネルギーだから、溶解する為には死ぬ気の炎で無いといけない

……………」まさか、またこの憎らしい技を見れるとはね」

近くで俺達の闘いを傍観していた、蝙蝠のような羽を生やし、ピンクのドレスを着た少女が、リボーンの零地点突破の解説を妨害し、自己流で続ける。

……………」こいつ、零地点突破 初代エディションを、憎らしいという技と言っていた事から

……………」恐らくその昔、一世と闘った吸血鬼というのはこの少女の事であろう。

「さあ、そろそろこの死闘も終わりにしようか、フランドール……………」

弾幕が凍っている事に驚いているフランドールを尻目に、俺は左手の炎を、再び逆噴射。

……さつき、コンタクトが無いと撃てないと言ったが、そんな事はなかったみたいだ。

未来で何回も撃った技、身体が、三年経った今でも、忘れていなかったみたいだ

「…………行くぞ、フランドール、これが俺の覚悟の炎  
全力でお前に解き放つ」

「そう、なら…………撃てるものなら撃ってみなよ沢田綱吉  
私にはまだスペルカードがある、そんなのまた弾き返してあげるから…………」

フランドールはこの期に及んでも、まだ対抗するらしく、ボロボロの身体で再び、スペルカードを構えるが……

「!？」

…………零地点突破 初代エディション’の弾幕伝導がフランドールにも届き、彼女の両手両足を氷の糸が掬って、掴んでいたスペルカードを下に落とされてしまう。

「…………これで、ツナのスペルカードが完璧に決まるな  
もう相手は既に四肢を氷に捕らえられ何も出来ないからな」

「では、沢田さんはあの吸血鬼の女の子を殺す気なのでしょうが……  
…………」

「いいや、ツナの性格から考えて、そんな事は無い  
まあ、俺達には見えている事しか出来ないからな  
ツナが何をするのか、見てやるうじゃねえか」

リボーンは東風谷に話し終えると同時に、あいつは、お馴染みの帽子を深く被りにやけ笑いのポーズを取る。

……………また、俺の方も準備完了。

右手と左手の炎の出力が安定し、氷に捕われている両手両足を必死に動かし、逃れようとしている悪魔に標準を合わせる。

「……………フランドール、お前の敗因はただ一つ

俺との闘いを完全に舐めきって、遊びから闘いへの意識を切り替える時が遅すぎたこと

……………お前がやったその遊びで、幾つの命を壊したかは知らないが、その壊された奴のその気持ち、存分に心へ刻め

X B u r n e r      スーパーノヴァ・エクスプロージョン  
超新星爆発！！  
L

俺の掛け声と共に、今まで放ったX B u r n e rの中で、最も威力が高い最高出力、スーパーノヴァ・エクスプロージョン‘超新星爆発’をフランドールにお見舞いする。

屋敷中にX B u r n e rの轟音と、悪魔の悲鳴が響き渡り、二つの火柱が龍の如く屋敷をまっすぐに駆け抜ける。

その二体の炎龍は、俺と悪魔による死闘の終了の合図フィナーレを意味していた。



## 標的16 く死闘の幕引きく（後書き）

……どうも、cocoaです。

一応タイトル通り、これでVSフラン編が実質終了になります。  
にしても、一章終わらせるのに、莫大な話数を費やし内容はグダグダ。

よく、こんなもの人さまに公開できるな…と、結構な勢いで後悔しています。

本当は、十月の半ばで終わる予定だったのに……

それでも、読者の皆さまの感想は、心の支えとなっていてそのおかげでまずは第一章を完結させる事ができました！

あと、一話でVSフラン編のその後、そして記念の話を一話いれて三話目から第二章という事になる予定で、僕も結構やる気がみなぎっています。

次の章の話が、どの守護者もしくはどのキャラというのは未定ですが、これからcocoaの書く、小説を暖かい目で見守ってください。

……さて、長々と語りましたが最後にみなさん、最近寒くなっています充分お体に気をつけてください、それとこれからもcocoa、の小説をよろしく願います！

標的17　　雲の守護者のその後の処遇

「……………終わったな」

‘X Burner 超新星爆発’を撃ち終えた俺は、低く呟くと、垂直立ちをしていた壁から下りる

改めて部屋を見ると、無惨な様子で廃墟のような雰囲気となっていて、崩れた天井から入って来る夕陽が、異常に眩しい。

……………夕陽に照らされるまま、サッカーコート並に広くなった部屋を歩くと、ふと視界の中に、見覚えのある黒いマントが落ちているのを見つける

「満足できたか、フランドール？」

見覚えのある黒いマント……………一世のマント（マンテッロ デイ ボンゴレプリーモ）ナッツをマントからリングの姿に戻すと、中から出てきたフランドールに、腰を屈めて視線を合わせて、声をかける

「……………」

しかし、フランドールは俺の問いには答えず、ただ黙って下を向いているだけ。羽もぐったりと降ろしていて、さっきまでの悪魔としての姿を微塵も感じさせない。

「……………こりゃ完敗だね、してやられちゃったよ、沢田綱吉。…

……………へえ、これが、お姉様をも凌いだボンゴレの力

なんか私も、わかった気がする」

今まで黙っていたフランドールが下を向いたまま、ふと口を開く。口調は相変わらず変化ないが、表情が今にも泣きそうな、顔をしている。

「……………ねえ、沢田綱吉」

あなたに一つ、聞いても良い？　なんで、あなたの放った炎のレィザーが、私を飲み込もうとした直前に、なぜあなたは、その黒いマントを私によこして、敵である私を守らせる様な事をしたの？」  
フランドールが不意に顔を上げ、瞳が俺を強く見つめる

……………なるほど、そういう事か。

つまり、フランドールが言いたい事は、X　B　u　r　n　e　r　超新星爆発を放ったその時、なぜ俺が、敵であるフランドールに、ナツツを送り形態変化させ、防衛モードであるI世のマントで、あいつをX　B　u　r　n　e　rから守ろうとしたのか。

要約すると、フランドールは、殺そうとまでした俺に、助けられた事をかなり不思議に思っているのだ。まあ、もし俺がフランドールの立場で、同じ事をされても、きっと驚くが……………

俺に言わせてみればそんなの不思議でもなんでもない。

「お前を助けた？」

……………そんなの答えは簡単さ、俺はフランドールの様に、相手を殺す事を目的として闘っていないからだよ」

少し、和やかに言ったが、フランドールの瞳がまだ、俺を強く見つめる。

「フランドール、俺の目的は、お前に闘い怖さを教える事だ。幾らお前でも、あれだけ体力を削られ、‘X　B　u　r　n　e　r超新星爆発’を叩き込まれたりしたら、一たまりもないし命にも関わるだろう？」

……………それに、お前が怖さを理解したというのなら、俺はそれ以上攻撃したりはしない。

だって、これ以上お前を傷つけて何になるんだ？」

俺はその、答えを求めるフランドールの瞳に、全てを話してやる。誰かを傷つけはするが、俺は誰も殺しはしない。それは俺のポリ

シーであり、ボンゴレのボスを継いでも、決して揺らぐ事のない信念。

「…………ふふつ、さすがね。それでこそボンゴレリング、…………いや、あいつの意志を継ぐ者。

強さもさる事ながら、周りをその寛大な心で包みこんでしまう、まるで、すべてに染まりつつ、すべて包容する大空のように久しぶりに、私も楽しませて貰ったわ」

俺が、フランドールに説明をしていると唐突に横から、フランドールとは別の少女の声がする。

……………見ると、‘零地点突破 初代エディション’を解説していた、ピンクのドレスに水色の髪、蝙蝠の様な翼を生やした少女が立っていた。

フランドールはその少女の登場に驚いたのか、あたふたとし始める。

「フランにボンゴレ、これはまた、随分とやってくれたわね。

存分に楽しんだの良い事だけど……………この後の部屋の片付け、誰がやると思ってるのかしらねえ、二人とも？」

蝙蝠の羽の少女は、俺とらフランドールを交互に見ると、ニヤリと笑う。その笑顔は、何かしら悪巧みをしているかの様な、そんな印象が強く残る。

「さあな、先に言っとくが俺は知らないぞ。

俺は、フランドールの鬨いに巻き込まれた、いわば被害者。何故、俺が片付けなんてしないといけない？」

俺は、このまま行くと部屋の片付けをやらされそうになるので、ニヤリと笑った少女に言葉を返す。

きつと、こいつがフランドールの言うお姉様。

言い方は悪いが、あのフランドールの姉だぞ、さっきの笑いの印象通り、どんな性格をしているかは目に見えてるじゃないか。

「…………ふふつ、残念だけどボンゴレ。そんな言い訳が通用すると思っ  
て？」

「……………」

案の定と言うべきか、俺は蝙蝠の羽の少女の存在感、殺気ともい  
うべきオーラに圧倒されぐくりと唾を飲む。

「もし仮に、あなたが被害者だとしても、あそこにいる雲雀恭弥、  
あれはどうなの？」

あれは、私の許可無しに、好き勝手暴れて、ここまで酷くないけ  
ども、この部屋を荒らしていったわ。

……………そういえばあなた、フランと闘ってた時に、ボンゴレのボ  
スとして闘うって言うってたわね。

部下のやらかした始末をするのも、ボスの仕事じゃなくて？ 沢

田綱吉」

「……………」

俺は少女の言った事に返す言葉が出ない。

……………確かに、俺はボスとして闘うとは言ったが、まさかそれを  
逆手に取られ、こつも追いつめられるとは……………考えてもいなかっ  
た。

「確かに、今の話を聞く限り、雲雀はツナがここに来る前に、一  
足速く暴れてたらしいな」

「……………リボン」

…こんな時に、また俺達の会話に現れたのは、黒いスーツに身を  
包んだ、立派な揉み上げが印象的な赤ん坊、リボンであった。

「でも、その事でツナが責任を負うだなんて、冗談も良いとこだ  
ぞ。

大体、内の雲の守護者は、その雲の名前通り、自由奔放で誰からの束縛をも嫌う奴なんだ。それは、ファミリーの一員になっても変わらずで、雲雀に関しては基本、放任主義なんだ」

リボーンは、ふらつと現れると、俺の肩に乗り、フランドールの姉の気迫に何も臆する事なく喋り始める。

「そう、それなら仕方ないわね、さつさと雲雀やその緑の巫女を連れて帰りなさい……………なんて生易しい事、私が言うのも思った？」

雲雀恭弥が放任主義なら尚更。

やはりあなた達に責任を取って貰わないとね。……………それで嫌というなら、私が力を持ってして、責任を取らせてあげる。さあ、どうする？」

ピンクのドレスの少女は、リボーンの一言で頭に血が昇ったのか、フランドールと同じく、言葉に殺気を込めてリボーンに言葉を返す。

「確かに、そういう事なら喜んでツナが相手になつてやる、と行きたい所だが、生憎こちらもガス欠だな。

……………その代わりとして、雲雀を此处に置いて行く。  
それでどうだ？」

……………その瞬間、俺はリボーンの頭を疑った。さすがに、今の発言の意図は、俺でも理解ができない。

「そうね、それは私にとって願ってもない事だけど。自由奔放で誰よりも束縛を嫌う、当の本人が、そんな事許すのかしら？」

「その通りだよ赤ん坊。……………そんな事、僕が許すとても、思っているのかい？」

やはり、雲雀は今の一言に反応し、ボロボロの身体を引きずって、ここまで来ると、俺らに向かってトンファーを構える。

まあ、実質、俺とフランドールは空気に近いが……

「雲雀、そう慌てるな。お前を此処に置いておくのには、ちゃんと二つの意味があるからなんだ。お前がこの後どうするかは、これを聞いてからでも遅くはない筈だぞ」

リボーンは、雲雀をなだめると言葉を続ける。

「二つの理由のうち、まず一つ目は、お前の身体にある、傷治の治療についての事だ。

この屋敷なら、きっと雲雀の治療をしてくれるだろうし、第一お前だって、そのボロボロの身体で、立っているのもやつの状態なんだろ？」

「……………」

リボーンの言葉に、雲雀は顔をしかめて黙り込む。きっと、凶星であるのだろう。

「それともう一つの理由……ここからが重要なんだ。

もし、お前の身体にある傷が癒えれば、後はお前のやりたい放題だ。

例えば、此処にいる奴らと思う存分、心ゆくまで闘ったりとか……

どうだ、これだけの条件が揃っているんだ。この屋敷に残るのも、そう悪くない話だろ？」

「……………確かに、赤ん坊の言う通りだ。気が変わった、傷が癒えるまで僕は此処にいさせて貰うよ。でも本当に此処にいる奴ら、存分に噛み殺せるんだよね？」

リボーンの二つ目の理由を説明した後、明らかに、雲雀の目の色

が変わる。

何と言つか……リボーンは雲雀の扱いを心得ているんだな。雲雀が戦闘マニアと知っていて、問題児である雲雀を確実に言いくるめた。

「ええ、もちろんよ雲雀恭弥、そこは此処の主である、私が保証するわ。それに私とあなたの決着がまだだったじゃない、あなたの怪我が癒えたら、存分に相手をしてあげるわ。」

そして、リボーンとその計画に面白がってフランドールの姉も加わる。……なんかこの二人、色々と気が合そうだ。性格が二人してまるつきり似ているからか？

「さあ、そうと決まれば後は実行するだけ、咲夜。早く雲雀恭弥を、運んであげて」

フランドールの姉は、慣れた口調で部屋の隅にいた、メイドを呼び出す。

そのメイドは、一回俺らに向かって一礼すると、雲雀を何処かへ連れていく。

「……沢田さん、大丈夫ですか？」

そして、咲夜というメイドとすれ違になると同時に、東風谷が俺に駆け寄って来る。きつと、今の今までタイミングを掴めずにいたのだろう。

何故か、フランドールが、東風谷の事を恨めしそうな視線で見ているが……気のせいだろうか。

「まあ東風谷、お前もツナに色々聞きたい事がありそうだが、今は置いて、俺らもそろそろ家に帰るぞ。空がもう暗くなっているし、諏訪子も腹を空かせているだろうから」

リボーンはそう言っていると、東風谷の肩に乗る。



東風谷は、あつと小さく叫ぶと崩れた天井の隙間へと向かって飛んで、一足早く行ってしまふ。

「待ちなさい、ボンゴレ。最後に一ついいかしら。」

俺もそれに、ついて行こうとして立ち上がった時、不意にフランドールの姉に呼び止められる。

「ねえ沢田綱吉。今度は、あの赤ん坊や巫女を連れて、ここ紅魔館に客として来なさいな。」

精一杯のおもてなしと、私の知っているボンゴレに関する事、全てあなたに話してあげるから」

フランドールの姉は、ニヤツと笑うと俺を誘惑するように右手の指をくいくいつと向ける。

「………… ああわかった、気が向いたら来てやるよ。…………… だけでも、今回の様な、手荒いおもてなしだけは、勘弁してくれ」

俺は冗談をいれて、姉に言葉を返す。フランドールの姉は、ええ、わかったわと鋭く尖った八重歯を見せて、ニヤツとはなく、うつすらと微笑む。

「おいツナ、いつまでそこにいる気だ？ 置いて行くぞ！」

俺がフランドールの姉と、話していると上からリボーンの声がする。あいつも微かに笑っていて、きつとあいつは、このシチュレーションを予想していたのだろう。この策士め…………

「リボーンが呼んでる、そろそろ行かなきゃ。」

…………… じゃあな、フランドール。遊びは程々にしとけよ？」

「…………… うん、わかった。遊びと闘いの区別はなるべくつける様にするよ。だから、また此処に、絶対遊びに来てね！ 沢田綱吉」

俺は、最後にフランドールと会話をすると、吸血鬼姉妹に手を振り屋敷を後にする。

これからの予定は人里を目指し、そこを経由して守屋の神社へと向かう。わざわざ途中で人里に向かうのは、上白沢慧音に無理矢理

預けた、荷物を回収するため。

「……なあ、東風谷。一つ頼みがあるんだが、良いか？」

「ん？ 何ですか沢田さん。頼み事って」

大きな湖に差し掛かって、丁度その上を通り越している時、俺はふと東風谷に声をかける。

「今日じゃなくて良いから、今度東風谷が言ってた……人里にある、美味しい団子屋へと連れて行ってくれないか？　そこでお前に話したい事があるんだ」

言葉を放った瞬間、東風谷の肩のリボンが密かに笑うのが見え、東風谷も東風谷で顔を真っ赤にしてあたふたとしている。全く、俺が何か変な事を言ったか？

………月が綺麗に輝く幻想郷、俺はそんな月を仰ぎふと、こう思う。

元の世界に帰る前に、せめて東風谷だけには、俺達ボングレについて、本当の事話さなければいけないな、と……

標的17 く雲の守護者のその後の処遇（後書き）

……絶賛スランプ中のcocoaです、上手く書けたか解りませんが、少し書き方を変えました、次はもっと早く投稿できるように頑張ります。

でわ……

標的18 　く雨の剣士と半人半霊の少女く（前書き）

すいません、前回投稿した日からまるまる一カ月の日が経ってしまいました。

申し訳ございません。

これからは、そんな事がないよう、頑張っていきたいと思えます。  
では！！

## 標的18 雨の剣士と半人半霊の少女

「はああっ！」

夕焼けに染まる空。葉っぱ一つついてない桜並木の中、俺は声を掛け声と共に時雨金時の柄を強く握りると目の前の少女に向かって、渾身の一突きを放つ。

金属同士がぶつかり、火花と鈍い音をまき散らす。

彼女は俺の一撃を自らの持つ刀で捌き、無駄の無い動きで距離を取る。

「どうしました、山本武。あなたの時雨蒼燕流はこれで終わりですか？」

自分の周りに、フワフワとまっ白い風船みたいな物を浮かせ、全体的に緑色の服を着て、銀髪のショートヘアに黒いリボン、そして刀を構えた少女、魂魄妖夢は俺にこう吐き捨てると刀を握り直し下段に構える。さっきまで優しい表情をしていた彼女は一变し、対照的とも言える、鋭い視線に冷淡な口調。おまけに女の子とは思えないビリビリした殺気まで放っていて、魂白がただ者では無い事を物語っている。

「……………ははっ、今のを捌くとはさすがだな。こ魂魄りや俺も、本気でやんないとな」

「……………余裕そうですね」

俺は、そんな態度を急変させた魂魄に、へへっと笑うと、時雨金時を中段に構える。笑いを見せたものの、自分の心の焦りを捨てられなく、俺も一歩後ろへ下がりが、ごくりと唾を飲む。

〱数時間前〱

「おっ……………これは、時雨金時じゃねえか!!」

……………事の発端は、今から何時間か前。何気なく自分宅じぶんちの物置を整理していた時に、偶然、濃い青の竹刀袋に入った時雨金時を見つけた所までさかのぼる。

「懐かしいな、こんなところに閉まっていたのか」

偶然、時雨金時を見つけた俺は、今までやっていた物置の整理なんてそっちのけで、時雨金時に夢中になった。

なんせ、三年前には時雨金時こいづつと一緒にスクアーロや、幻騎士と闘い抜いた、俺の魂を分けた相棒なんだ。

ツナがボスの、かなりリアルなマフィアごっこの事を……………

「……………ん？」

すると不思議な事に、突然首にぶら下げていたボンゴレリングが、光りを放ち始めたのだ。

リングを詳しく見たくて、首から外し手の平に乗せてみると……………

「!？」

ボンゴレリングが強く光を発したかと思えば、エレベーターに乗っている様な、落ちていく感覚がして一三年前（あの時）と同じ、俺を何処かへいざなってしまったのだ。そして、そのいざなわれた場所というのがここ、白玉楼で、魂白が庭に倒れていた俺を見つけ、屋敷の中まで運んでくれたらしいのだ。

でも、そんな優しい彼女が、まさか時雨蒼燕流の名前と時雨金時を見ただけで、がらっと彼女の性格が変わってしまうなんて……………

「山本武……………あなたが仕掛けないのであれば、私から行きます!」

……………俺の回想は、彼女の一言で掻き消され、彼女の一撃に備える

ため刀を中段に構える。

刀が重なり、再び鈍い音が響く。

魂魄の左足を軸にし全体重をかけた、重い一撃を受け止め、そのまま何回か斬り合う。

……………それにしても魂魄、強いな。

魂魄と刀を何回か合わせる中、俺はふと思う。彼女には、剣術の基本がみっちりと仕込まれており、あらゆる場面に対応できる応用力、適応力もある。正直に言うとそんな剣士と闘うのが一番辛く、ましてやそんなのと闘って勝とうするなんてのは至難の技。

「こりゃ、また厄介な奴と闘う事になったな……………」

魂魄の刀の切っ先が俺の洋服にかする。

意識が再び、魂白との闘いに集中される。

久しぶりに体感する命の駆け引きに、身体が緊張感で包まれる。

魂白はその優れた適応力で俺の太刀筋の癖を分析し、動きが格段と良くなり攻めに転じる。しかし俺はそんな彼女の攻撃を受けるのに精一杯で、どうしても防御重視になってしまう。その結果、俺が防御に転じたのを良い事に、魂魄の攻めに拍車がかかり、俺の負ける確率がグーンとUP。おまけに一度攻撃に転じた彼女から体制を直すのは難しく、負のスパイラルに嵌まってしまふ。俺が一番恐れた最悪の展開となってしまうのだ……………

「その昔、伝説の暗殺剣術と謳われた、時雨蒼燕流も墜ちた物ですね」

落胆の気持ちが混じる、魂白の言葉が、彼女の振るう刃の如く俺の心に冷たく突き刺さる。

「師匠からは、時雨蒼燕流そうげんの剣士と闘う時には、死をも覚悟する勢

いで挑め、と教えられましたが……あなたの弱さに拍子抜けしました」

「ん？ おい魂魄……ちょっと待て！！ お前は何か大きな勘違いを……」

「問答無用！！」

俺は魂魄の言葉に動揺を隠しきれず、反応が遅れた一瞬の隙を突かれ、背後の木に叩きつけられる。

「……………っ！！」

叩きつけられた痛みと闘いながら、俺は目をうつすらと開き、澄んだ顔した魂魄を見る。

魂魄が言った時雨蒼厳流……それは、俺が使う時雨蒼燕流とは似ても似つかない全く違う流派。

昔、親父から聞いた事があるのだが、時雨蒼厳流とは、時雨蒼燕流ができたのと同じ時代に、時雨蒼燕流への強い対抗意識を持った人が独自に作った流派らしい。親父によると、長年その二つの流派は互いにしのぎを削っていたらしく犬猿の仲だったらしいのだが、何代目かの時雨蒼厳流の使い手が弟子に自分の流派を継承させる事無く死んでいった為、時雨蒼厳流はそこで途絶えてしまったんだとか……………。

話を元に戻すが、きっとこいつは時雨蒼厳流と時雨蒼燕流をごっちゃにして、いろいろと勘違いをしているのだろう。

俺はそこまで考えると、その場から立ち上がる。

さっきの衝撃で左側の二の腕をやられたらしく、血で染まっておリズキズキと痛みも襲ってくる。

「……………ったく、お前にも何かしら事情があるのかもしれないが、厳と燕という字を間違えたという、ただそれだけの理由で殺される



のは真つ平ごめんだぜ」

俺は呟く様に喋ると、ボンゴレリングを指に嵌め、バットを構える格好をして刀を構える。

「何ですか？ その構えは……………」

魂魄は俺のした変な構えに、顔をしかめる。

「これは野球でボールを打つ時の構えなんだ。……………生憎俺にはこれしか出来る事が無いんでな」

俺は、中学生の頃に、スクアーロにも言っただ覚えがあるセリフを彼女にも使う。

魂魄、俺の本気は……………これからだ

## 標的18 　　ゝ雨の剣士と半人半霊の少女ゝ（後書き）

突然ですが、誰にだって思い入れのあるキャラクタ　居ますよね。  
ちなみに、僕が東方を知るきっかけとなったのが魂魄妖夢でリボ  
ンを知るきっかけとなったのが、山本武なんです。

つまり、この二人の対戦は僕にとってまさに、夢の対決見たいなも  
ので、正直この先の展開が僕にも想像が…

…まあ兎に角スランプからも抜け出した事だし、改めてcocoa  
の書く小説を、これからもうろしくお願いします！！

## 標的19　奥の手

俺は言葉を言い終わると、右手の中指にある透き通った水色をした石に雨の雫の形が彫られた、ボンゴレリングに意識集中させ、澄んだ水色をした高純度の雨属性の死ぬ気の炎を燈す。

「指輪から炎を燈すとは……………これからどんな手品を見せてくれるのです？　山本武？」

「手品？　残念だが魂魄、これは手品じゃ無いんだ。この炎は死ぬ気の炎といってな、詳しい事は俺も忘れたけど、すんげえ力を秘めた炎なんだ。その力は、お前を倒せる程の……………な」

魂魄は死ぬ気の炎の事を知らないのか、怪訝な顔をして、炎を燈しているボンゴレリングを覗き込む。

……………私を倒す？　冗談にしては笑えないですね。あなただって感じたはずよ、私とあなたの実力差というものを」

実力差か……………仮に俺と魂魄にそんなのがあったとしても、もし俺があの時全力で行っていなかった、と言ったらどうする？　…俺には奥の手があるんだよ。」

俺は、魂魄を挑発させる様に喋る。その会話の間に、俺は時雨金時に雨の炎を纏わせる。俺だってやる時はやる男なんですね。魂魄に一方的にやられたまま、のこのこ引き下ってたまるか。

「そうですね……………なら、あなたには改めて実力差をしらしめ、その減らず口を叩けなくする必要がありますね！！」

完全に挑発に乗った魂魄。彼女は刀を構え再び俺に向かって突撃してくる。

「……………」

俺は向かってくる彼女の存在に焦りを感じつつ、気持ち集中さ

せ、時雨金時を今一度強く握る。そして、彼女が俺に後一步という所まで近づいた時……

「時雨蒼燕流、守式二の型、逆巻く雨!」「なっ!？」

何年かぶりに使った型なのだが、身体が時雨蒼燕流をまだ覚えていてくれたらしく、慣れた手つきで、あらかじめ時雨金時の刀身に纏わせてあった雨属性の死ぬ気の炎を巻き上げ、巻き上げた炎で俺の姿を隠し、体をかがめて彼女の斬撃から回避する。

「時雨蒼燕流、攻式一の型車軸の雨!」

そして間髪を入れず、時雨金時を両手で持ち、魂魄が居るであろう場所に向かい、渾身の力を込めて突く。

刀が何かを捉えた感覚がしたが、巻き上げた雨の炎が邪魔で、何を捉えたのかは見当もつかない。

次第に巻き上げていた雨の炎が収まり、今の状況が見えてくる。

「身を隠してからの、突きによる奇襲攻撃ですか……しかし、これが奥の手というのでは、少々物足りないですね」

時雨金時が捉えたのは彼女の持つ長い刀。刃の切っ先が頬に掠ったのか、彼女の顔に二つの切り傷がついていた。

俺は一旦、体制を立て直す為後ろに大きく退き、間合いを取る。

今までの彼女なら、俺が間合いを取っている間に追撃の一つや二つをお見舞いをしてくるはずなのだが……今の魂魄は追撃をしてこなかった。

いや、それができなかったというのが正しいのかもしれないけど。

「どうやら、俺の奥の手が上手く効いたみたいだな」

「奥の手……!!」

冷静な口調とは裏腹に、刀を持つ腕がガクガクと震え、初めて焦

りの表情を見せる魂魄。

「そつ、俺の奥の手、アタッコ・ディ・スクアール。身体によく響くだろ？ 一応、説明をしとくけど、アタッコ・ディ・スクアール 絞衝撃ってのは、渾身の一撃を衝撃波にして相手の神経を麻痺させる衝撃剣なんだ。

気休めっちゃなんだが、身体が思う様に動かないからってそんなに焦る事はないぜ。

俺だって、スクアールに最初にやられた時はびびったんだからな」  
「……………っ！！」

俺は笑顔を交えて、焦った表情をしている魂魄に話しかける。いまだに腕が、ズキズキと痛むが、今のところ時雨蒼燕流を使うのには何も問題は無い。それどころか、絞衝撃による攻撃で彼女の神経は麻痺している。

絞衝撃が有効な時間は一番長くて5分。それまでに魂魄を打ち負かし、俺の話を聞かせる事ができれば、彼女の時雨蒼燕流と時雨蒼燕流の誤解を解く事が出来るかもしれない。

「行くぜ、魂魄。俺が継承した、完全無欠の時雨蒼燕流を見せてやる！」

俺は腕の痛さを無視して刀を構えると、取った間合いを一気に詰め、魂魄と刀をぶつけ合う。

今回は俺が攻勢に転じた。

それに魂魄に俺の放つ太刀筋を分析させない為に、右、左、上、下、と色々な場所から斬り続ける。

刀と刀がぶつかる音が、今はやけに心地いいし懐かしい。

久しぶりの実戦で、身体が三年前の感覚を思い出しているのだから。

「……………山本武、やはりあなたは未熟です。色々な場所から斬りつければ私に勝てるでも思っているのですか？先に言っておきますけど、そんな事をしても私には絶対に勝てませんよ。私にはどうしても、勝たなければいけない理由がありますから」

同士をぶつける中、彼女は俺の目を見て、はつきりと言った。

やはり……………魂魄は凄い。絞衝撃をともに喰らったというのに、俺の攻撃を平然と受け止め、俺と会話をする時ですら、余裕を現にしている。

昔の人が言った、敵ながらあっぱれというのはまさしくこの事を指すのだろっ。

「だが、今のお前の様子を見る限りじゃ、俺の攻撃を平然と受け止めるのが精一杯って感じだな。

今までのお前なら、冷静に分析して反撃をしてくるのに、今はおとなしく受け止める事しかない。

お前は、俺の絞衝撃を受けたせいで、頭ではわかっている事が、身体が言う事を聞いてくれないからできないんだろ？」

「……………っ！」

俺の予想は凶星だったらしく、魂魄は顔をしかめて舌打ちをする。やはり魂魄は、絞衝撃のおかげで、普段の力を発揮できていない。なら……………倒すチャンスは、なおさら今しかない！

「……………時雨蒼燕流、攻式八の型篠突く雨！」

俺は強く決心し、捨て身の覚悟で彼女の懷に飛び込むと鋭い斬撃で斬り上げる。もちろん、斬り上げると同時に刀の向きを素早く替え、刃の無い方で攻撃する。

しかし、篠突く雨は魂魄を捉えきず、刃が少し、彼女の服をかするだけ。彼女は篠突く雨から逃れると、後ろに大きく飛んで俺から間合いを取る。

「今の斬撃を放った時……何故あなた、刃では無く峰のある方で私を攻撃したんです。あなたは……時雨蒼巖流は…この期に及んでも、まだ私をこけにするというのですか!？」

魂魄は、今までの斬り合いでズタズタになった緑色のドレスの様な服をかなぐり捨てその下に着ていた、ラフな白のワイシャツ姿になる。

「いいや魂魄。俺はお前をこけにしようなんて、これっぽっちも思っていないぜ。」

お前が時雨蒼巖流をどんな感じに解釈しているかは知らないけど、少なくとも俺は人殺しじゃないぜ。俺はただの剣士だ」

「……人殺しじゃないとまで言わせるとは、私はあなたに時雨蒼巖流を継承した者への怒りを通り越して呆れを感じる事しかできませんね」

俺は時雨蒼巖流の使い手なのだが、親父を侮辱されたのかと思うと、何故か齒痒くなる。

「なあ魂魄。俺はこの闘いが始まった時から疑問に思っていたんだが、どうしてお前はそんなに俺を敵視するんだ？ 俺はただ……」

……

「だまれ!! それ以上善人の仮面を被るな、この偽善者!!」

「偽善者って……」

俺は彼女の気迫に圧倒される。きっと、それだけの理由があるのだろう。

「……………」

「すいません、少し取り乱れました。」

でも……良いですか山本武。

あなたは何も知らない様ですが、私があなたを……いや、時雨蒼巖流を憎むようになったきっかけを作ったのは、そちらの方なん

ですよ。」

魂魄はそこまで言うと、一度目を閉じ、気分を落ち着かせるためか深呼吸をする。辺りはすっかり暗くなり、夜の風が冷たい。それと、幽霊でも現れるのではないかと思えるほどに不気味である。

「あなたが、時雨蒼巖流をした者から、何を吹き込まれたかは知りませんが、この際なのではつきりと言っておきます。

あなたが先代から技と友に教わった知識。それは、自分達の犯した過ちを隠す為に、書き換えられた、真っ赤な嘘です」

「真っ赤な……嘘？」

俺は彼女から放たれるプレッシャーに圧倒され何も言い返す事ができず、ただ彼女の言った言葉をおうむ返しするしかなかった………魂魄を説得するのには、彼女の背景にある、時雨蒼巖流をもつと理解する必要があるのか。

……俺はふと、そう思った。



標的19「奥の手」(後書き)

…投稿が、遅くなりました。  
ごめんなさい。

次は月曜日に会えたらいいなと思っています。      それでは!!

## 標的20ゝ憎しみの理由ゝ

「真っ赤な嘘？」

私、魂魄妖夢はこの期に及んで何も知らないフリをする時雨蒼巖流継承者、山本武に、私は怒りを通り越して呆れてしまった。

やはり時雨蒼巖流の人間は許せない。

自分達の犯した過ちを歴史の闇に葬り去ろうとしているだなんて

.....

「.....いいでしょう。なら、私が本当の事実を教えますが、私が喋っている間にはあなたからの一切の攻撃を禁じます。よろしいですか？」

「.....ああ」

私は山本武から受けた鮫衝撃の効果を薄くさせる、時間稼ぎとしても丁度よいと考え当時の出来事を話す事にした。

「...まず最初に、私は幻想郷では無く、あなたと同じ日本に生まれたのです。

そして魂魄一族は、冥界を司る西行寺の護り刀として、先祖代々仕えていた。

私が生まれた当時は、まだ応仁の乱が始まる前という事もあり、平和な時代でもあった。それに、まだ時雨蒼巖流も生まれていませんでしたし。」

私は山本武がこの隙を狙って奇襲を仕掛けてこないと判断し、構えていた楼観剣を鞘に収める。

夜の風が私の髪と黒いリボンをなびかせる。

「.....そして、私も成長し父上から剣術を習い始めた頃、ついに

応仁の乱が勃発。当然、京の都に住む私達にも戦渦の火が回つて来て、私達半人半霊の魂魄一族をも無惨にも飲み込んだ。

……幽々子様は無事で、奇跡的に私達が住んでいた寺は焼けずに済みましたが、植えてあった桜並木が西行桜のみを残して全滅、我が魂魄一族は私とお爺様以外は死んでしまった。寺も再建する程の財力も無く、幽々子様は行き残った私達だけで、幻想郷へと移転する計画を立てたのです。」

「……………」

これまでの話を真剣な眼差しで聞いている山本武。

身体を動かしてないせいか、肌を感じる風が幾分と冷たい。

これほど寒くなるのだったら、安易に服を脱ぎ捨てなければ良かった。今更思っても仕様が無いが。

「一年の歳月をかけ、桜の苗木を埋め直し、幻想郷に移転する準備がようやく全て整った頃。……………そんな時期に現れたのが、当時日本一の剣聖を称されていた、初代時雨蒼巖流の使い手。そいつは、京の都で最強の剣士である私の爺様と剣の勝負がしたいと言い、何度も何度も私達の寺へ尋ねて来た。

普通の人は、それで諦めて帰るのだが、その時雨蒼巖流の使い手はそうでは無かった。

自分と会おうともしない私の爺様に腹を立てたそいつは、私達が寝静まった頃を見計らうと、百人にも及ぶ門下生を引き連れお爺様を闇討ちに來たのだ！

当然、私もお爺様も刀を取り闘ったけれど、それでも敵う相手では無く…お爺様はそいつから私を守って殉職、お爺様を斬って満足したらしいそいつは、屋敷を散々あらしめた後、門下生を連れて引き揚げていった。

その晩、幽々子様は外出してたためこの事を詳しく知らず。早朝にお帰りなされた幽々子様は、お爺様を手厚く埋葬され、屋敷ごと

幻想郷へと移転された。

…そして、私はこの幻想郷の土地でお爺様で誓ったのです。お爺様の形見であるこの楼観剣と白楼剣で必ず、時雨蒼巖流の使い手を斬ると！」

話終えると同時に、私は鞘から楼観剣と脇差し程度の長さの白楼剣を、共に抜き放つ。新たに白楼剣を抜いた理由は、彼を必ず斬るという決心がついたから。

ちなみに、幻想郷で主流となっている“弹幕ごっこ”は、彼と闘う間は絶対使わないと決めている。あくまでもこの闘いは、刀と刀の真剣勝負。それを弾幕などというのを使つては、お爺様のとむらい合戦にはならない。この勝負、お爺様から教わった剣術だけで勝つてみせる。

「…山本武、私の話はこれで終わりです。  
では早速、勝負の続きを始めましょう、話した通り、私はあなたを斬りたくてたまらないのですから」

手の痺れも幾分ととれてきた。これでまた存分に暴れられる。  
やっと今日達成できます。お祖父様の悲願を！

「はああっ！」  
そして私は怒りに我が身を任し、二本の刀で山本武に斬り掛かった。

「はああっ！」  
怒りに我を任せ、襲ってくる魂魄。俺は二本の太刀筋を見極め、地面に手を着き身体を大きく反らして攻撃を避ける。

魂魄の話聞き、彼女がどれほど時雨蒼巖流に恨みを持っているかは時雨蒼燕流使いの俺でも痛い程理解できた。

…でも、今の話に俺は妙な違和感を感じた。魚の小骨が喉に刺さった時みたいに、彼女の話を手く飲み込めないのだ。

そんな事を考えている内にも、魂魄の二本の刀から、暴風のような荒々しい斬撃が繰り出される。一撃一撃にずっしりとした重みがあり、絞衝撃とまでは行かないながらも、手の感覚が麻痺してくる。

「…魂魄が今使っている二刀流。これもお爺さんから教わったのか？」

手の麻痺を紛らわす為に、刀をぶつけ合いつつも、魂魄に向かって喋る俺。

「はい。」

正確には、お爺様から教わったのを自己流にアレンジしたのです。いつか来るこの日の為に…」

彼女の刀が頬を掠める、魂魄鋭利な刃の切っ先は、ひんやりとした冷たさと共に痛みが襲って来る。

「…じゃあ、いくつか魂魄に質問したい。」

お前は、お爺さんの仇を討つこの時まで、ずっとその事を目標に生きてきたのか？」だが俺は、そんな痛みにも怯まず、喋り続ける。今度は妙な違和感の正体突き止めたくて…

「…あなたにそれを話す義務など、私には微塵も無い。あまり、変な事を聞かないでくれますか？」

ガキンッ！

その言葉と同時に、俺達の刀が交錯しあう。

彼女の二本の刀は俺の両腕を掠り、俺の時雨金時は魂魄の黒いリボンを斬った。

「…それじゃあ、次の質問。お前のお爺様は京都で一番強い剣士と言ったが、具体的に言ったら、どれ位強いんだ？」

「…それも、あなたに話す義務は無い」

今度はあつさりと切り捨てられ、実際の勝負の方も、二の腕に負った昔の傷口がじわりじわりと痛み出して来る。

「んじゃ、最後の質問。応仁の乱って、西暦何年の出来事だったかな？ すまんが、教えて……」

「いい加減にしろ！」

とうとう魂魄が痺れを切らし、二本の刀を振り上げ、鬼のような形相で俺に斬りかかる。

俺はとつさに、地面に手をついて身体そらして彼女の攻撃を避ける。そして俺は、反撃として時雨金時を斬り上げてみるが彼女の対応が思った以上に速く、二本の刀に弾かれ、体勢を崩されてしまう。

「甘いっ！」

魂魄は、その隙を見逃ず、俺の腹を右足のつま先辺りで思いっきり蹴った後、腹の痛さのせいでうずくまった俺を、刀の峰でボールを打ち飛ばす様な感覚で数十メートル先にある木に叩きつけた。

「……ああ」

何とか気を失わずに済んだ俺は、意識が朦朧としつつ、腹の痛みと闘いながら、時雨金時を杖代わりにしてノロノロと立ち上がる。

そんな俺を魂魄は、蔑む様な表情で見つめていた。

口の中が血生臭い、打ち飛ばされた時に唇でも切ったか？

「魂魄、今の一撃はかなり効いたぜ…もう少しで意識を失いそうになっちまったぞ」

「そうですか…でも、これ位で意識を失わないで下さいね山本武。これ位でくたばってしまったては私の復讐が果たせませんから」

魂魄はそう言い捨てると、二本の刀を構え直す。

はつきり言つて、小次郎と次郎が居ないこの状態で、彼女に勝つのは余りにも難し過ぎる。魂魄は二刀流のお陰で手数が二倍以上に増えていて、彼女の刀を受けるのが精一杯だ。おまけに、二の腕もズキズキと痛んできやがったし。最悪の状況じゃないのか？ これって。

ちなみに、次郎と小次郎の指輪は、時雨金時が入っていた竹刀袋の中にあるのだが、打ち飛ばされた際の衝撃で彼女の足元に落ちてしまったのだ。

なんとか、その竹刀袋を回収しない事には勝つ事なんて不可能に近い。

幸い、今の彼女の頭は、俺への復讐でいっぱい、足元まで注意は回ってないはず。

… なら、俺が時雨蒼燕流の特式型で彼女に、ほんの一瞬の隙を与える事が出来れば、竹刀袋を回収できるかもしれない。

「待つてろよ魂魄、俺だつてきつい一発をお見舞いしてやるぜ…」

俺はすぐさま、雨属性の炎を再び時雨金時にを纏わせ、特式型を放つ為に身体を低くして身構える。

竹刀袋を回収できるチャンスは恐らくこの一回が最初で最後、野球で例えると9回裏の攻撃で2アウト、満塁、フルカウントの極限状態。この作戦が失敗すれば、彼女は足元にある竹刀袋に、気づいてしまうだろう。

一回だけというシビアな条件に、少し焦る俺。

俺は焦りと闘う中、彼女に放つ特式型を考えていた。

… そして

「時雨蒼燕流、特式十の型燕特攻！」  
スコントロ・ディ・ローンディネ

悩みに悩んだ結果、俺は燕特攻を使う事にし、時雨金時に纏わせた雨の炎をえぐるように巻き上げながら、魂魄に突撃する。

「…っ！」

俺の燕特攻に、多少焦りを見せる魂魄。…よし、この調子ならいける！

普段は、前衛に小次郎を配置して使う型なのだが、今回は小次郎が居ないので、幾分かは威力が落ちる。

けれど、そんな事はどうでもいい。なんせ、俺の今回の目的は、彼女の足元にある竹刀袋の回収だ、別に魂魄を傷つける事じゃない。虚勢を張ってでも、わずかな隙を作る事が出来ればそれで良いのさ！！



## 標的20ゝ憎しみの理由ゝ（後書き）

冬休みにはいってそうそうパソコンが二台とも壊れ、修理からかえってきたのが昨日でした。投稿が遅れてすいません。

それと、オリジナル設定を加えすぎました。温かいめで見守ってください。

年内最後の投稿、良い年をお迎えください！

標的21、万事休す、そして解けた違和感、

ガキンツ！

スコントロ・ディ・ローンディネ

燕特攻が、彼女の持つ二本の刀にぶつかった瞬間、今まで以上に激しい火花が辺りに散らばった。

手を伸ばせば竹刀袋まで届く距離。今すぐに手を伸ばして回収してもよいが、焦りすぎて魂魄にその事を悟らせてはいけない。ここは慎重に立ち回らなければ。

刀同士が未だに火花を散らしあつたまま、しのぎを削る。魂魄は燕特攻を受けるので精一杯だったらしく、じわりじわりと後ろへ後退る。

「時雨蒼燕流、攻式五の型五月雨！」

俺は後ずさる魂魄に、駄目押しとして五月雨を放つ。

五月雨は、通常の剣術で言うところの中斬りを放つだけの攻撃だが、これはそんな柔な型じゃない。五月雨は刀を素早く持ち替える事で、相手の守りのタイミングを狂わす変幻自在な斬撃を放つ事ができる型なんだ。

「っ……あうっ！」

案の定、魂魄は守りのタイミングを狂わされ、時雨金時の峰の部分で放った上向きの中斬りをダイレクトに喰らい、宙を舞う。

「よっしゃっ！俺は魂魄が宙を舞った瞬間、心の中で大きなガツポーズをとった。」

小次郎達を回収できれば、きっと魂魄に勝てる。それに、彼女の時雨蒼燕流に対する誤解だって、解ける事が出来るかもしれない。

俺はすぐさま、地面にしゃがみ込み、右手を伸ばし竹刀袋をつかみ取ろうとする。

これで戦況が一変する、俺がそう確信した瞬間だった…

「……うつ！」

竹刀袋を掴んだ左手に突然、ずっしりとした重みと激痛が訪れ、痛みを身体が理解する間もなく、喉元に一本の刀の切っ先を突き付けられた。

「まんまと私の罠にはまりましたね、山本武」

「魂魄。…お前！」

頭上から聞こえる少女の声。俺はやつと今の状況を理解した。

………そう、俺の左手を右足で踏みつけ、丈の長い刀…確か楼観剣の切っ先を俺の喉元にも突き付けているのは、この直前まで宙を舞っていた魂魄妖夢であった。

魂魄は五月雨を喰らい、ボロボロになった目のやり場がない白いシャツを着て、蔑む様な表情で俺を見下していた。

………でも変だな、前から思っていたけど、俺こんなに魂魄の服をボロボロにするまでの攻撃をした事あったっけか？ リボンを斬ったのは認めるけど、服の方はせいぜい少し掠らただけだぞ。

「あなたが何らかのアクションを起こすと思い、足元に落ちていた—それ（竹刀袋）をそのままにしておいたけど、こうも上手く功を成すとは…。一体竹刀袋の中には、何が入っているのでしょうか？ まあ、私はそんな事に興味はないですけど」

「……！」

魂魄は、俺の左手を踏んでる足とは逆の方の足で竹刀袋を蹴り飛ばす。

それでもって俺は、彼女の今の一言で愕然とする。魂魄には俺の

考えていた事がわかっていて、それでいてわざと竹刀袋に気づいていないふりをしていたんだ。俺をおびき出す餌として…

今更ながらそう考えてみると、自分の浅はかさがだんだん齒痒く思えてくる。

おまけに戦況も以前よりまずくなっているし…万事休すだ。  
ははっ、俺って一体何してるたんだろ？

「…にしてもお前。五月雨を喰らって吹っ飛んでたのに、どうしてこんなに早く俺を捕らえる事ができた？ …瞬間移動でも使えるのか？」

「いいえ。私は瞬間移動はできませんけど、空を飛ぶ事が出来るのです。

でも、まさかあなたの闘いで空を飛ぶ事になるとは思いませんでしたか？」

魂魄の言葉に耳を疑った。

鳥の様に空を飛べる？ この幻想郷だと何でもありかよ。

「…山本武。遊びはこれで終わりです。さあ、覚悟はいいですか？  
今、あなたの状態は籠の中の鳥。私の気分次第で生かす事も殺す事だってできる。

命が惜しければ、私に命乞いの一つでもしてみたらいかがですか？」

魂魄が足に今以上の力を加え、右手を踏みつけた。

しかも彼女、俺の怪我をしている二の腕を踏んでいて、閉まりかけた傷口がまた開き、右手に力が入らない程の激痛が襲った。

…この状況を打破する手立てはある。

彼女は時雨金時を抑えてはいないし、上手くいけば少なくとも、この格好からは逃れられる事はできる。

だが、仮にこの状況を打破できたとしてもその後はどうすればいいのだろうか…、右手も小次郎達も使えないこの状況で。

「…へへっ、こりゃ本当に何もできねえな。それに、お前がここまですごい手を使うとは思わなかったよ。

今の作戦もお前の爺さんから習ったのか？」

俺は、何もやる事が無いので、彼女を軽く挑発してみる。どうせ話す義務はないとか言っつて、答えてくれないのがオチだと知っているのに…

「……………そうですね、本当ならあなたにお爺様の話をする義務はありませんが、どちらにしろあなたはここで死にます、ならば冥土の土産として、話してやるのも悪くはない」

しかし、俺の読みは外れた。

戦況が有利になり、多少の余裕を持ったせいか、俺の事を見下し始める魂魄。

もしかしたら、あいつに変なスイッチでも入れちゃったのかもしれない。

まっ、結局俺はどうする事もできないから、あいつの話を聞くとするか。

冥土の土産には、したくないけど…な。

「私があなたに行つあ通称“見て見ぬふり作戦”の元の形は、あなたの言う通り、お爺様が考えたもの。私のお爺様は剣術だけでなく、戦略を練る事にも長けていて、応仁の乱では東軍の軍師として活躍されてました」

きつと作戦の名前について、ツッコミを入れてはいけない。直感でそう感じた。

「東軍の軍師という事は、それなりに有名な人って事だよな。だが俺は学校の授業で応仁の乱を習ったが、魂魄という名前は聞いた事がないぞ、これはどう説明するんだ？」

「…それはきつと、お爺様が偽名を使われていたからでしょう。私達は訳あって魂魄という名を人前ではさらさなかつたから…。だから、偽名のまま記録として残り、後世に残ったのでしょう」

魂魄のおかげで、だんだんこいつの爺さん像が見えてきた。

今までの話を聞く限り、こいつの爺さん、かなりのお偉いさんだったぞ。

剣の腕は京都一、頭脳の方もきつとIQ240位はあるトップエリート。

…………でも何で、時雨蒼巖流の人何かに負けちまつたんだろ？

幾ら夜の奇襲だとしても、時雨蒼燕流の真似をしたアマチュア剣士に負けちまつたなんて。

当時、爺さんの体調がそれ程悪かつたのか……………あるいは初代、時雨蒼巖流継承者はそれほど強かつたのか、かつ……………！！

この瞬間、俺の頭で何かが繋がった。

バラバラだった、時雨蒼燕流、時雨蒼燕流、魂魄妖夢、応仁の乱というピースが一枚の絵を成した時の様に……………

野球の感覚で例えると、相手ピッチャーの渾身のストレートを、バットへし折られながらも、打球をバックスタンドに叩き込んだ……………

……………こんな感覚。

そうか、そう言う事だったのか！

今まで頭に残っていた、彼女の話の違和感が綺麗に消え、顔が自然に綻ぶ。

…これなら、今までに起こった全ての出来事にも説明がつくし納得がいく。

問題は、この事をどうやって魂魄に伝えるのかだけれど、まっ何とかなるだろ。

「……………どうしたんです、山本武。さっきから黙り込んで。ついに命を捨てる決心でも、ついたのですか？」

長らく黙っていた俺を不思議に思ったのか、魂魄が話しかけてくる。

先ずは、この状態から脱出が先決だな。左手の二の腕の痛みも限界を越えているし。…やむを得ん。多少使うのに気が引けるが、奥の手を使わせてもらうか。

「なあ魂魄。今のこの緊迫した状況の中では…あまり言いたくないんだけどさ…、その何というか…今のお前の格好だと…俺は…下からまる見えなんだけれど」

「！！」

顔面を林檎の様に真っ赤にして、咄嗟にスカートに触る魂魄。

だが、俺はこのほんの僅かな綻びを見逃さなかった。

「時雨蒼燕流、攻式八の型　篠突く雨！」魂魄の懷に、捨て身の勢いで飛び込み、時雨金時の峰の部分で彼女を突き上げる。

ここで欲張って竹刀袋を回収しようとしてはいけない。彼女は空を飛ぶ事が出来ると言っていたし、第一こんな間違いは二度と起こしたくない。

俺は直ぐさま立ち上がると、突き上げた魂魄を見ながら、何歩か後ろへ下がる。

魂魄も、突き上げられて地面に落下するまでの間に姿勢を整え、

綺麗に着地。しかし、顔はまだ赤らめたままだ。

……にしても、今まで踏まれてた二の腕の状態、思ったより深刻だな。右手に何の力が入らないし、指を動かそうとしても、指が命令に従ってくれない。

魂魄め、やってくれちゃって…

「山本武…、何度も言いますが、あなたはいつも、何故刃がない方で私を攻撃する！ あなたは、私との闘いを…この期に及んでまでも、舐めているのですか！」

怒声にもとれる大きな声で叫ぶ魂魄。そーいや、昔にも銀髪的口ン毛の誰かさんから言われた事があったな。

「別に、俺達は人殺す為に剣術習ってる訳じゃないからな。

お前に何を言われようと、刃のある方では絶対にお前を攻撃しないよ。これは、俺が絶対に曲げる事の信念…いや、ポリシーだ」

つい昔の癖が出たせいか、俺の部分が俺達になってしまった。

ツナ達、今ごろ何してつか、もしかしたら俺と同じで、幻想郷に居たりして…まっ、でもこんな夜遅くまでは起きてたりしないか。

「…そうですか。あなたがその気ならば、私も自分の信念を通させてもらいます。」

そう言つと魂魄は、再び二本の刀を構えて、俺に突撃してくる。

普通なら、時雨金時でその突撃を防ぐか、身体を動かして避けたりするのだが。

この時の俺は…



標的21、万事休す、そして解けた違和感（後書き）

あけましておめでとうございます。

最近、異常に気温が悪いせいか、手がかじかんで誤字脱字が大量にあると思います。

何か誤字等があったらお願いします。

あと、妖夢のキャラを限り無く崩壊させてしまい、ごめんなさい。

でわ！

## 標的22　く黒幕の登場く

あえて地面に時雨金時を落とし、丸腰の状態になり、身体を低く身構えると、向かって来る魂魄をじつと見つめた。

「!？」

俺のした常識はずれな行動に、表情を苦くする魂魄。しかし、それでも突撃してくるスピードは落とさない。

……こりゃ、失敗したら身体はただじゃ済まねえぞ。まっ、絶対成功させるから問題はねえけど。

「はあっ!！」

ついに俺と魂魄の距離が無くなる。

そして、彼女は大きな掛け声と共に大きく地面に踏み込むと、俺に向かって丈の違う二本の刀を振り下した。  
もちろん、刃のある方で。

斬られたら……死ぬ。

そんな死の覚悟をしながらも、俺はその二本の刀の太刀筋から目を離さなかった。

「悪いな魂魄、俺もここで易々と斬られて死ぬ訳にはいかないんでね!」

しかし、俺も引かなかった。

俺は二本の刀の軌道から目を逸らさず、振り下ろされた二本の刀を両手の人差し指と中指の二本の指を立てて受け止めた。

つまり、真剣白刃取りの片手バージョン。……にしてもよかった。

何とか出来たぞ、雨属性の鎮静効果を応用し、即席で作った、片手真剣白刃取り。

「ぶっちゃけ、この技は俺にだって成功するかどうかわからなかったさ。

お前に勘づかれて、太刀筋をずらされたらそれで終わりだったし………」

俺は白刃取りの成功に安心して、低い姿勢を崩し、ふう、とため息をついた。

そして、受け止めていた彼女の二本の刀から指をそつと離す。

「………どうだ魂魄？ その格好から身体が動かねえだろ？」

「…私の身体に何をしたのです、山本武？」

動かない自分の身体に焦りを感じたのか、動揺を見せる魂魄。

まあ、思う様に動かないのは無理もないか。

俺が何回もあいつの身体に、雨属性の死ぬ気の炎を入れといたからな。

それが、今になってやつと作用したんだろう。

まあ、雨属性の炎が作用してくれなかったら、白刃取りは成功しなかったのだけど。

「何をしたって言われても、俺はただ、この水色の炎を魂魄の身体に入れてただけだぜ、刀に纏わせてな」

俺はボンゴリングから死ぬ気の炎を出し、魂魄に見せびらかしながら話す。

「…………だから、このままじっとしておいてくれよ。俺だって、これ以上お前を傷つけたくはねえからさ」

「敵なのに、傷つけたくは無い？ ……矛盾してますね。我々は敵だから闘う、なのに何故、あなたは敵である私を助けようとするのです？」

俺の言葉を疑問に思ったのか、俺の目を、じっと見つめながら話す魂魄。俺も負けずと、魂魄の目を見つめる。

「…………べつに、人が人を助けるのに理由なんて必要かよ？ それに、魂魄は十分に可愛いからな、…そんな奴の苦しむ顔を俺はもう見たくないんだ」

俺が喋り終わると同時に、魂魄の頬が林檎の様に朱く染まり、表情を見られまいと顔を俯せる。

……………はて、何で顔を真っ赤にすんだ？

俺は魂魄の様子を不審に思いつつ、青い竹刀袋を探しに行く。

いやゝ、やつぱりこうやって、彼女の動きを封じてから取りに行くべきだったな…

魂魄の事を気にせず、ゆっくり探せるし、第一腕の傷も深める事はなかったのに。

「…で、目の前の私を拘束し、闘いが終結してしまった今、あなたはとうするのです？ この幻想郷にいる限り、あなたは何処にも逃げられないし、元の世界に戻る事も困難なはず」

ようやく竹刀袋を見つけ、再び魂魄を拘束している所に戻った時、不意に彼女から声をかけられた。

「…さあな？ 元の世界に戻ると言われても…。なんせ俺はまだ、やるべき事をやっていないし…」

「…？」

俺の言葉を変に思ったのか、魂魄は不思議そうな顔をする。

さて、そろそろ頃合いかな？

俺は魂魄に笑いかけ、再び時雨金時を構え直すと、誰も居ない筈の夜の桜並木に、魂魄にも聞こえる様な大きな声で、こつ問い掛けた。

「そろそろ姿を現してもいいんじゃないか、魂魄の爺さんよ」

十 十 十

「そろそろ姿を現してもいいんじゃないか、魂魄の爺さんよ」

「……！？」

山本武の一言で、半人半霊の庭師、魂魄妖夢はハツとする。

幾ら山本武によつて、身体を思ふ様に動かせ無くても、魂魄は視線を動かし山本武をまじまじと見据えた。

「……………冗談にしては笑えないですね、山本武…」

私は言葉を紡ぐとしても、これ以上繋げる言葉が見つからずもごもごと口ごもる。

にしても、さっきからの山本武は変だ。いきなり、私が可愛いなと言ったり、私の御祖父様がまだ生きてる様な事を言い始める。

そんな、私の考えを知らない彼は、ただただ暗闇に覆われる、桜並木を見つめていた。「……………」

もう、5分は経過しただろうか。桜並木からは、人の声はおるか心配もしない。聞こえるのは風が木々を揺らす音だけ。

私は気を取り直し、山本に話しかけようとした、その瞬間だった。私は暗闇の桜並木に隠れる人影を見るなり、言葉を忘れ凍りつく。

「……………おじいさ……………ま？」

暗闇から姿を現したのは、見た目65歳位の老人。白髪が混じった髪、しわくちゃな顔には幾つかの切り傷があり、還暦を過ぎながらも颯爽としたその姿は、死んだ筈のお祖父様、魂魄<sup>こんぱく</sup>妖忌<sup>ようぎ</sup>その物であつた。

妖忌祖父様は、私と山本武を交互に見るなり、しゃがれた声を発する。

「久しぶりじゃな、妖夢。元気そうだなによりじゃ、剣術の訓練は毎日怠つてないか？」

…これは夢？

私の憧れであつた御祖父様にせっかく会えたというのに、私は素直に喜べなかつた。どうして、御祖父様は私をかばって死んじやつた筈なのに……………

妖忌は、わたしの心情を察知したのか、穏やかな笑みを浮かべ、話しかける。

「まあ、驚くのも無理もない。死んだと思った者が、何の前触れもなく目の前に現れるのだからな。」

「…………でも、待ってください御祖父様。それでは、私が今まで仇  
と思っていた山本武の…………時雨蒼巖流はどうなるのです！　これ  
では…………」

“ 真実は、斬ってから知る ”、お前はわしの教えを貫き通した。  
それで、良いではないか妖夢

“ 真実は斬ってから知る ” 御祖父様が口癖の様に言っていた教え。  
今回の場合は山本武は何も悪くない、ただ私が逆恨みをしたただけだ  
ったという事だ。つまり、彼は何の罪もないそれなのに、私は……  
…そんな彼を本気で殺そうとしたのだ。

私は罪悪感と脱力感を一気に感じ、目を閉じる。山本の雨の何と  
か作用のせいで、地面に座る事もかなわない。

「それと、少年。私が居ると何処で気付いた？」

「まあな、ぶっちゃけて言うとな俺は最初から怪しいと思ってたぜ、  
その時はまだ居るのがあんだとは気付かなかったが」

刀を肩に乗せ、穏やかな表情で話す山本。しかし、その表情の中  
には秘めたる怒りがある、私はそう感じた。

「…………最初からか、少年その根拠わしに話してくれるか？」

山本の話に興味津々な御祖父様。あんなに、楽しそうな顔をした  
御祖父様は、私も初めて見た気がする。いつも御祖父様は無表情で  
あったから…………

「ああ、別にいいけどよ。でもこれはあくまで俺の予想だ、話を

聞いて気分を悪して襲い掛かるのだけは止めて欲しいぜ。俺はそれで一回死にかけてるんだ」

「…わかった、それは約束しよう」

妖忌が言葉を言い終わると同時に、山本の刀も竹刀へと姿を変える。

「俺が魂魄との闘いで真つ先に怪しいと思ったのは、俺が逆巻く雨から車軸の雨を放った……つまり、俺の刀の先端が魂魄の頬を掠った時の事。」

俺は右頬を狙ったつもりだったんだが一何故か反対の頬にまで斬り傷がついていたんだ（……………）

「ほう…それで」

妖忌は、含み笑いを込めて山本を見つめる。彼もその視線に気づいたのか、肩をすくめて話しを続ける。

「次もまあ、同じ事だよ。魂魄が最初に着ていた緑色の奴も、俺は斬った覚えすらないのに、まるで何かの爆発に巻き込まれたかのようにはボロボロだったし、今彼女が着ているシャツも俺は一太刀しか浴びせてないのに、目のやり場に困るほどの酷い荒れよう……誰だって、この様子を見たら、おかしいって気づくさ」

なるほど。

私は彼の話しに深い共感を覚えた。たしかに山本の言葉が正しいのなら、私の衣服をボロボロにしたのは第三者、つまり暫定的には妖忌という事になる。

でも、もし仮にそうだとしても妖忌はどうやって私達に気付かれずに攻撃をしたのだろう。刀を使って攻撃をするのであれば、いく



ら戦闘に集中してた私や山本だって気配で絶対に気付く筈なのに。

「しかし少年。それでは、わしはどうやって妖夢を傷つけたのじゃ？　いくらお前らが戦に集中していても、わしの気配くらいは察知できるじゃろて？」

「……………弾幕だよ、弾幕。誰にも気付かれずに魂魄（・・・）だけを狙う攻撃手段。」

俺の攻撃と上手くタイミングを合わせれば、本人にも気付かれる事もなくやれる筈だぜ。

……………身体 of 痛みで魂魄の冷静な思考回路を麻痺させ、俺を攻撃させるだけのマシーンとして起動させる事もな」

たしかに、私は傷の痛みのせいで、彼の話をまともに聞かなかつたけれども、マシーンというのは言いすぎな気がする。

そんな私を一瞥した山本は、今までの穏やかな様子が嘘の様な、鋭い視線と殺気こもった声を妖忌にぶつける。

「お前は昔、京都の中で随一と言われた剣術の腕を持ち、何とかの乱で軍師を務めてたらしいな。それでもって、頭の良いあんたはこう考えたんじゃないのか？　時雨蒼巖流の剣士に殺されたフリをし、自分という存在はその日死んだ（・・・）という事にして、今日みたいな日を待ってたんだろ、やっと自分とやり合える様な実力を持つ剣士が現れるこの日を……………」

「……………なるほどな。そこまで見抜かれていたか…。いやはや、君ならあの流派の継承者というのも領ける」

妖忌の顔からも一切の笑みが消え、食い入る様に山本を見つめる。

山本も山本で、戦闘準備といわんばかりに、自分の持つ竹刀を真剣に変化させ水色の炎を纏わせる。

「俺だって、時雨蒼燕流を使う剣士だ。あんたが考える事は解らなくもないぜ、自分と同じ。あるいは自分よりも強い剣士と闘う、それは剣を扱う人間であれば誰だって思う夢だ、俺も昔そう思った事もある。

だが、自分の希望を叶える為に、あんたは娘である妖夢の純粋な心を弄んだ。

妖夢がどれ程の覚悟と憎しみを持って俺を。いや、爺さんの仇を討とうとしたかわかるか！？俺は妖夢と剣を交えたから、あいつの気持ちってもんが。独りよがりかもしれないが理解できる気がしたんだ

」

そして、山本はカチャリと刀を中段に構える。

「だから俺は、妖夢を弄んだお前を、絶対に許さねえ！！」

山本が全ての言葉を言い終えた時、不本意ながらわたしは、彼に胸を突き動かされてしまっていた。

## 標的22 く黒幕の登場く（後書き）

英検やら、小テストやら、学年末考査やら、校内実力やら、郊外実  
力やらで投稿が一カ月以上先送りになりました。

弁解の余地もありません、こんなしょうもないcocoaを許して  
やってください…

## 標的23 〽VS魂魄妖忌〽

「はああっ!!」

俺は時雨金時を上には振りかざし、目の前の老人に向かって斬りかかる。

「確かに、剣の腕は悪くはなさそうだが……だが、太刀筋が単調だな」  
「……っ!」

「とても解り易い」

妖夢の爺さんは俺の斬撃を澄ました顔で避け、無駄のない動きで間合いを取る。

辺りの空も、うつすらと明るくなり太陽が覗きだそうとする頃。  
つか、そんな時間まで妖夢と闘っていたのか、俺!?

「……そういえば少年、貴様の名は何と言うのだ? 相手の剣士の名を知らぬまま、刃を交えるというのは無礼じゃからな。  
わしはお前の名前を知りたいのだが」

右手を顎にそえ、白い髭をいじる爺さん。

「………… えっと、自己紹介。まだしてなかったっけな。」

「俺の名前は山本武。親父から教わった時雨蒼燕流を使い、友達<sup>ダチ</sup>を守る為に力を使う剣士だ。……爺さんの名前は?」

「山本武か…………。わしの名は、魂魄<sup>こんぱくようき</sup>妖忌、半人半霊の庭師であり、己の道を探す剣士」

妖忌と名乗った爺さんは、そこまで言うと言った腰に差してた獲物を鞘

から抜き放つ。

それは、長さ1・2メートル位の日本刀、いや野太刀で、刀の種類について、全く知らない俺でも、かなりの質の良い太刀であると容易に想像できた。

「山本武、私は相手が誰であれ手加減はせんぞ、全力で行かせてもらっ」

「上等だ、相手が爺さんだろうが本気であんたを倒すぜ、爺さん！」

俺の言葉が終わると同時に、刀を大きく振り上げ、真っ直ぐにこちらへ駆けてくる妖忌。

「「はあっ!!」」

地面を強く蹴り、妖忌が放った初撃。

俺は時雨金時に大量の雨の炎の炎圧を加え、向かえ撃った。

+

+

+

「……………っ!？」

頭の中で突然感じた強い炎圧。俺、沢田綱吉はそのハンパない強さの炎圧に思わず、布団の中から飛び起きてしまった。

「…痛っつて!？」

そしてその飛び起きた直後、俺はフランドールとの闘いで負った傷と、筋肉痛の痛さでボロボロになった俺の体が猛抗議し、俺はその場に膝について座り込んでしまう。

幸い、リボーンは今の声で目を覚ます事も、違う部屋で寝てる東風谷も駆け付ける事もなかった。

「……………にしても、今感じた炎圧は何なんだろう？」

体の痛みに耐え、千鳥足で何とか縁側までたどり着いた俺。空は鬱すらと明るく、朝日はまだみえないけれども、幻想的な風景が目の前に広がっていた。

眼前に広がる風景に心を奪われそうになりながらも、俺はさっき感じた炎圧について考え初めた。

そもそも、何故俺が死ぬ気の炎の炎圧を感じられる様になったのかは、実のところよくわかっていない。何の為にこんな技を編み出させたのだろうか？

こういう時に、なにかと力になってくれそうな<sup>フリーモ</sup>I世もフランドール戦以来、夢に出て来る事はなかった。

「……………だけど、俺が感じたあの炎の出力……………ボンゴレリングによく似ていたな」

俺はそこまで呟くと、空の景色に見入った。

「雨のボンゴレの守護者っていったら、山本か……………あいつ今、何してんのかな、もう起きて野球の朝練とかしてたりして」

そして俺は、さらに目の前の風景に見入る。

「でも、もしかしたらあいつも幻想郷に居たりして……………ってまさか!？」

俺は、そこまで呟くとハッとした。というより、今まで気がつか  
なかった事に腹を立てた。

俺の知る中で雨属性の炎を使う奴はただ一人、山本しかない。  
それに、この炎の出力は絶対ボンゴレリングのものだ。なんせリン  
グを使っている俺が言うんだ、間違いない。

「リボーン、起きてくれ！！ 大変なんだよ、どっかで山本が闘っ  
てる！」

俺はすぐさま部屋に引き返すと、ギブスで固定していない右手でリ  
ボーンを揺さぶり、起こさせようとする。

「……………すか…ぴー……………」

「リボーン！！」  
しかし、リボーンは俺の言葉が耳に入っていないのか、全然起き  
る気配がない。

……………くっそ！ もしこのまま、山本が幻想郷のわけのわからな  
い規格外の奴らと闘うのだとしたら、それだけは絶対に止めさせた  
い。俺はフランドールと闘って、幻想郷に奴らの強さというものを  
痛いほど見せつけられた。それに、何と言っても大切な友達を傷つ  
けさせたくはない、それが親友ならなおさらだ！

「リボーン！！」

「うつせえな、こんな朝っぱらから大声を出すな、馬鹿ツナ！！」

寝袋から飛び出したリボーンは、俺の右頬に強烈なキックを入れ  
無駄の無い動きで床に着地。

「やった起きてくれたか、リボーン……」

俺は蹴られた頬をさすりながら、リボーンに話しかける。

「リボーン、大変なんだよ、今山本がさ……」

そして俺は、リボーンに事の顛末を説明する。

リボーンはフムフムと相槌を打ちながら聞いてくれた。

「なっ、わかっただろリボーン？ とにかくやばいんだって。俺はこれからあいつを助けに行く。……もちろんお前も着いて行くよな？」

山本の居る場所はわからないが、あいつの炎圧を、もう一度感じられれば何とかなるはずだ。早速俺は、そこに向かう為に寝巻きである東風谷から借りた和服から私服に着替えようとする。

「……………おい、何急いでんだツナ。俺は一回もお前に着いて行くとは言っていないぞ」

「はあっ！？」

リボーン言葉に、服を脱ぐのを止める俺。

「いいな。俺は着いていかねえぞ、というお前を山本の所には行かせないぞ。山本が危ないと言っても、あいつは仮にもボンゴレの守護者だ、山本も山本なりになんとかすんだろ」

「何悠長な事言ってるんだリボーン！！ お前も自分の目で見ただろ、幻想郷の怖さってのを……………」

「なら、尚更ツナは山本の所に向かわない方がいいぞ。ツナ、お前今自分の身体の状態をしてみる。そんな身体で応援に駆け付けても、邪魔になるだけだ。だから今は、傷の治療に専念しろ」



「…………でも」

「でも”も、”かも”もねえ。もしお前が俺の話しを聞けないなら、力ずくでも止めるぞツナ！」

変身カメレオンのレオンを拳銃に変身させ、銃口を俺に向けるリボーン。俺は、リボーンにことごとく言い負かされ、言い返す事も出来ない。

親友のピンチにも駆け付ける事が出来ないだなんて、俺はなんて薄情な奴なんだ！

今の俺は、とても無力でみじめであつた。

+

+

+

「くっ…、爺さんあんた中々やるな」

「少年こそ、とても良い動きをするではないか!!」

妖忌との戦い、口ではこう言ってみた物の現在の戦況はかなり不利であつた。

…………… なんとと言ってもこの爺さん、無茶苦茶強い!! さすが、京都一の腕の持ち主。冷静な太刀捌きで俺の攻撃を全てかわし、ここぞという場面で連続技を決めてくる。

今まで闘っていて、やられると思つた場面が何回も合った、

「…こりや俺も、出し惜しみしてたらやられるな。来い、次郎！」

俺は妖忌から一度距離を取ると、指に嵌めた次郎を呼び出し、俺は次郎から変則4刀の内の小刀2本を受け取る。

これを使うのも懐かしいな、何年ぶりだ？　できれば、もう二度と使いたくなかったのに。

「……………ほう、刀身がない小刀とは。どんな使い道があるのかね？」  
好奇心な目を向ける妖忌。

「こつやって使うんだよ、爺さん」

そして俺は、小刀の本来刀身がある筈の部分から雨の炎を噴射させ、空へと高く飛翔する。

「地上戦は飽きたから、次は空中戦でという事か……………面白い！！」

妖忌は小さく笑うと、まるで背中に翼でも生えてるかの様な勢いで宙に浮かぶ。

やっぱ幻想郷、何でもありだな…

「さあ爺さん、今度こそあんたを倒すぜ。なんせ、人の策に嵌められっぱなしってのは、面白くないんでな」

夜が明けそうな空の中、爺さんとの戦いの、第二ラウンドが始まるうとしていた。

## 標的23 〱VS魂魄妖忌〱（後書き）

さて、山本VS妖忌の闘いがはじまりました。

今回は空中戦をメインにして書けたらなと思っています。

次回には、山本の新しい技が登場！？…するかも知れません。

最後に、誤字脱字でもありましたら、よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4911n/>

---

Una fantasia del vongole ~ ボンゴレの幻想 ?世の軌跡~

2011年4月24日16時58分発行